

2023
年度

教師海外研修報告書

Study Tour For School Teachers

【ペルー/Peru】



JICA 関西

独立行政法人国際協力機構 関西センター

研修概要	1・2
事前研修概要(国内研修)	3
事後研修概要(国内研修)	4
海外研修概要	5
研修国概要	6
主要なJICAプロジェクト紹介	7
海外研修の様子	8～10

参加教員による授業実践

小学校

横山 太(河内長野市立楠小学校)	12～17
藤澤 幸二郎(寝屋川市立堀溝小学校)	18～25
天下 若菜(京都市立竹田小学校)	26～36
酒井 春菜(神戸市立菅の台小学校)	37～45
竹辺 このみ(津市立堅田小学校)	46～53
田端 浩多(天理市立朝和小学校)	54～61

中学校

内海 拓人(京都市立大淀中学校)	62～67
里見 拓也(大阪市立佃中学校)	68～76
金場 澄人(和歌山市立東和中学校)	77～82

高等学校

益田 由布子(兵庫県立舞子高等学校)	83～90
河本 陽詩(兵庫県立須磨東高等学校)	91～98

JICA の開発教育支援事業

独立行政法人国際協力機構(JICA)では、国際協力に関する知識の普及と国民の理解の推進を果たすべき使命の一つとしており、教育を通じたアプローチとして、国民への開発途上国に関する「知見の還元」、自分に何ができるかを「考える機会の提供」、およびJICAが地域での開発教育推進のための「橋渡し役」となることの3点に重点を置きながら国際理解教育・開発教育の支援に取り組んでいます。

JICA関西では、教育委員会や教員の皆様、大学や自治体、NGOの皆様と連携しながら所管地域である関西2府4県(滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県)を対象に、国際協力出前講座や、JICA関西施設訪問プログラム、教師海外研修、開発教育指導者研修等のプログラムを広く展開し、地域での開発教育・国際理解教育を支援しています。教師海外研修は、その一つです。

教師海外研修とは

1:研修概要

■研修目的

誰もが安心して暮らせる「だれ一人取り残さない」社会づくりは、世界でも、地域でも、そして学校でも共通する課題です。

教師海外研修は、関西2府4県の教職員が実際に開発途上国を訪問し、国際協力の現場の体験や開発途上国の現状・課題、日本との関係について理解を深め、その成果を、学校現場での授業等を通じて次代を担う児童・生徒の教育に役立ててもらうことを目的として実施しています。

また、研修参加者がその経験を学内外に広く発信し、開発教育・国際理解教育の実践者として活躍いただくこともねらいとしています。

本年度は中南米・ペルー共和国を訪問し、JICAペルー事務所をはじめ、ペルー日系人協会、日本・ペルー地震センター、日系学校などを訪問しました。中でも日系学校への訪問や、現地の教員との出会いは、研修に参加された先生方の帰国後の授業実践にも活かされる機会となりました。

■主催

独立行政法人国際協力機構 関西センター(JICA関西)

■後援

関西2府4県ならびに政令指定都市の教育委員会

■参加人数

関西2府4県の学校教員11名

2:2023年度研修の流れ(全体スケジュール)

募集

- 募集(4月上旬～5月下旬)
- 結果通知(6月上旬)

事前研修

- 第1次研修 2023年6月24日(土) オンライン研修
- 第2次研修 2023年7月1日(土)～2日(日)

研修の目的や参加意義を明確にし、本研修の効果を高めるため、開発教育や多文化共生に関する基礎講座・ワークを実施しました。

本研修

- ペルー海外研修 2023年8月12日(土)～20日(日)

事後研修

- 2023年9月2日(土)

海外研修の学びを整理し、実践授業を検討するための事後研修を実施しました。

授業実践

- 勤務校における授業実践(2023年9-12月・原則)

研修参加者は、研修の学びを各自の所属校における授業実践を通じて還元しました。

教師海外研修報告会

- 2024年2月4日(日)

国際協カイベント「ワン・ワールド・フェスティバル」内にて実施

開発教育/国際理解教育の継続的な実施へ

- 日時:2023年7月1日(土)～2日(日)(一泊二日) ●場所:JICA関西 オリエンテーションルーム
- 目的:①研修目標の理解 ②開発教育・国際理解教育の基礎を学ぶ ③派遣国概要を学ぶ

時間	内容	講師/担当	
7月1日 (1日目)	10:00-11:15	オリエンテーション ・自己紹介 ・海外研修趣旨の確認 ・事前研修目標の確認 ・派遣国基礎概要(ペルー)	JICA関西 市民参加協力課 後藤田 路子
	11:30-12:30	派遣国概要①「JICA海外協力隊体験談」 ・ペルー活動経験のある協力隊活動談 ・現地の活動、生活 ・日本の先生方にいま知って・現地で見てもらいたいこと	JICA海外協力隊 松下 芽依 (2018年度1次隊、環境教育、ペルー)
	12:30-13:30	昼休憩	
	13:30-15:00	派遣国概要②「日本の中のペルー」 ・ロクサナさんの来歴(日本での生活、ご経験) ・国内で行う活動について(定住者による外国人支援) ・海外で行う活動について(JICA草の根技術協力: 在日日系人が培った知識と経験を生かしたコミュニティ防災力強化事業)	ひょうごラテンコミュニティ 大城 ロクサナ
		休憩	
	15:10-16:10	ワークショップ 手法の紹介:フォトランゲージ「オチのある写真を撮ろう」	JICA関西 教師海外研修アドバイザー 兵庫教育大学 佐藤 友紀
		休憩	
	16:10-16:30	現地研修:プログラム説明 ・各日プログラム詳細 ・役割分担 ・注意事項	JICA関西 市民参加協力課 後藤田 路子
	16:40-17:15	振り返り 事前課題:自分のリサーチクエストを踏まえて ・今日学んだこと ・さらに理解を深めたいこと	JICA関西 教師海外研修アドバイザー 川崎医療福祉大学 山中 信幸 兵庫教育大学 佐藤 友紀
	17:15-17:30	事務連絡	
		JICA関西チェックイン	
夕食後	現地研修プログラム準備(続き)		
7月2日 (2日目)	9:00-12:00	講義&ワーク「開発教育について」 ・開発教育とは? ・手法の紹介(ワークショップ体験) ・多文化共生の考え方	JICA関西教師海外研修アドバイザー 川崎医療福祉大学 山中 信幸 兵庫教育大学 佐藤 友紀
	12:00-13:00	昼休憩	
	13:00-14:00	過年度参加者からの報告 ・教師海外研修の経験、帰国後の教育活動 ・参加者へのメッセージ	倉 公一 (2017教師海外研修、ネパール) 木村 あずさ (2019教師海外研修、ルワンダ)
	14:00-15:00	現地研修:アウトプット準備 現地のアウトプット内容、今後の準備スケジュールの検討	JICA関西 教師海外研修アドバイザー 川崎医療福祉大学 山中 信幸 兵庫教育大学 佐藤 友紀
		休憩	
	15:10-17:00	講義&ワーク「授業実践に向けて」 ・教材づくりの考え方の紹介 ・自分自身の関心事項の見直し ・授業実践に向けて必要な素材の整理	JICA関西教師海外研修アドバイザー 川崎医療福祉大学 山中 信幸
17:00-17:30	事務連絡 ・海外研修に向けて(諸注意、役割分担再確認) ・今後のスケジュール ・流れ	JICA関西 市民参加協力課 後藤田 路子	

- 日時:2023年9月2日(土) ●場所:JICA関西 オリエンテーションルーム
- 目的:①本研修の学びの振り返り ②実践授業に向けた意見交換 ③実践ヒントの共有

時間	内容	講師／担当	
9月2日	ワークショップ① (1)海外研修の振り返り ・日誌をもとに、日々のできごとを思い出す (2)学びの整理 ・ペルーと日本(つながり、日系社会) ・防災 ・ペルーという国(予想外びっくり含む)	JICA関西 教師海外研修アドバイザー 兵庫教育大学 佐藤 友紀 川崎医療福祉大学 山中 信幸	
	12:00-13:00	昼休憩	
	13:00-13:30	グループワーク 「アイデンティティ」の要素ってなんだろう?	JICA関西 教師海外研修アドバイザー 兵庫教育大学 佐藤 友紀
	13:30-14:30	ワークショップ② リサーチクエストに沿ってふりかえる ・児童・生徒に伝えたい内容・キーワードの整理 ・意見交換	JICA関西 教師海外研修アドバイザー 兵庫教育大学 佐藤 友紀 川崎医療福祉大学 山中 信幸
	14:45-16:30	ワークショップ③ 授業実践に向けてのプランニングと意見交換 ・具体的に書き出す(テーマとメッセージ/学年/時間数/内容/手法 など) ・相互のブラッシュアップと全体共有	JICA関西 教師海外研修アドバイザー 兵庫教育大学 佐藤 友紀 川崎医療福祉大学 山中 信幸
	16:30-17:00	事後連絡 (1)報告書作成と今後の流れ (2)事務連絡	JICA関西 市民参加協力課 後藤田 路子

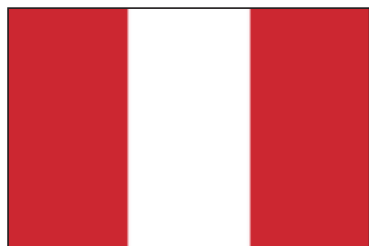


事後研修



目的: JICA事業や国際協力への理解深化を通じて、世界に関心を向ける/世界と日本との関わり、日本国内の多様性に気づく(多文化共生)/防災等の世界共通の開発課題に気づく

実施日		時間	訪問先	内容
8月12日 —8月13日	土—日		伊丹—羽田—アトランターリマ	
8月14日	月	9:00	ペルー事務所訪問	【地区名:San Isidro】 JICAペルー事務所
		14:00	・ペルー日系人協会(APJ) ・日本人ペルー移住史料館 "平岡千代照"	【地区名:Jesús María】 JICA海外協力隊/田辺さん(日本語教師)
8月15日	火	9:00	ホセ・ガルベス校	【地区名:Callao】 当地最古の日系校 JICA助成金交付事業(2021年度)
		14:00	ホセ・ガルベス校	ホームビジット
8月16日	水	9:00	ラ・ウニオン校	【地区名:Pueblo Libre】 当地最大の日系校 JICA助成金交付事業(2021年度)
		14:00	ラ・ウニオン校	ホームビジット
8月17日	木	9:30	日本・ペルー地震防災センター(CISMID)	【地区名:Rímac】 CISMID内の防災啓発センター、 構造物ラボ、 地震モニタリングセンター
		14:00	中央広場(Plaza de Aramas) 大統領官邸(Palacio Presidencial) 現地市場(Mercado Surquillo)	地区名:Centro de Lima 地区名:Surquillo
8月18日	金	9:00	ミ・ペルー地区	【地区名:Callao】 草の根コミュニティ防災プロジェクト JICA海外協力隊/柏木さん(防災)
		15:00	振り返り	JICAペルー事務所
8月19日 —8月20日	土—日		リマ—ロサンゼルス—羽田—伊丹	



ペルー共和国 Republic of Peru

- 首都:リマ
- 面積:約129万平方キロメートル(日本の約3.4倍)
- 人口:約3,297万人(2020年、世銀)
- 民族:メスティソ(混血)60.2%、先住民(ケチュア、アイマラ、アマゾン先住民等)25.8%、白人系5.9%、アフリカ系3.6%、その他(中国系、日系、その他)4.5%
<2017年ペルー国勢調査>
- 言語:スペイン語(他にケチュア語、アイマラ語等)
- 宗教:カトリック81%、プロテスタント13%、その他6%
- 政体:立憲共和制
- GDP(名目): 2,020億ドル(2020年、世銀)
- 一人当たりGDP: 6,127ドル(2020年、世銀)
- 通貨: ソル
- 日本の援助実績:
 - ①有償資金協力(2019年度まで、借款契約ベース)4,216.00
 - ②無償資金協力(2019年度まで、E/Nベース)673.97
 - ③技術協力実績(2019年度まで)585.09<単位:億円>
- 主要援助国(2017年度):
 - ①ドイツ(209.48)
 - ②米国(142.88)
 - ③フランス(92.39)
 - ④日本(21.07)<2020年、OECD/DAC統計、支出額ベース、単位:百万ドル>



<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/peru/index.html>

ペルーは、世界的な鉱物価格上昇に伴う鉱物資源の輸出拡大等に牽引され、安定した経済成長を続けています。一方、依然として貧富の格差が大きく、国民の3割以上が貧困層に属しています。

JICAは、①経済社会インフラの整備と格差是正、②環境対策、③防災対策を重点分野としてペルー政府の社会的包摂を伴った持続的な発展に向けた取り組みを支援しています。

地震直後におけるリマ首都圏インフラ被災程度の予測・観測のための統合型エキスパートシステムの開発

●実施期間:2021年9月8日から2026年9月7日

ペルーは、地震・津波が多発する国のひとつです。これまで大地震が複数回発生し、いずれも多くの死傷者と経済被害をもたらしており、持続的開発の弊害となっています。特に、同国総人口の3割強を占めるリマ首都圏で大地震が発生すれば、主要な社会インフラやライフラインへの深刻な被害は免れません。この協力では、リマ首都圏において、地震・津波発生時の被害予測の高度化、建築物・ライフラインの被災度即時評価システムの確立により、それらの情報を統合したエキスパートシステムの構築及びシステム活用のための人材育成を図り、ペルーの地震・津波に対する災害対応能力強化(二次被害の低減及び復旧・復興の迅速化)に寄与することを目的としています。



©CISMID

在日日系人が培った知識と経験を生かしたコミュニティ防災力強化事業

●実施期間:2023年1月～2028年1月

ペルーは環太平洋地震帯に位置する地震・津波多発国であり、これらの災害は同国の社会・経済に大きな被害をもたらす、同国の持続的な発展の阻害要因となっています。そのような状況の下、兵庫県神戸市にある特定非営利活動法人エフエムわいわいは、一般社団法人ひょうごラテンコミュニティと共に、ペルーの中でも特に災害リスクの高いカヤオ特別郡ミ・ペルー区におけるコミュニティ防災力強化を目的とした草の根技術協力事業を実施しています。

本事業は、区内の住民有志が立ち上げた自主防災組織、ミ・ペルー区H地区近隣災害リスク管理委員会(CVGRD)と、同じく区内で就学前、初等、中等の教育を行う公立教育機関、フェ・イ・アレグリア第33校(FA33)をカウンターパートとして、現地の人々と協働して避難訓練や防災教育を行うことにより、地域のコミュニティ防災力向上を目指しています。



日系社会連携事業

ペルーは南米で組織的な日本人移住を最初に受け入れた国で、1899年(明治32年)ペルー第一回移民790人が横浜港を出港(佐倉丸)して、同年4月3日にカヤオ港に第一歩を記したのが始まりです。戦後は、2,615人が移住。現在でも約10万人とも言われる中南米で2番目に多くの移住者・日系人が在住しており、政治・経済・学術など各方面で活躍しています。JICAは、日系社会のさらなる発展とペルーの国造りに貢献するため、日系社会研修員受入事業や日系社会次世代育成研修を通じて、移住者・日系社会連携事業に取り組んでいます。



【JICA関西教師海外研修 現地レポート①】

JICA関西は、開発教育・国際理解教育に関心を持つ関西圏の教職員を対象に、開発途上国現地を訪問し、現地事情や日本との関係への理解を深め、その成果を国内の教育に役立てる機会を提供することを目的として「教師海外研修」を実施しています。

今年度は、日本との国交樹立150年を迎えた南米・ペルー共和国を研修国へ、関西二府四県から11名の小学校・中学校・高校教員らが訪問します。次回からは、新型コロナウイルス感染拡大の影響を経て4年ぶりに開催される海外研修の様子を、参加者による現地レポートでお届けします。

最初に
ペルーを意識した瞬間：
空港の看板



APJエントランスホール



【JICA関西教師海外研修 現地レポート②】

1日目：JICA事務所～ペルー日系人協会

8時40分に出発、9時にはJICAペルー事務所を訪問。それからペルー日系人協会 (Asociación Peruano Japonesa, APJ) へ移動。

APJは日系人の外国にあるサテライト支店のような機能のものかと想像していたがさにあらず。日本語教育だけでなく、劇場、武道場、図書館まで併設しており、その規模と、かつてペルーに移住した日本人の思いを後世に伝えようとするその熱意に驚く。館内のペルー移住資料館では、館長自ら日本語で案内をしてくださった。

APJの職員の方々に明るくおもてなしていただき、APJを通して日本の学校とペルーの公立学校とをオンラインで交流してみたいと話して下さった。わが校でも許可を受けられ、体制が整えば、そのような交流をしてみたいと感じた。

子どもには国境がないので、ペルーに限らず、いろいろな国と交流ができる時代が来ている。きっかけさえあれば、いろいろな国の人とオンラインで交流ができる時代にあり、交流を子どもの時代の間らせてあげたい。さすれば、友達がいる国と戦争などしようと思わないと思う。

(河内長野市立楠小学校 横山 太 先生)

【JICA関西教師海外研修 現地レポート③】

2日目：ホセ・ガルベス校訪問

今回訪問したホセ・ガルベス校はペルー最古の日系学校で、元々は「カヤオ日本人学校」として設立されました。現在同校に通う日系人は10%以下で、約380名の生徒の多くは地域の子どもたちです。

地域全体へ質の良い教育を行うために様々な取り組みを展開しており、代表的なのが日本式の教育に基づいた「5S」にあると校長先生からお話がありました。

「5S」とはSeiri/Seiton/Seisou/Seiketsu/Shitsuke のことで、2016年から導入され、家庭・地域・地元企業に広がっているそうです。日本が大切にしてきた価値観がペルーの学校でも根付いていることに感銘を受け、その重要性を再認識することができました。

今回は3つの授業実践を行いました。その3つ目は、小学校5年生を対象にした日本文化の体験授業です。今回の授業が子どもたちの記憶に残り、いつか人生に役立つことを願っています。

また、その日は2007年に発生したペルー地震に因んだ全国避難訓練がありました。校内では全員が集まった後、担任教師を中心としたリラクスのための体操をしているのが印象に残りました。日本の避難訓練でも、身の安全確保だけでなく、安心も保持するの必要性を感じました。

前日のペルー日系協会で学んだ、私たちの祖先がペルーに移住し、その後、日系社会が長い歴史の中でペルーに貢献してきた事、その歴史が現在も日本とペルーの強い繋がりに繋がっている事が感じられました。

出会った子どもたち、そして次の世代の方々にも、平和で安心な学校教育がなされるよう、強く願っています。

(大津市立堅田小学校 竹辺 このみ 先生)

日本とペルーの
学校の違いへの感想を
うちわで示して
もらいました!



【JICA関西教師海外研修 現地レポート④】 2日目:ホセ・ガルベス校でのホームビジット

私たちのホストファミリーのご自宅へお母さんと子どもたちと一緒に帰宅。家ではお姉さんとお父さん、おばあさんがお出迎え。着くとすぐにウェルカムドリンクをいただき、日本やペルーでの暮らしや過ごし方についてスマホの翻訳アプリを駆使してたくさん話しました。同行した横山先生からはリコーダーで演奏のプレゼントも。演奏のお返しに、現地の音楽を教えてくださいました!

子ども部屋では、ペルーで大人気の日本のアニメのグッズを嬉しそうに紹介してくれる様子が可愛かったです。ひとしきり話した後はペルー料理を作ってくださいました。みんなで味見をしながら作ってくださいる様子を見ながら、僕たちも笑みがこぼれます。お味はもちろん…絶品でした。

Macharé家では、お母さんが色々なことを教えてくれたり、質問してくれたりとお邪魔させていただいた僕たち二人だけでなく、家族全体を明るくしてくれていました。そしてお父さんが子どもたちの宿題を教えてあげたり、家族全員で一緒に台所に立ったりと、とても仲の良い家族でした。持って行った以上のお土産を逆にいただいしまい、本当に温かい気持ちになる素敵な時間を過ごすことができました。Macharé家の皆様、ありがとうございました。

(京都市立大淀中学校 内海 拓人 先生)

家族全員で集合写真



マルティネス校長からの概要説明



【JICA関西教師海外研修 現地レポート⑤】 3日目:ラ・ウニオン校への訪問

この日は、ペルー最大規模を誇る日系校であるラ・ウニオン校を訪問。防災に関する授業実践を行い、子どもたちが真剣に学ぶ姿と、子どもたちの防災意識の高さに驚かされました。今回の私たちの授業がペルーでの防災につながることを願っています。

また、日系校としての矜持を感じるマルティネス校長の発言として、「日系人の日系校設立は愛の物語です。」との言葉がありました。日系人はペルーへの移住後、様々な困難に見舞われていました。でも、そんな彼らが奮起し、学校を設立したのは、次世代の日系人の幸福を願ってのことだということです。

今回の訪問を通じて、日系人が日系校を設立した歴史的背景やメンタリティをうかがうことで、日系人がなぜペルーで様々な事業を展開し、ペルー社会に貢献するに至ったのが明確になりました。

このような歴史的背景を聞いて、日系校に対する自身の見方が変化したように思います。ラ・ウニオン校では、現代的な教育の方法として国際バカロレアの認証を受けることやGoogle Workspaceをツールとして活用する、国際バカロレアの単位として日本語の科目を認定するなど様々な取り組みが行われていますが、すべてはこれから世代の子どもたちの幸せを願ってのことだという事がよくわかりました。

先生の立ち振る舞い、授業の技術、子どもたちの姿、課題を受け止め継承していく学校のあり方に、教育者として感銘を受けました。

(大阪市立佃中学校 里見 拓也 先生)

スーパーでセビーチェ用の切り身魚を購入



【JICA関西教師海外研修 現地レポート⑥】 3日目:ラ・ウニオン校ホームビジット

ラ・ウニオン校を訪問した夕方からは、同校の職員宅でホームビジットを実施。近くのスーパーにて買い物した後、夕食を共にさせていただいた。

ホストファミリーに調理いただいた、ペルーの名物料理であるセビーチェ(ペルーの伝統料理である、魚介類のマリネ)の味は格別で、話しながら料理する様子を見せていただいたおかげで、料理好きの自分にとっては帰国後にぜひ挑戦してみたいと思うものであった。

訪問先の家族(父・母(ラ・ウニオン校職員)・娘・息子)とはいろいろなことを話した。多民族国家と言われるペルーでは、先住民とスペイン人の混血人種であるメスティソが中心であるが、ホストファミリーのご家族の先祖はおそらくヨーロッパ系であると思われる。お互いの家族のことや、訪問先のご息女がアイルランドに留学することなど、多くのことを話し、非常に良い時間を過ごすことができた。

(和歌山市東和中学校 金場 澄人 先生)

【JICA関西教師海外研修 現地レポート⑦

4日目:日本・ペルー地震防災センター(CISMID)

この日は日本・ペルー地震防災センター(CISMID)へ。1986年に日本の協力によりペルー国立工科大学内に設立された、都市防災計画や防災技術の研究・普及等を行う機関で、ペルーにおける防災対策の現状をお聞きしました。まず、ペルーの80%の建造物は耐震性がないことを危惧し、起こりうる大きな地震を予想して浸水マップを作ったり、災害に対する意識を向上させるための防災教育を行ったりしていることをお聞きしました。ペルーでは、自治体が十分に管理できてない脆弱な家がたくさんあり、脆その壁をどうすれば補強できるかという研究も行っているそうです。壁の強度を調べる実験や、土壌が圧力にどれだけ耐えることができるかの研究など紹介していただきました。

違法な場所に違法な方法で建築している人たちが災害に見舞われたとき、「自業自得」と考えるのではなく、その人たちの身の安全を危惧した防災対策は、心に響くものがありました。

ペルーの方々が多くの国々から移民を受け入れた歴史や、移民の方々と共に発展を遂げた社会的背景を理解しているからなのでしょう。CISMIDの方々が日本からの技術移転協力などに感謝の意を表されつつ、「自分たちが率先して頑張ることで少しでも多くの人を救いたい」という志向をもっておられるのが素晴らしいと感じました。

(京都市立竹田小学校 天下 若菜 先生)

壁の耐震実験を行う施設



学校の様子と、砂山に多く建設される住居



【JICA関西教師海外研修 事後研修】

海外研修の学びを更に深める事を目的に、帰国後はJICA関西で「事後研修」を行いました。参加教員は、研修スケジュールを振り返り何を感じ、何を学んだかを共有しました。「経済格差」や「ベネズエラ難民」などのキーワードから現地では気づけなかった疑問点や、日系コミュニティの貢献により日本に肯定的なイメージを持つ人が多いと感じたなど、様々な気づきについて考えました。

午後からは、「アイデンティティ」を題材に多文化共生について考えるワークを行いました。日本人というアイデンティティは、どのようなものなのか。国籍、宗教、言語、文化などどのような要素がその人のアイデンティティになるのか。多民族国家であるペルーでの経験を切り口に議論しました。

最後に、海外研修で自分が立てたりサーチャクエスチョンを振り返り、日本での授業実践に向けた授業構成や生徒に伝えたいメッセージなどについて意見交換を行いました。

現地を見て、感じたことは個人によって様々であり、日本とペルーの比較を通じた異文化理解、幸せとは何か・自分とは何かを考えることなど、様々なアプローチによる開発教育・国際理解教育の実践、ひいては生徒の多様性や異文化理解につなげることができます。「子どもたちの多様性を広げる教育とは何か」、先生たちの学びは、これからも続きます。

縦織 響七(JICA関西市民参加協力課 インターン)

【JICA関西教師海外研修 現地レポート⑧

5日目:ミ・ペルー地区 フェアレグリア33校訪問

活動最終日となる今日はミ・ペルー地区の公立校、フェアレグリア33校(以下FA33校)に訪問した。到着した学校で早速歓迎セレモニーへ。私たちがステージに上がると、熱狂的な大歓迎。セレモニーが終わり、子供達がステージ上の私たちの方に駆けつけてくれた。言葉はうまく通じない中でも、ハイタッチをして、ハグをして、疲れが癒されるととても幸せな時間だった。

その後は学校中を案内してもらい教師同士の防災教育に関する意見交換。FA33校のプレゼンテーション、学校紹介、ミ・ペルー地区に対する防災、各教室の防災について話が合った。

日本側からも各校・地域での取り組みを発表する。FA33校はJICA関西のプロジェクトで日本の防災教育を学んでいると聞いたが、むしろこちらの方が学ぶことが多いのではないかと圧倒され、充実した会だった。

FA33校への訪問を通して印象に残ったのは何度も出てきた「愛」という言葉だ。

歓迎セレモニーでは、「少しの愛で物事が簡単になる」という言葉を子供達が唱えていただけでなく、言葉の端々に「愛」があった。

私にはその言葉が重みを持って感じられた。それはFA33校の防災教育に「愛」を感じて取れたからだ。

子供達がいざという時に命を守り生き抜くための力を育むFA33校の先生方の教育に、私は大きな愛を感じた。

目の前の子供達に生き抜く力を身につけようと懸命な先生方の姿に、一教師として学ぶことの多い1日だった。

(神戸市立菅の台小学校 酒井 春菜 先生)

事後研修



参加教員

小学校

- 横山 太(河内長野市立楠小学校)
- 藤澤 幸二郎(寝屋川市立堀溝小学校)
- 天下 若菜(京都市立竹田小学校)
- 酒井 春菜(神戸市立菅の台小学校)
- 竹辺 このみ(大阪市立堅田小学校)
- 田端 浩多(天理市立朝和小学校)

中学校

- 内海 拓人(京都市立大淀中学校)
- 里見 拓也(大阪市立佃中学校)
- 金場 澄人(和歌山市立東和中学校)

高等学校

- 益田 由布子(兵庫県立舞子高等学校)
- 河本 陽詩(兵庫県立須磨東高等学校)



単元名:グローバルについて知ろう		
氏名:横山 太	学校名:河内長野市立楠小学校	
担当教科:小学校全科	実践教科:総合	
時間数:2時間	対象学年:3年生	人数:68人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標(評価の観点を意識して設定):外国について興味、関心を持ち、自分たちの生活と世界がつながっていることを考えることができるようにする。		
【2】 単元の評価 規準	(ア) 知識・技能	ペルーの学校の様子、河内長野市の外国とのつながりなどを知り、外国の存在、外国とのつながりを知ることができる。
	(イ) 思考・判断・表現	世界の国々の存在について気づき、世界と自分の関わりについて考えることができる。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	世界の国々や出来事に興味をもち、日本とのつながりについて考えることができる。
【3】 単元設定の理由	<p>教師海外研修に参加してペルーという外国の学校を訪れ、日本との相違点について興味深く感じた。児童にとっても興味深く感じられることは、間違いないと感じた。この相違点を紹介することで、普段、外国の存在を意識することの少ない児童にも外国にも興味、関心を持ち自分たちの生活とのつながりがあることの気づきの端緒となることを期待した。また、授業者が勤務する河内長野市にある国際交流協会のイベントに参加し、河内長野市の中にもたくさんの外国と関わりがあることを紹介することで、身近なところにも外国とつながりがあることで興味、関心持ってもらうことをも期待した。「グローバル」という、大人には、広く世の人々に知れわたっている言葉を象徴的に使うことを通して、児童たちに、地球はひとつだということを伝え、外国人との関わりについて考えることができる授業にしたいと考えた。</p> <p>児童観:</p> <p>本校は、大阪府の都市部から離れた南東端にある。児童たちは、外国人を普段、みかけることもあまりない。児童は、世界について知らない子が大半である。ニュースやユーチューブなど断片的な知識を持つ児童もいるが、現実世界では、ほとんど外国との関わりがない。本校でも外国のルーツを持った児童もいるが、おしなべて少数である。</p> <p>10月には、イギリスと日本にルーツを持つ児童が短期間、体験として在籍をした。それが外国の存在についてはじめて意識できる契機となった。児童たちにとって、その関わりがとても楽しかったゆえ、外国や外国人に対して、総じて肯定的な好印象をもっている。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容 		

<p>【3】 単元設定の理由</p>	<p>指導観: イギリスという先進国の児童との関わりがあり、児童たちは、外国について、興味、関心を持ち、好印象をもっている。イギリスに続いて、開発途上国の外国、外国人についても同様に興味、関心を持ってもらいたい。以前から河内長野にも外国人技能実習生や留学生など様々な国、特に一般的に子どもたちがイメージしやすい「外国」である欧米諸国以外の国からも移住している人が多くいる。 本学習では、ペルーの学校、河内長野市の中の国際交流協会のイベントなどを紹介する。地球には、外国があること、河内長野市にも様々な出身国をもつ外国人も多いこと、そんな外国人と仲良くできる素養を身に付ける第一歩としてグローバルという言葉キーワードに学習を進める。</p>		
<p>【4】展開計画(全2時間)</p>			
<p>時</p>	<p>テーマ・ねらい</p>	<p>活動・内容</p>	<p>使用教材</p>
<p>1 本時</p>	<p>グローバルについて知ろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ロイロノートで学習のめあてを知る。(グローバルについて知ろう) ・世界地図と地球儀の違いに気づく。 ・地球儀で、日本・イギリス・ペルーを見つける。 ・JICAの動画を観る。 ・教師海外研修で訪問したペルーの学校の様子を写真で見る。 ・班であつまり海外との関わりを話す。 ・ロイロノートで発表する。 ・バナナ・エビがどこから来るか知る。 ・グローバルゼーションについてまとめる 	<p>世界地図 地球儀 タブレット (ロイロノート) わたしたちの河内長野</p>
<p>2</p>	<p>河内長野市の中の外国について知ろう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・グローバルゼーションについて確認する。 ・織田家の一ひ ごはん編を学ぶ。 ・姉妹都市について クイズ アメリカ カーマル市について学ぶ。 ・地球儀でアメリカ・ベトナム・中国を見つける。 ・世界ごった煮ふえす2023 (河内長野市国際交流協会主催イベント)を写真で見る。 ・織田家の一ひ ヒト編を学ぶ。 ・外人? 外国人?という言葉について考える。 ・班活動 日本と関わりかかわりのある外国や人について話す。 ・個別活動 私たちと関わりのある外国について知っていることをプリントに書く。 <p>まとめ 世界はグローバルゼーションでつながっている。モノだけでなく人もつながっている。河内長野市にも多くの外国にルーツを持つ人が増えてきている。外国人とわけへだてることなく、同じ日本に住んでいる人として仲よくすることを学ぶ。</p>	<p>地球儀 iPhone JICA教材 つながる世界と日本 (P4.5.8.9)</p>

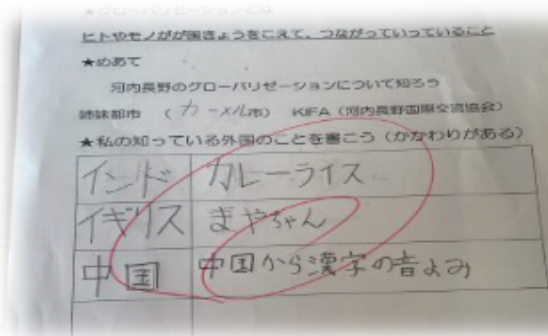
【5】本時の展開			
過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (10分)	<ul style="list-style-type: none"> ロイロノートで学習のめあてを知る (グローバルについて知ろう) 	<ul style="list-style-type: none"> 何の地図か考える 世界地図だと答える。この地図の端っこは、どうなっているのかな?を考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ロイロノート モニターTV 世界地図 地球儀
展開 (25分)	<ul style="list-style-type: none"> 世界地図を見る。世界地図と地球儀の違いに気づく 地球儀で、日本・イギリス・ペルーを見つける。 JICAの動画を観る 教師研修でのペルーの学校の様子を写真で観る 班であつまり海外との関わりを話し、ロイロノートで発表する。 バナナ・エビがどこから来るか知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 地球儀を班ごとに見る。地球が丸い球であることを確認する。地球のことを英語でグローブといい、グローバリゼーションという言葉があることを学ぶ。 班ごとにシールを日本、イギリス、ペルーの位置に貼る。 イギリスは、10月に短期在校したイギリス人の児童を思い出す。 JICAの活動、教師海外研修の紹介動画を一部鑑賞する。 教師海外研修でのペルーの学校を写真で観る。 	
まとめ (10分)	<ul style="list-style-type: none"> グローバリゼーションについてまとめる。 	<p>世界はグローバリゼーションでつながっている。モノだけでなく人もつながっている。河内長野市にも多くの外国にルーツを持つ人が増えてきている。外国人とわけへだてることなく、同じ日本に住んでいる人として仲よくすることを学ぶ。</p>	

【授業実践の様子】

ペルーの学校訪問の様子を写真で紹介している。



児童たちが、外国について知っていることを書いたプリント



【6】本時の振り返り

世界地図、地球儀といったふだん触れることのない教具、動画、写真などを通して、児童たちは興味深く授業に集中できていた。ロイロノートでの児童たちの発表を用意していたが、機器トラブルにより児童たちの発表ができなくなり、次時の予定に発表を組み込むことになった。授業後に授業の感想を聞くと、「知らなかった外国について知ることができた」といった肯定的な感想が多かった。特に、外国の学校の話には、「自分たちの学校のあり方があたりまえでないことを知り面白かった。」との声をよく聞くことができた。ペルーなど外国の存在、外国とのつながりについて興味、関心をもつことができるようになった。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

地球が丸いことを知らない子どもが丸いことを知り、丸いことを知っていても、どんなふうに丸いのか、世界がどのように地球の表面に位置しているのか実感を持って理解することの端緒となった。

期待していたほどには、外国への知識については深めることができなかった。

外人と呼ぶことは、外国人にとって失礼にあたることなどを伝えしたが、児童たちは、国へ興味、関心を持ち、外国人の存在について意識することができ、関わりについて考えることができ、外人と呼ぶことは失礼になるといったことを知り、外国の人とのかかわりについて考える端緒ともなった。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

「ペルーに行きたい。知りたい」といった未知の国への関心が広がった。テレビで観た外国の事を教師との会話で話してくれる児童が出てくるようになった。ペルーの学校の写真を見て、興味を持ち、「どうしてペルーの学校には、休み時間におやつを食べるのか」といったような、日本の学校と比較して考える態度も見られるようになった。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

授業前では、イギリスやアメリカなど欧米諸国のことで知っていることを話す児童はいたが、南米やアジアなどの開発途上国のことへの話題がほとんどない状況であった。知らないことばかりであり、また興味関心を抱く児童がほとんどいなかった。

(授業後)

授業後には、イギリスから来た児童について再び思い出し、また、ペルーのことを話題にする児童がいるようになった。家庭でもペルーのことやアジアの国々について話題にのぼることがあったと保護者から聞くことができた。一番、良かったこととしては、何気なく「外人」と呼んでいた児童が、学習したことを思いだして「外国人」とよばなければならないと発言するなど、外国人の存在に対して、敬意をもって接していかなければならないという意識の萌芽が見られたことである。

【8】自己評価	
1. 苦勞した点	<p>子どもたちの周りに、外国だと感じるものは、リアルには少なく、テレビやYouTubeなどで知っていることも断片的で、子ども達同士での話し合いは、難しかった。また社会的課題に対して、まだまだ知識や経験が少なく、こちらの意図をした社会的視点に沿った学習が進めることができなかった。</p>
2. 改善点	<p>本時の授業は、外国への意識を深めることを狙ったものだが、2時間と授業時間も少なく、児童同士で深め合う学びの場を用意できずに課題意識をもって取り組みをさせることができなかった。</p> <p>タブレットパソコンの使用に関しては、トラブルがおきた。いつも通りの動作を想定していたが、実際に児童のタブレットを用いてのリハーサルなどをする必要があった。</p>
3. 成果が出た点	<p>地図を見せてから地球儀をみせることにより、地球が丸いことを意識させることができた。地球が丸くつながっていることで世界が地球の中でつながっていることを理解させることができた。また外人と呼ぶことは、外国人にとって失礼にあたることなどを伝えながら、児童たちは、国へ興味、関心を持ち、外国人の存在について意識することができ、関わりについて考えることができる第一歩となった。</p>
4. 備考	<p>今回の授業は、総合の時間として取り組んだ。しかし教科の実態として社会科として考えてもよいと思う。JICAのことや社会的課題に関する話を話すが、教師としては、とても楽しいことであった。普段、児童と学習している社会科、総合科では、基本的な用語もわからない児童に雲をつかむような話を聞かせているという印象で教えるのが難しいと感じていた。だが、身近ではないが、現代社会の世界の中にいるということを児童たちが感じるような学習では、児童たちも課題意識や興味、関心を持ち、取り組むことができたように感じる。未来へつながる本当に役立つ学習を児童たちと一緒にできたことを感じ有意義な学習活動であったと感じる。</p> <p>また、授業者がこのような総合科、社会科という教科がすごく好きなのだということもわかった。</p>

添付資料

・地球儀と世界地図



・ごった煮フェスチラシ



・つながる世界と日本



参考資料

・JICA教材つながる世界と日本

https://www.jica.go.jp/aboutoda/find_the_link/index.html

・JICAネットライブラリー

<https://www.youtube.com/@JICANetLibrary>

・わたしたちの星「コンセプトムービー」

https://www.youtube.com/watch?v=G8DKPZ_HR_A

単元名:くらべてみよう、せかいとにほん		
氏名:藤澤 幸二郎	学校名:寝屋川市立堀溝小学校	
担当教科:全教科	実践教科:生活科	
時間数:6時間	対象学年:1年生	人数:2学級 計59人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標		
<ul style="list-style-type: none"> ・外国の文化について知る。 ・日本と外国の文化の相違点や共通点を考える。 ・外国の文化に親しみを持ち、自分たちの文化について振り返る。 		
【2】 単元の評価 規準例	(ア) 知識・技能	世界には、たくさんの国があり、その国々によって文化が異なることを知る。
	(イ) 思考・判断・表現	日本と外国の文化の相違点や共通点を見つけることができる。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	外国の文化に関心を持ち、主体的に相違点や共通点を見つけようとしたり、自分たちの文化を発信しようとしたりしている。
【3】 単元設定の 理由	【児童観】 本校には、外国にルーツのある児童が在籍しており、「文化や習慣の違い」「言葉の壁」など、子どもたちの実態から課題を考え、各学年で多文化共生をテーマにした取り組みを行っている。一年生は、これまで月に数回、NET (Native English Teacher) とともに英語を中心とした外国の文化について学び、歌やゲームを通して楽しみながら学習を進めている。しかし、子どもたちの外国についての知識や興味は、まだそれほど高くない。本単元を通して、外国の文化についての興味・関心を高め、多文化共生社会を実現していく実践者としての素地を培っていきたい。	
	【教材観】 本単元は、外国の文化と「出会う」→「つながる」という2つで構成されている。第一次の「出会う」では、「世界のじゃんけん」や「ペルーの楽器や遊び」などの体験を通して、子どもたちが異文化と楽しく出会うことのできる場を設定している。楽しい出会いを通して、違いを楽しむ心の醸成を目指している。第二次の「つながる」では、ペルーのラ・ウニオン校(日系人学校)の児童たちとビデオレターで交流を行う。それぞれの学校での生活の様子を動画に撮り、紹介しあうという内容である。外国の同世代の子どもたちと実際につながる体験をすることができる。	
<ul style="list-style-type: none"> ✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容 	【指導観】 単元を通して、外国と日本の文化を比較し、「ちがうところ」と「にているところ」を見つける活動を行う。そうすることで、外国の文化により親しみを持ったり、自分たちの文化を振り返ったりすることを狙っている。	

【3】
単元設定の
理由

本時では、本屋やスーパー、料理、学校の写真から「ちがうところ」と「にているところ」を見つけていくとともに、アニメや和食などの日本文化が世界に広まっていることを伝えていく。ビデオレターの交流では、日本から送る動画としては、①ランドセルを背負って集団で登校すること ②運動会などの行事と普段の授業の様子 ③給食の様子 ④掃除の様子、といった日本の学校文化でよく見られる内容のものを送る。ラ・ウニオン校からも①登下校時のバスや保護者による送り迎えの様子 ②普段の授業と日本語を使った授業の様子 ③昼食や休み時間の様子、などを動画で送ってもらう。「ちがうところ」と「にているところ」を見つけるとともに、日系学校(ラ・ウニオン校)の日本語の授業を見て、日本とペルーのつながりについても感じさせることができると考える。子どもたちから「どうして似ているのだろう」という疑問を引き出し、150年前にペルーへ移住し、現在まで日本の文化を受け継いできた日系人の存在についても伝えていきたい。

【設定時に想定された児童の変容】

子どもたちが、外国をより身近に感じることができ、文化の違いを楽しみながら親しむ姿が期待される。また、ペルーの学校と交流することで、つながることの楽しさや大切さを感じて欲しい。本実践が、子どもたちにとって、「誰もが暮らしやすい共生社会を実現するために自分ごととして考え行動する」ためのきっかけとなることを願っている。

【4】展開計画(全6時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	○「世界の じゃんけんで 遊ぼう。」 ・いろいろな国や地域の じゃんけんを知る。	・中国、韓国・朝鮮、ベトナム、ペルー、インドネシアの じゃんけんを知り、じゃんけんゲームをして楽しむ。	・ちがいドキドキ多文化 共生ナビ1
2 本時	○「ここは日本? それとも外国?」 ・外国と日本の文化の 相違点や共通点を 考えることで、 日本と外国の つながりに気付く。	・日本とペルーの様々な場所で撮られた写真を見せ、 そこが日本か外国かを考える。 ・日本とペルーの文化について、相違点や共通点を考 える。	・パワーポイント ・ワークシート
3	○「ペルーについて もっと知ろう。」 ・ペルーについての 知識を得たり、 民族楽器や遊びの体験 を通して、ペルーという 国に親しみをもち。	・ペルーの写真を見ながら、どんな国なのかを知る。 ・ペルーの民族楽器を演奏したり、伝統的な遊びを体験 したりする。 ・日本との相違点や共通点について考える。	・パワーポイント ・民族楽器 ・ボードゲーム

4	○「学校紹介の計画を立てよう。」 ・ペルーの学校と交流するにあたって、自分たちの学校生活でどんなことを紹介したいかを考え、自分たちの生活を振り返る。	・自分たちの学校生活でどんなことを紹介したいかを考える。 ・誰がどんな動画をとるか役割分担をする。	
5	○動画撮影	・グループごとに動画撮影を行う。	
6	○「くらべてみよう、日本とペルーの学校」 ・日本とペルーの学校の相違点と共通点を考え、日本とペルーのつながりに気付く。	・ラ・ウニオン校から送られてきた動画を視聴する。 ・日本とペルーの学校の相違点と共通点を考える。	・動画

【5】本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入(5分)	めあて:ここは、日ほんかがいこくかをかんがえよう		
展開(35分)	○3つの写真(富士山、自由の女神、通天閣)を見せ、写真の場所が日本か外国かを考える。 ○6枚の写真(①本屋②授業③給食④お店⑤お店⑥料理)を見て、写真の場所が日本か外国かをグループで考える。 ○グループの考えを交流する。 ○答え合わせ(日本→③④、外国→①②⑤⑥)	・これまで、見たことのあるものや知っていることなどから考えさせる。 ・写真をよく見ると、日本語の看板が書かれているので、それを手がかりとしても良いことを伝える。 ・写真をよく見て、普段の自分たちの生活の様子と違うところなどを見つけさせる。 ・日本か外国かを分ける際には、理由を明確にするようにさせる。 外国の写真は、全てペルーのものであることを伝える。 ・「答えと合わせて伝えたいこと」 ①日本のマンガやアニメは世界的に広まっていること。	・パワーポイント ・ワークシート

<p>まとめ (5分)</p>	<p>○日本とペルーで似ているところと違うところを話し合う。</p> <p>○ふりかえりを書く。</p>	<p>②ペルーの学校では、宗教の授業があること。</p> <p>③給食は、日本の学校では一般的だが世界的には珍しいこと。</p> <p>④日本は野菜などの包装がしっかりされているが、その反面、ゴミが多くなること。</p> <p>⑤紫とうもろこしなど、日本ではあまり見ない食材も売っていること。</p> <p>⑥日本の料理がペルー料理とかけ合わせり、NIKKEI料理として親しまれていること。</p> <p>・ペルーでは、日本の文化が親しまれていることを伝える。</p>	<p>・ワークシート</p>
---------------------	--	--	----------------

【授業実践の様子】



写真の場所が、外国か日本かをグループで話し合っている様子。

写真で見つけた日本と外国との相違点や共通点を交流している様子。



【6】本時の振り返り

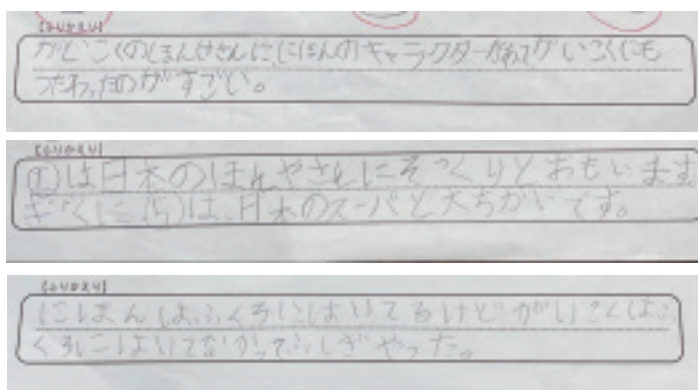
外国と日本の写真を6枚用意した。授業前の想定では、①～⑤の写真は、多くの児童が日本か外国かを判断することができ、⑥の料理の写真は意見が分かれるのではないかと考えていた。結果は想定どおりであった。①～⑤の写真では、自分たちの学校生活を思い出したり、ひらがなや外国語などの言葉をヒントに考えたりしている児童が多かった。⑥の写真では、自分たちが家や店で食べている寿司と比べて考えていた。ある児童は、「近所にあるお寿司屋さんには、こんなメニューがないから、この写真は外国だ。」と話しており、別の児童は、「自分の家で食べるお寿司は、写真と同じようなかたちのものが出るから、この写真は日本だ。」と話していた。答え合わせをした時には、児童は⑥の写真の結果に一番驚いている様子であった。子どもたちのつぶやきを聞いていると、料理は国によってかたちを変えるだけでなく、同じ国でも各家庭においてかたちが変わるということを発見していた。日本と外国を比べるだけでなく、自分の生活を振り返ったり、友だちの生活と比べたりして考えを深めていた。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

・導入の「世界のじゃんけん」では、自分たちのよく知る遊びと言うこともあって、とても意欲的に遊んでいた。特に、インドネシアのじゃんけんが「グー、チョキ、パー」でないことやペルーのじゃんけんが「ヤンケンポツ」と日本の言い方に似ていることに驚きを持っていた。

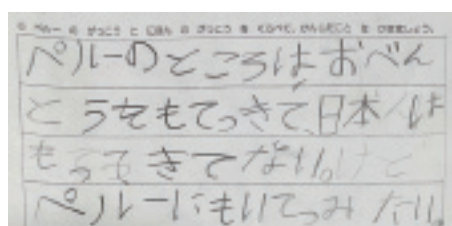
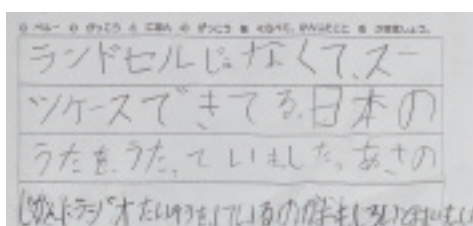
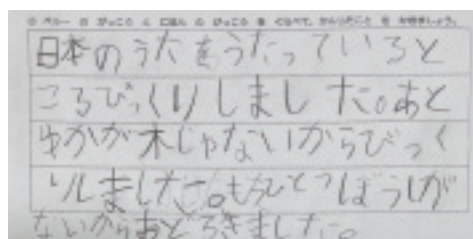
・単元の前半では、外国の文化に触れる中で、日本の文化との相違点や共通点にたくさん気づき、驚きや不思議さを感じている児童が多かった。

【第2時(本時)の児童のふりかえり】



【第6時の児童の感想】

・単元の後半では、ペルーの学校と実際につながるとあって、とても意欲的に動画撮影に取り組んでいた。また、ラウニオン校からの動画を見て、違いをより実感したり、ペルーに親しみを抱いたりしている児童がふえた。



【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

図書の時間に、外国について本で調べている児童もおり、外国に対しての興味・関心が増えた。また、児童のつぶやきや振り返りの中に、「給食を食べられる日本っていいな」や「日本のスーパーは、商品を綺麗にパックしている」「でもパックのゴミが増えるのはよくない。」などの意見が見られた。異文化理解を通して、自分たちの生活を振り返っていた。

ペルーの学校と交流することを伝えた際には、「楽しみ～」や「緊張する」といった言葉が聞かれた。いざ動画作成を始めると、自分たちから紹介したいことを考え、とても意欲的に撮影を行っていた。ラ・ウニオン校から送られた動画を見た際には、自分たちの学校との違いに、「面白い」「楽しそう」「ペルーに行ってみたい」などペルーに対する肯定的な意見が多く見られた。ペルーの子どもたちとつながることの喜びを感じることができた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

- ・外国に対する知識はほとんどなく、アメリカや中国、韓国といった国々の名前ぐらいしか知らない児童が多かった。
- ・「外国語＝英語」と思っている児童がほとんどであった。
- ・1年生であるため、日本の文化についてもまだ深く認識しておらず、外国の文化と日本の文化を比べて考える機会はほとんどなかったと考えられる。

(授業後)

- ・外国に対する知識は、いくつかの国の名前を知っている程度であったが、国によってそれぞれの文化があることや日本とは違う文化が存在することを知った。
- ・外国語は英語以外にも、韓国語や中国語、スペイン語など様々な言語が存在し、文字の形も全然違うことを知った。
- ・外国の文化を自分たちの文化と比べて考えることで、改めて自分たちの文化の良さを知ったり、外国の文化の面白さを発見したりすることができた。

【8】自己評価

1. 苦勞した点

- ・外国と日本の文化の相違点や共通点を考えることで自分たちの文化の良さや外国の文化の良さに気づかせながら学習を深めるという点で苦勞した。単元を計画する際には、異文化を「楽しく知る」ことはとても大切だが、「ただ楽しかった」だけで終わってほしくなかったので、単元を通して、日本と外国の文化を比べる活動を取り入れた。しかし、いざ授業をしてみると相違点や共通点を見つけることはできても、見つけただけで終わってしまっている児童が多く、学習の深まりが初めはあまり見られなかった。
- ・ペルーの現地の学校とやりとりをする際に、時差の問題や言葉の壁、学校文化の違いなどの難しさを感じた。こちらも十分に異文化を知った上で交流を行うことが必要であった。

【8】自己評価	
2. 改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・相違点や共通点を見つけるだけで終わってしまい、学習の深まりがあまり見られなかった点については、具体的な質問をすることで、ある程度改善できた。例えば、「給食とお弁当どちらがいい？」などの質問をすると自分たちの生活を振り返ったり、外国での暮らしを想像したりしながらそれぞれの良さを考えていた。考えを深めさせたい場面では、十分に発問を練っておく必要があると感じた。 ・ペルーの現地の学校ともしっかりと交流を重ねたかったが、学期制の時期などが違い、十分に交流することが出来なかった。今後は、それぞれの学校文化をより理解し、長く深い交流を続けて行きたい。
3. 成果が出た点	<p>子どもたちが、「世界にはそれぞれ自分たちと違う文化が存在する」ということを楽しみながら感じられたことが大きな成果であった。また、ペルーと日本の「つながり」を知り、実際に交流を行うことで、より「つながり」を感じることができたのではないと思う。</p> <p>子どもたちには、違いを知り、違いを楽しみ、違いを尊重する心を持ち、多文化共生などの社会にある諸課題を自分ごととして捉え、行動できる人になってほしい。今回の学びが、そのための一つの機会となったのではないと思う。</p>
4. 備考 (授業者による 自由記述)	<p>児童が休み時間に、「世界のじゃんけん」をして遊んだり、外国語を練習している様子を見て、子どもたちの新しい知識や経験を吸収する力の高さを改めて実感した。今回は、異文化との「楽しい出会い」をねらいの一つとしていたので、出来るだけ子どもたちが、「おもしろい」や「もっと知りたい」と思うような教材を選定した。しかし、子どもたちが普段よく目にしていくメディアには、外国に対して負のイメージを抱かせる内容も多い。SNSの世界では、偏見や差別を助長するものも少なくない。違いを豊かに認め合い、誰もが暮らしやすい社会を創る実践者を育てていくためにも、今後も多文化共生教育をすすめていきたい。</p>

添付資料:1 本時で使用したワークシート

ここは 日ほん それとも がいこく? 名まえ ()

○つぎのしゃしんのぼしよが、日ほん か がいこく かをかんがえ、○をつけよう。また、そうおもった りゆう もかんがえよう。

<p>①ほんや</p> 	<p>②じゅぎょうのようす</p> 	<p>③きゅうしよく</p> 
<p>(日ほん ・ がいこく)</p>	<p>(日ほん ・ がいこく)</p>	<p>(日ほん ・ がいこく)</p>
<p>④おみせ</p> 	<p>⑤おみせ</p> 	<p>⑥りょうり</p> 
<p>(日ほん ・ がいこく)</p>	<p>(日ほん ・ がいこく)</p>	<p>(日ほん ・ がいこく)</p>

【ふりかえり】

参考資料:

・『ぼくの、わたしの、世界の学校』

著者:マーグリート・ルアーズ アリス・フィーガン

出版社:すずき出版

・『世界の子どもの遊び』

著者:寒川 恒夫 出版社:PHP研究所




・『ちがいでキドキ多文化共生ナビ1・2』

著者:大阪府在日外国人教育研究協議会

単元名:世界の人たちがなかよくらせる社会にするには? ~キング牧師の夢をかなえよう~		
氏名:天下 若菜	学校名:京都市立竹田小学校	
担当教科:全教科	実践教科:国語、道徳、学活	
時間数:5時間	対象学年:1年生	人数:20人

【実施概要】

<p>【1】単元のテーマ・目標</p> <p>世界の人たちがなかよくらせる社会にするには~キング牧師の夢をかなえよう~</p>		
<p>【2】 単元の評価 規準</p>	(ア) 知識・技能	ペルーと日本との文化の違いや他国と日本とのつながりの歴史を知ることができる。
	(イ) 思考・判断・表現	他国の人々の気持ちを想像し、共生するために大切なことや自分にできることを考えることができる。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	他国の人や文化に親しもうとすることができる。
<p>【3】 単元設定の理由</p> <p>✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容</p>	<p><児童観></p> <p>本学級の子どもたちは、素直で、相手のことを考えようという気持ちをもつ子どもが多いが、1年生ということもあり、自国と他国の文化の違いなどはほとんど知らない。しかし、学級内には外国にルーツをもつ児童も在籍しており、少し日本語が苦手な児童が自分の伝えたいことが伝わらず、トラブルになることもある。児童にはこれまで人権啓発・参観授業でキング牧師を取り上げ、キング牧師の夢について考えた。「肌の色が違うから差別されるのはおかしい。みんながなかよくらせる世界にしよう」というキング牧師のメッセージを受け取りつつも、具体的にはどうすればいいのかイメージすることができず、自分事として考えることができる児童は少なかった。</p> <p><教材観></p> <p>今回は、ペルーの街並みや学校、スーパーなど、児童がより身近に思えるところから日本との文化の違いを実感できるようにしたい。そして、「もしも転校生としてペルーの人がきたら」と具体的に場面を想像することで、自分たちはどう考え、行動するのが良いのか考えるきっかけにしたい。また、ペルーで出会った現地通訳のフランク・コルマさんが話して下さった自分自身の子どもの頃のお話を伝え、その時のコルマさんの気持ちに子どもたちが寄り添うことで、自分事として考えるときのヒントにできるとよいと思う。</p> <p><指導観・児童に期待する変容></p> <p>ペルーと日本の様々な違いを見つけたときに、子どもたちはたくさんの違いがあることに驚くだろう。そして「ちがいはまちがいはなく、むしろ当たり前なんだ!と自然に思えるのではないかと考える。その違いを知ることで、自分とは違う文化の中で育ったペルーの子供が日本に来た時に、ペルーの子が日本との違いに戸惑ったり、不安になったりすることも想像できる。外国の人が日本に来たときに、なかよくなるのは難しいことではなく、あいさつしたり、相手の気持ちを考えたりと、普段友達にしていることをこれからも大切にすれば、自分たちもなかよくすることができるんだという気持ちをもたせたい。</p>	

【4】展開計画(全5時間)			
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	夏休みのことを話そう 「ペルーへ行ってきたよ」 ねらい ペルーがどこにあって、 どんな国かを知り、ペルー ーという国に興味をもつ	①ペルーの概要を知る。 ・地球儀上の場所 ・時差 ・季節が違う ・国旗 ・世界遺産(ナスカの地上絵・マチュピチュ) ・言語 ・ペルーのホームビジット先で出会った人 ②授業者自身がペルーへ渡航したこと、感じた気持ち、ペ ルーの子ども達へ授業を実施したことなどを伝える。 ③児童が2人組で夏休みにしたことを伝え合う。	プレゼンテーション ペルーの民族衣装 ペルーの楽器
2	ペルーでお散歩レッツゴー! 似ているところとちが うところ ねらい ペルーの街並みや学 校、スーパーの様子か ら、日本との共通点や 相違点に気づき、新た な疑問をもつ。	①ペルーの街並み、学校、スーパーの写真を教室の壁 側付近に置く。子どもたちはペルーを散歩する気持 ちでその写真を取りに行き、日本と似ているところや 違うところを見つけ分類する。 ②見つけた共通点や相違点をクラス全体で共有する。	ペルーの写真 ・家 ・ランドセル ・スーパー ・学校の女の子 ・タトゥーをしている人 ・日本の「ホンダ」の 会社 ・本屋に並ぶ日本の 漫画
3	①外国からきた転校生 (学校へいくとき) ねらい 外国から来た女の子にあ いさつをする、ことがで きなかつたときとできた ときの「ぼく」の気持ちを 想像し、自分から進んで 関わっていこ うという心情 を育てる。	①道徳教材「学校へいくとき」を読み、「ぼく」があいさつ できなかったときの気持ちを考える。 ②その後、あいさつすることができて、女の子と笑い合 う「ぼく」の気持ちを考える。 ③いろいろな国のあいさつの音声を聞いて一緒に行っ てみる。 ④あいさつゲームでいろいろな国の人になり切り、いろ いろな国のあいさつを楽しむ。	道徳教材「学校へ いくとき」の挿絵 いろいろな国のあ いさつ(音声) あいさつカード 
			
			

<p>4</p>	<p>②外国からの転校生 (学校の中で)</p> <p>ねらい ペルーから来た女の子がピアスを付けていることについて、議論することを通して、異文化に対する考えを深める。</p>	<p>①第2次に 気づいた「女の子が学校でピアスをしていること」について、事情を知り、日本の学校でもよいと思うかを話し合う。</p> <p>②自分が転校してきたペルーの女の子の気持ちになり、「してほしいこと」「されたくないこと」を考える。</p>	<p>ピアスを付けて勉強する女の子の写真</p> <p>自分の気持ちをかくためのワークシート</p>
<p>5 本時</p>	<p>コルマさんにインタビューしよう</p> <p>ねらい ペルーから日本に実際に転校生としてやってきたコルマさんの行動や気持ちを知ることを通して、外国の人の気持ちに寄り添い、共に生きるための行動を考える。</p>	<p>①ペルーで出会った日系3世の方の写真を見て、「この人は何人」と言えるのか考える。</p> <p>②日本からペルーへ行った人、ペルーから日本へ来た人がいることを伝える。</p> <p>③フランク・コルマさんを紹介し、フランク・コルマさんのことを質問形式で知る。</p> <p>④ペルーで日本の言葉を学校目標にしている学校を紹介する。</p>	<p>日系3世の方の写真</p> <p>フランク・コルマさんの紹介プレゼン</p>

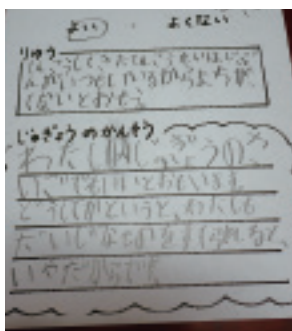
【5】本時の展開			
過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (15分)	<p>前回、考えた「ピアスをつけて学校で勉強している女の子」について振り返る。 キング牧師の話を想起し、めあてにつなげる。 ・転校生のほんとの気持ちを知りたいな。</p>	<p>・ふり返りの内容を紹介することで、考えを深められるようにする。</p>	<p>・ピアスをつけて学校で勉強している女の子の写真</p>
<p>コルマさんのインタビューをきいて、みんなとなかよくらせるせいかいをかんがえよう。</p>			
展開 (20分)	<p>今まで学習してきたことから予想する ・あいさつ ・相手のことを知る ・違いを知る</p> <p>外国の人に「何人?」と聞いている人がいるが、みんなは何人なのか、この女の子は何人なのか聞く。 日系3世の写真を見せ、この人は「何人」なのか考える。</p> <p>ペルーで出会ったフランク・コルマさんのお話をする。 ・日本語はどうやって勉強したのか→みんなにおいつくために必死で勉強した。 ・家族とはなれてさみしくなかったのか→さみしかったけど友達と友達のお母さんのあたたかさに救われた。 ・日本でできた友達→一緒にサッカーをした。一生の友達。 ・日本で差別されている友達を見たとき→障害をもつ人に対しどうして差別するのか、おかしいと訴えた。自分も「くろんぼ人」と呼ばれたとき悲しかった。 ・お手本にしている人→友達のお母さん。「負けちゃダメ、めげちゃダメ、あきらめちゃダメ」</p>	<p>・予想が今までのふり返りになる。</p> <p>・日本から昔、ペルーに働きに行った人たちがいることを伝える。見た目と心は違うので、「何人」とは簡単に答えるのが難しい人もいることを知る。</p> <p>・フランク・コルマさんが日本で暮らしたときの気持ちを知ること、日本に来た外国の人たちの苦労を想像することができるようにする。 ・差別についておかしいという気持ちに寄り添い、声を上げることの大切さを伝える。 ・日本で出会ったかけがえのない友達や、友達のお母さんの存在が、コルマさんの人生を支えたという話をするので、つながりの大切さを実感できるようにする。</p>	<p>・日系3世の人の写真</p> <p>どんな話か、思い出せるように、一問一答形式で質問が板書に残るようにする。</p>

<p>まとめ (10分)</p>	<p>授業のふり返りを書いて発表する。 最後に、日本の心を学校目標にしている学校を紹介し、日本にも世界に誇れる文化や精神があることに気づけるようにする。</p>	<p>・コルマさんの話を思い出しながら、ふり返りを書くことができるようにする。</p>	<p>ワークシート ペルーの学校の写真 (日本の言葉を学校目標として掲げる日系校:ホセガルベス校・ラウニオン校)</p>
------------------	--	---	---

【授業実践の様子】



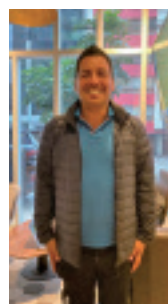
前時のふり返り



児童のふり返りをいくつか紹介



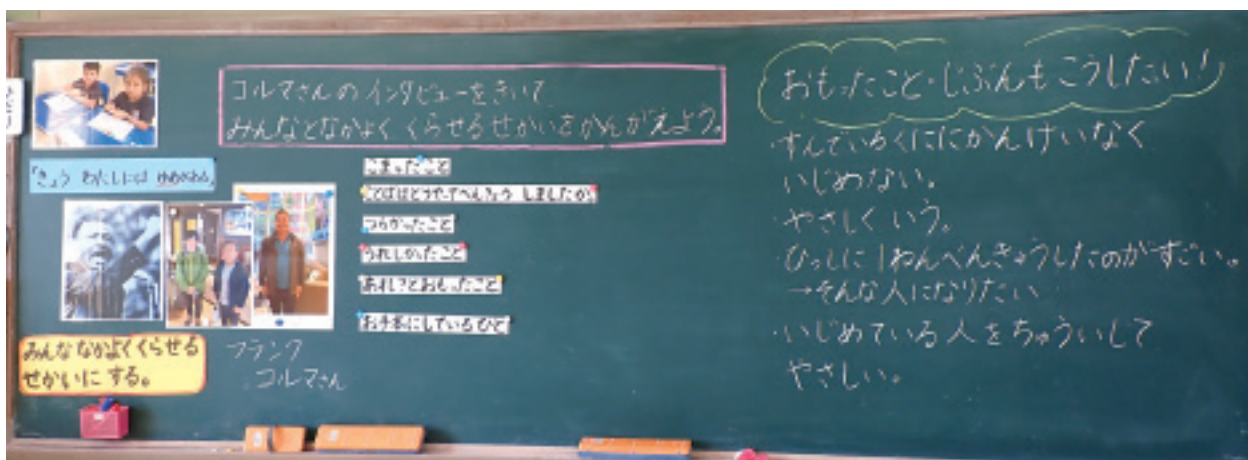
コルマさんのお話をインタビュー形式で伝える



コルマさん



日系3世の写真を見せ、この人は何人?ときく



当日の板書

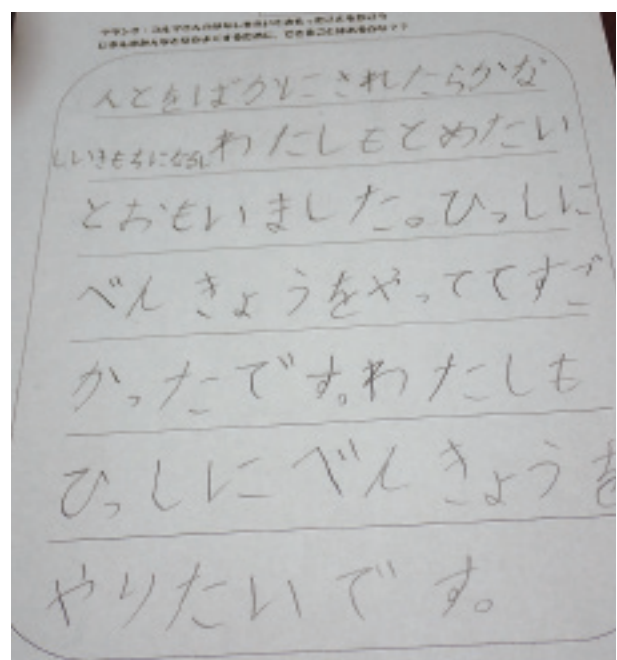
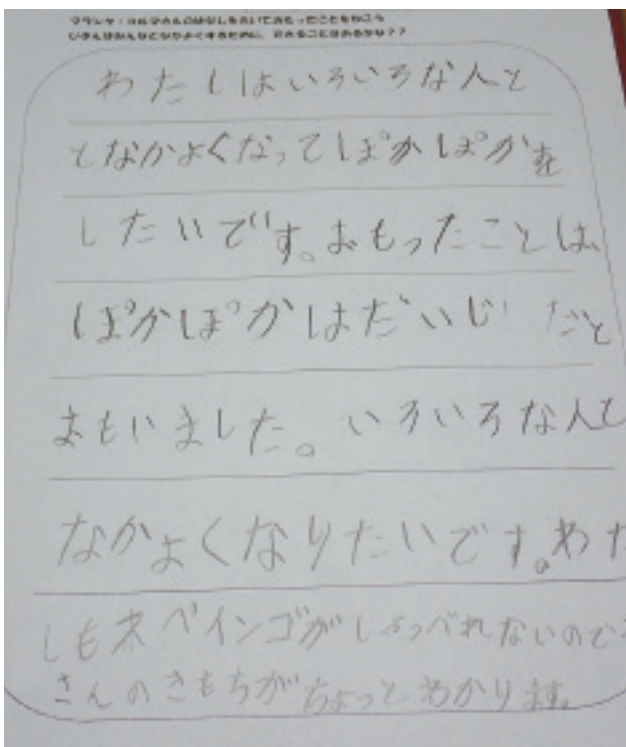
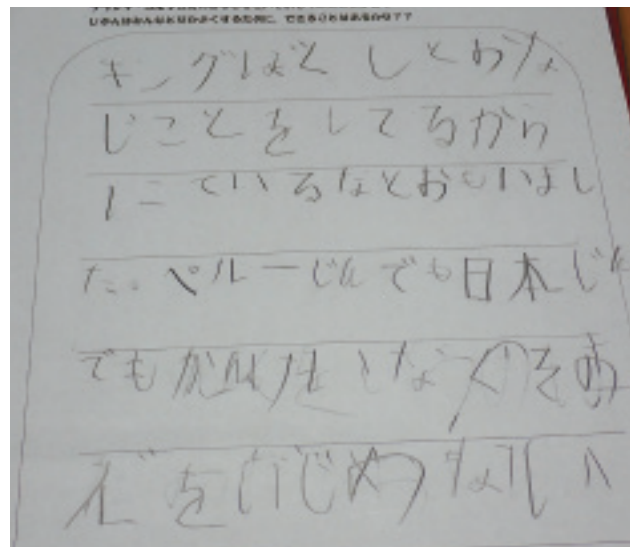
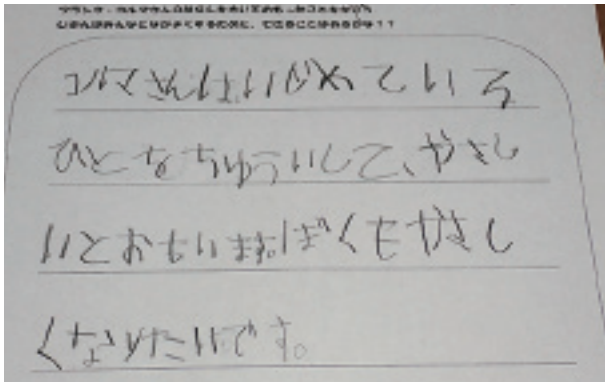


コルマさんの話を聞いて思ったことをワークシートに記入



ワークシートに書いたことを交流する

ワークシートのふり返し



コルマさんの話に対し、自分も…と「自分事」として考えられた。

【6】本時のふり返し

児童らは前時で、「ピアスを付けた転校生の女の子」について考えた際のふり返しを読むことで、考えを深めていた。ふり返りの共有においては、特に、転校生の女の子の気持ちに寄り添っているものを取り上げ、実際に転校してきた外国の人はどんな気持ちなのかにつなげたことで、フランク・コルマさんの話を興味深く聞こうとする姿勢につながった。また、前時の発言の中に「キング牧師」の夢として「世界の人々がみんな仲良くらせる世界にする」というものが出てきたので、それを紹介し、単元のゴールの軸にして授業を始めることができた。

コルマさんが、日本語がわからなくても宿題は毎日ちゃんとやって出していた話を聞いた児童は、「すごい」と驚いていた。宿題をさぼってしまうことのある児童に響いてほしい。コルマさんを助けたのが同じ小学校の友達とそのお母さんだということにも反応していた。「サッカーやったら言葉しゃべれへんでもできるもんね!」と納得していた。話の中にフランク・コルマさんが「くろんぼ人」とよばれて嫌だったエピソードを伝えた際、一緒に日系三世の方と写した写真を「じゃあこの人は何人かな?」と見せることで、「見かけで判断され、容易に「〇〇人」と呼ばれることが嫌と感じる人もいるかもしれないね。」という「じゃあどう言ったらいいの?」と頭を悩ませていた。

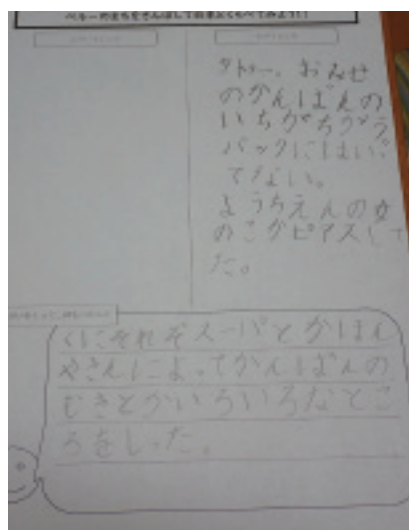
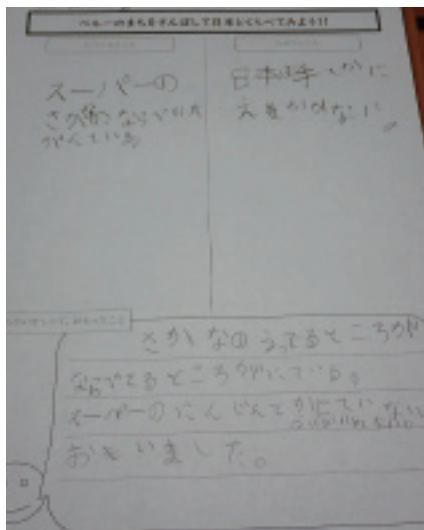
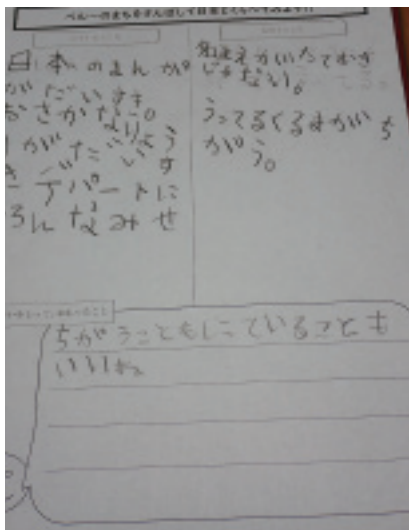
一つ一つのエピソードに反応しながら聞く姿勢はあったが、1年生ということもあり、紹介するフランク・コルマさんのエピソードが多すぎたのか、内容が記憶に残りづらかったのか、ワークシートを書く際手が止まっていた児童も多かった。挿絵と共に板書に残したり、もう一度どんな話が振り返ったりしやすい工夫が必要だと感じた。

実際の人の生の体験や気持ちはやはり子どもたちにとって分かりやすいと感じた。フランク・コルマさんのお話の中で、どういう部分が心に響くかは子どもによって違い、それを交流することで、考えを深めることができた。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

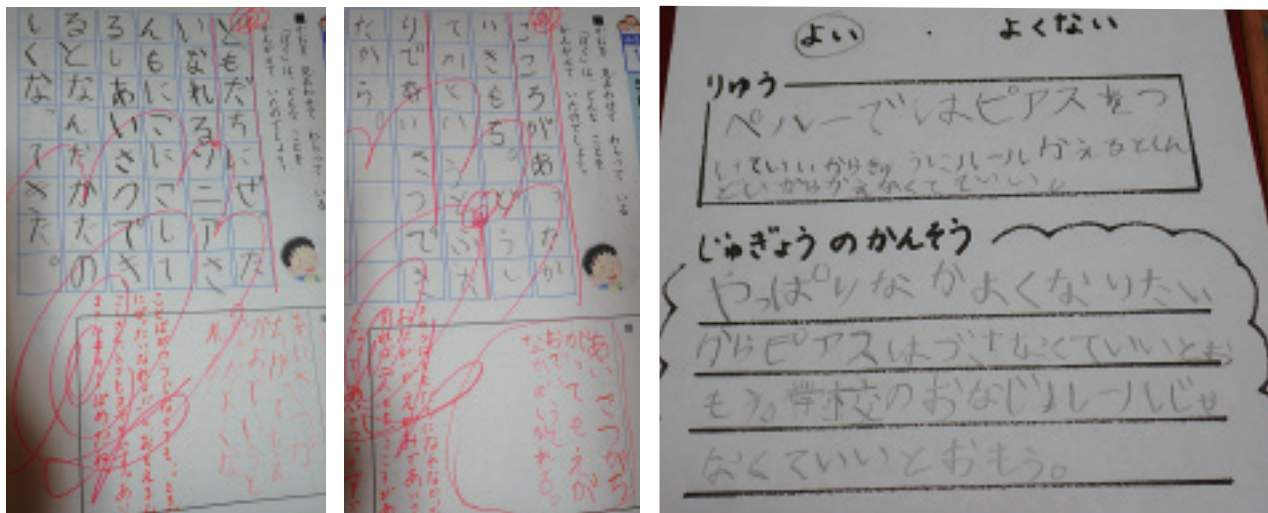
単元のはじめの方では、「違う」ということ自体がイメージできていない児童が多く、日本との違いや似ているところを知るのが「興味深い」「面白い」という印象が多かった。また、日本と同じように魚や日本の漫画が好きと知ると、親近感をもった児童が多かった。1年生であるからか、違いがあまりに多いところから「国が違うんやし、違って当たり前やん」と単元のはじめから「違い」に対して柔軟な姿勢をもつ児童も見られた。

ペルーへお散歩レッツゴー! ~にているところとちがうところ~ のワークシート



単元の中盤からは、違う文化をもつ人と自分との関わりについて考えていくようになった。実際に違う国の言葉であいさつしあう「あいさつゲーム」は「あいさつが難しい」と戸惑う児童も見られたが、練習して言えるようになると満足していた。「女の子がピアスをつけていいの?」と子どもから出た素朴な疑問をもとに、いいと思うかクラスでも話し合ったところ、多数の意見が出て、考えを深めていた。なぜピアスを付けているかを知ると「それを初めに教えてよ」と相手の文化を知ることの重要性に気づいている子もいた。題材を「人」にすることで、子どもたちのふり返りや発言が相手の気持ちを考えているものになっていっていると感じた。

外国からきた転校生①・②のワークシート



そこから、実際に転校生として日本に来たフランク・コルマさんの気持ちや体験を知ることによって、「他人事」だった感想が「自分も～～していきたい」など、「自分事」として書いた児童が増えた。(授業実践の様子のワークシートのふり返りを参照)明日からの行動につながる気持ちをもつことができた。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

「ペルーの授業は何か大切なことを考える授業だ!」という雰囲気をもつことで、クラス全体で真剣に話し合える機会が増えた。2学期をふり返る作文を書いたときに「大事なことがなにか気づく力がついた」と書いている児童がいた。クラスの中にいるが外国にルーツのある児童に対して、けんかすることはまだあるが、「何を言ってるか分からないから聞かない」などの態度はなくなった。また、世界の国のあいさつを書いたポスターを授業後に貼ったが、興味を示していた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

1年生は思った以上に世界の国についてのイメージがほとんどない状態だった。英語活動はしているため、「外国の人にはとりあえずハロー!っていったらいいやん。」という思いをもっている児童もいた。国が違うと食べているもの、季節、習慣、言葉がいろいろ違うということを丁寧に教える必要性を感じた。

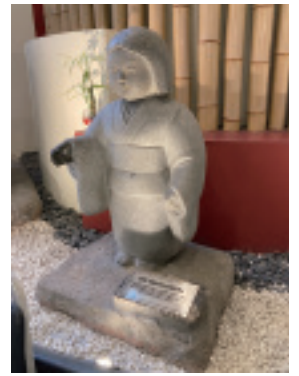
(授業後)

何が違うのか、具体的な写真や情報を伝えることで少しずつ分かっていった。日本が当たり前じゃないことに驚きながらもそれもいいね!!と受け止められる児童が多かった。日本とは違うけどペルーの人が「幸せ」と言っていた話をすると、「日本と違うからかわいそうって決めるのは変だな」とモヤモヤと考えている様子も見られた。

「外国から来た転校生」の授業を通して、自分が積極的に関わって相手に優しくしたいと思うことができたと感じる。

【8】自己評価	
1. 苦労した点	<p>ペルーと日本との違いを知る授業の中で、教師がどのような情報を与えるかで、児童のペルーに対する印象が違ってくる。「ペルーに行きたくない」など、ペルーのイメージが悪くなる可能性が出てくる。ペルーの盗難に関する話題に対しては「なぜ」という疑問を投げかけてくれたが、素直に答えるのが良いのか、迷った。答えることで危険だ、治安が悪いというイメージがつくと感じたからだ。その場は素直に答えたが、ペルーの素晴らしいところを伝えるはずが、子どもたちにとっては悪いところが印象に残ってしまったかもしれないと感じた。</p> <p>また、前半は写真をもとに授業をしていたが、写真だけだと想像の域を出ない。他人が勝手に想像することはできるが、それだけだと、相手を理解することはできないと学んだ。やはり、自分自身がコルマさんから聞いたように、本人から「自分の気持ち」を伝えてもらう経験は非常に貴重だと感じた。</p>
2. 改善点	<p>1年生にとっては世界の国々について何一つ知らない児童も多いので、いきなりペルーを題材にするのではなく、いろいろな国の文化や違いを知れるような授業を単元のはじめにしたほうが良いと感じた。</p> <p>また、自分が伝えたい単元の流れに固執しすぎず、子どもたちの声を聴いてそこで生じた疑問や感想文から、次に話し合うテーマを決める柔軟な授業運営の重要性に気づいた。特に低学年にとっては、「大切」とされる価値感を一方的に押し付けられるのではなく、そのことについて皆で話し合う必然性が重要なのだと感じた。</p> <p>また、低学年の児童にとって、誰かのエピソードを語るとき、挿絵や写真は必ず必要だと感じた。その挿絵を板書に残し、フィードバックできる支援が必要である。</p>
3. 成果が出た点	<p>子どもたちが学校にいる外国にルーツのある児童に対して、何気なく言っている言葉「何人?ハロー!」や「肌の色黒いやん」などを、子どもたち自身が考え直すことができたと感じる。1年生は何も考えず、素直に見て感じたことをそのまま伝えているだけだが、その言葉が、相手をとても傷つけるかもしれないということを学べたと感じた。</p> <p>また、単元のゴールとなる「世界の人たちがみんななかよくらせるせかいにする」というキング牧師の授業を軸にしたことも、1年生の児童が全ての授業がばらばらなのではなく、つながっているという印象をもつことができ、大変良かった。</p>
4. 備考 (授業者による 自由記述)	特になし

添付資料:使用した写真-1



添付資料:使用した写真-2



あいさつカード

参考資料:

『しょうがく どうとく いきるちから 付録 学校へいくとき・世界の国のあいさつ』日本文教出版

単元名: Tomodachi ni narimasenka?		
氏名: 酒井 春菜	学校名: 神戸市立菅の台小学校	
担当教科: 全教科	実践教科: 総合的な学習の時間	
時間数: 11時間	対象学年: 小学6年生	人数: 51名 (2学級)

【実施概要】

<p>【1】単元のテーマ・目標(評価の観点を意識して設定): 異文化理解</p> <p>ペルーの文化を調べたり、現地の小学生と交流したりする活動を通して、自分とは違う文化や習慣、考え方、価値観があることに気づき、多様な他者とよりよく関わるためにできることを考え、協働してペルーの小学生と交流しようとするができるようにする。</p>		
<p>【2】単元の評価規準</p>	<p>(ア) 知識・技能</p>	<ul style="list-style-type: none"> ペルーには日本と異なる文化があることを理解している。 ペルーの文化について調べ、ICT機器を用いて発表している。
	<p>(イ) 思考・判断・表現</p>	<ul style="list-style-type: none"> ペルーの小学生と交流するために必要なことを考え、学習の見通しを持っている。 ペルーの文化を日本の文化と比べ、共通点や相違点、その特徴について考えている。 自分とは違う文化や習慣、考え方、価値観があることに気づき、多様な他者とよりよく関わるためにできることを考えている。
	<p>(ウ) 主体的に学習に取り組む態度</p>	<ul style="list-style-type: none"> 学習の見通しをもってペルーの小学生との交流活動に進んで取り組んでいる。 自分と違う意見や考えのよさを生かしながら協働して学びあおうとしている。
<p>【3】単元設定の理由</p> <p>✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容</p>	<p>児童たちは、授業者がペルーの小学校を訪問すると知り、現地のホセ・ガルベス校の小学生への贈り物として、折り鶴アートを一学期に制作している。制作においては相手が喜ぶように、日本とペルーの仲が深められるようにと、まだ顔も知らない相手でも大切にしようとする姿勢が見られた。一方で、普段の学校生活においては、他人や他国に対して心無い言動が見られる。そういった言動には、児童たちの持つ常識に当てはまらない考え方に対するものや、表面的な情報に惑わされているものが見られる。そこで本単元を通して、ペルーの小学生と交流することで、自分とは異なる文化や考え方に触れ、多様な価値観を受け入れようとする姿勢を育みたい。</p> <p>授業者が訪問したペルー共和国は日本と深い関係がある。19世紀終わりから20世紀初めにかけてペルーへ渡った日本人移住者は、日本の伝統を受け継ぎながら、ペルー社会に大きな貢献をしてきた。それが、今日の良好な二国間関係の礎となっている。本単元で交流したホセ・ガルベス校も日系の学校である。遠く離れた国で日本の考え方や価値観が大切にされていることを紹介することで、ペルーを身近に感じるとともに、日本のよさを感じるきっかけにもしたい。</p> <p>授業では、児童の贈り物を受け取ったホセ・ガルベス校の子供たちの反応を映像で見せたり、互いに友達になりたいという気持ちを持っていることを伝えたりすることで児童が交流活動を楽しみに学習を進められるようにした。また、児童が抱くペルーの文化や学校に関する質問を授業者が預かり、ホセ・ガルベス校を訪問した際に現地の小学生に答えてもらった。単元前半の調べ学習ではその回答を題材にした。</p>	

単元全体を通して対話を意識した。その際、フォトランゲージを取り入れることでどの子どもが意欲をもって参加できるようにした。ペルーの小学生と交流することを通して、異なる価値観や考えを受け入れる姿勢を養うことが、隣の友達を大切にしようとする気持ちにつながってほしいという思いを込めた。

【4】展開計画(全11時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	<p>テーマ 「自分以外の国や人と仲良くするってどういうことだろう?」</p> <p>ねらい 国や文化の異なる人々と仲良くなるために必要なことを考え、学習の見直しを持つ。</p> <p>目指す授業後の児童の姿 ペルーの小学生と交流したい! ペルーについて知りたい!</p>	<p>①平和学習を想起する。夏休みの課題の中で「平和とは自分以外の国や人と仲良くすること」と書いた児童がいたことを取り上げる。</p> <p>②授業者のペルー訪問に際して、児童はペルーの小学生に贈り物を制作した。ペルーの子供たちが喜んでいたり、児童たちと友達になりたいと言ってくれていたことを紹介し、交流することを提案する。</p> <p>③仲良くなるために必要なことを考え、意見を出し合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント ・神戸新聞の記事(児童たちの贈り物が現地校に渡った際の写真) ・ペルーの子供からのメッセージ ・付箋
2 3	<p>テーマ ペルーについて調べる</p> <p>ねらい 相手の国(ペルー)について自分たちで調べたり、友達の発表を聞いて知ったりすることで、より興味を持ったり、日本との違いに気づいたりする。</p>	<p>①児童らがペルーについて現地の小学生へ送った質問、その回答を紹介する。</p> <p>②ペルーについてテーマを分けて調べる。グループごとに①をもとにした6テーマに分かれる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・伝統文化(祭りなど) ・学校生活(ルール・教科など) ・食べ物 ・遊び、スポーツ ・音楽、民族 ・特産物、観光地 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の質問に対するペルーの小学生からの回答 ・発表ノート
4	<p>目指す授業後の児童の姿 ペルーと日本では違うところがたくさんあるな。 ペルーについて知ると日本のことにも疑問が生まれてきたな。</p>	<p>①ペルーについて調べたことを班ごとに発表する。聞き手は気づきメモを取りながら聞く。</p> <p>②文化体験として、ペルーの楽器に触れる。</p> <p>③振り返り。ペルーについて知って、感じたことや驚いたこと、もっと知りたいことを書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・気づきメモ ・ペルーの楽器(サンボニーヤ、ケーナ、オカリナ、カリンバ)
5	<p>テーマ ペルーにある日本文化(日系文化)について知る</p> <p>ねらい ペルーと日本には深い関係があることを知ることで、日本との共通点やつながりに気づく。</p>	<p>①ペルーの日系学校、日系人協会の写真を見て、見つけたこと、考えたこと、疑問を出し合う。(フォトランゲージ)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・老人ホームの様子(日本人に見える年配の日系人の方々) ・日系(フュージョン)料理 ・日系学校の階段の掲示(5S=整理・整頓・清掃・清潔・しつけ) ・教室の様子(整理整頓が行き届いている) 	<ul style="list-style-type: none"> ・フォトランゲージ用の写真 ・付箋 ・丸シール

	<p>目指す授業後の児童の姿 ペルーにも日本のものがたくさんあるんだ! ペルーの学校でも、日本の考え方が大切にされているんだ! 日本っていい国だな。</p>	<p>②ペルーの日系社会について簡単な歴史を知る。「ペルーのあらし」より「日系移民」を読む。(『世界のともだち16 ペルー』P.39) ③振り返り。ペルーと日本のつながりについて知って、感じたことや驚いたこと、もっと知りたいことを書く。</p>	
6 本時	<p>テーマ 相手の行動の背景にある慣習や文化を想像することの大切さに気付く。</p> <p>ねらい 相手の背景を想像することで、周りの人の行動の理由を理解しようしたり、尊重したりする態度を養う。</p> <p>目指す授業後の児童の姿 自分にとって当たり前のことでも、国や文化が違ったら当たり前ではないのだとわかった。 ほかの国の人と仲良くするには相手の文化を知っておくことが大切だと思った。</p>	<p>①アクティビティ「もしかして…」を行う。 「もしかして…」 1)お題を読む。 2)そのお題の状況に対して「もしかして…」と考えられる状況を付箋に書いて出し合う。 3)全体で共有する。 4)そのお題の背景を表す写真を見る お題1 手食文化について お題2 ハラルフードについて お題3 ペルーの避難訓練について</p> <p>②ペルーの避難訓練の映像を見る。日本の避難訓練とは様子が異なることから、国や文化が違うと当たり前も異なることに気付く。そして「もしかして…」と、相手の背景を理解し尊重することが大切であることを振り返る。</p> <p>③2つの視点から選んで振り返り。 ・「もしかして…」と相手の背景を考えることができたか。 ・ペルーの小学生と交流するときに大切にしたいことを考えることができたか。</p>	<p>・お題カード ・付箋</p>
7 8 9 10 11	<p>テーマ ペルーの子供たちと友達になろう!</p> <p>ねらい 前時までの学びを生かして、ペルーの小学生と友達になるためにどのような活動をするか考え、交流する。</p> <p>目指す授業後の児童の姿 ペルーの小学生と仲良くなれた。交流が楽しかった。 ペルーが自分にとって大切な国になった。 ペルーのニュースが前よりも気になるようになった。</p>	<p>①どんな交流をすれば仲良くなれるか、計画を立て、準備をする ・ビデオレターを送りあう 内容 ・日本の遊び ・日本の料理 ・日本の観光地 ・日本の学校生活</p> <p>①交流をする ②振り返り。交流して感じたことを書く。</p> <p>①交流して教えてもらったことをもとに体験できることを実際にやってみる。 ・ペルーの遊び ・ペルーの料理 ②単元全体の学びを振り返る。</p>	

【5】本時の展開			
過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (3分)	1.単元のテーマを想起し本時の課題を確かめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の活動が主体的に進むように前時の話題をふり返る。 ・ふり返りカードを提示し、児童が本時の課題を意識できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パワーポイント
展開 (32分)	国や文化が異なる人と交流するとき大切なことを考えよう		
	2. アクティビティ「もしかして…」を行う (1)お題を読む。 (2) そのお題の状況に対して「もしかして…」と考えられる状況を付箋に書いて出し合う。 (3) 友達が出した考えに共感したら、その付箋に共感シールを貼る。 (4) パネル内側の写真を見る 3. 交流して考えたことを出し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ◆自分とは違う文化や習慣、考え方、価値観について写真を見たり意見を交流したりして考えようとしている。(発言) ・お題の答えとなる状況以外にも考えられる文化背景をパネルや映像で紹介する。パネルにはヒントとなる国旗や文化の特徴が写った写真を入れることで、児童が多様な価値観や文化に気付けるようにする。 ・ペルーの避難訓練の様子が日本とは異なることから、国や文化が違うと常識も異なることに気付かせ、「もしかして…」と考えることが相手を尊重することにつながることをおさえる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・付箋 ・丸シール ・動画 ・発表ノート
まとめ (10分)	4. ふり返りを行う。 2種類のふり返りカードから選択する。 緑…ペルーの小学生と交流するとき大切にしたいことを考えることができた。 青…今日のカードのお題を読んで「もしかして…」を考えることができた。	<ul style="list-style-type: none"> ・ふり返りの発表は色分けしたカードを投影し、意見の多い観点を先に取り上げてから、本時の課題をより深く考えた発言へとつなげ、児童の気づきを広げられるようにする。 ◆多様な他者とよりよく関わるためにできることを考えている。(発表ノート) 	

アクティビティ「もしかして…」について
 本アクティビティはJICA中国『「多様な社会」を考える』に掲載されたアクティビティ「もしかしてだけど!」を参考に、本校の児童の実態に合わせて方法や教材を一部変更して行った。

【授業実践の様子】

導入



展開:アクティビティ「もしかして…」

お題①

①給食の時間。今日のご飯の日。
え!!!アミールさんが手づかみで食べました!
行儀(ぎょうぎ)が悪くないかな…



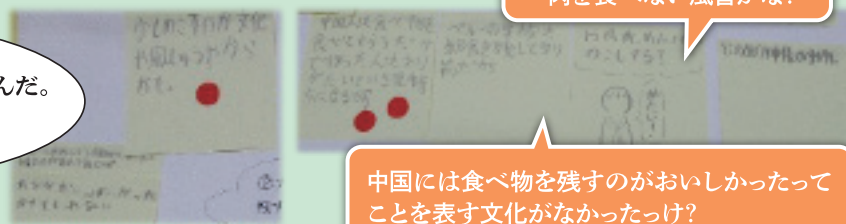
お箸が折れちゃったんかも。

インドやっけ?手で食べる文化がある!

え!?(思わず笑ってしまう児童も)

お題②

②ナディアさんはいつも給食を残すんだ。
しかもお肉ばかり。もったいないよ!

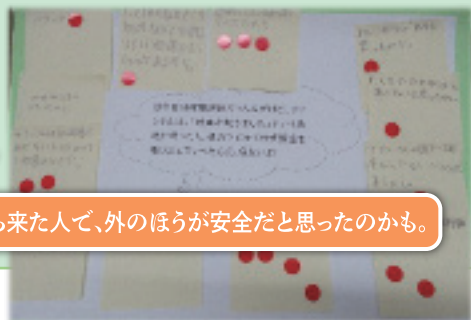


肉を食べない風習かな?

中国には食べ物を残すのがおいしかったってことを表す文化がなかったっけ?

お題③

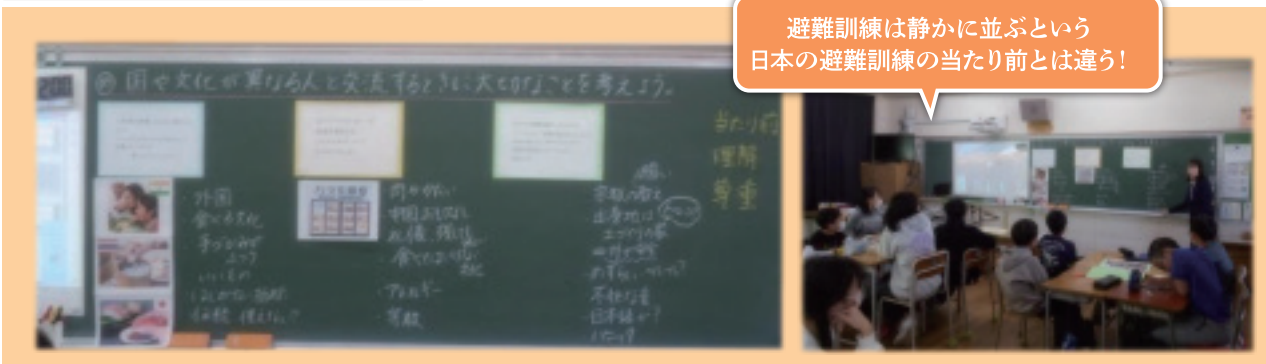
③今日は避難訓練だったんだけど、
ファンさんは、
「地震がきました」という放送が鳴ったら、
机の下にかくれず教室を
飛び出していったんだ。
危ないよ!



怖くなったのかな?

土づくりの家が多い国から来た人で、外のほうが安全だと思ったのかも。

まとめ



【6】本時の振り返り

前時までにはペルーについて調べたことで、児童はペルーと日本との違いに関心が高まっていた。そこで本時の活動を行ったことで、お題に対して異文化理解の視点をもってその背景を考えられていたように感じる。また、異文化に対してはもちろん、一緒に活動する友達に対しても終始互いを尊重する姿勢が見られたのがよかった。

今日のカードのお題を読んで「もしかして！」を考えることができた。

自分たちがやってない事をやっている国もあるし、もしかしてこんなんでいいとかを顔で話したりして意見を聞きあってお互いの意見に否定をせずに話し合っって意外なことやなるほどと納得したりしました。ペルーやインドやタイなどお題を使わない国もあれば地図の時に林に泳げる国もあるとはおもいませんでした。

ペルーの小学生と交流するときに大切にしたいことを考えることができた。

今日の授業で日本とは全く違う文化や考え方を持っているという事を再認識しました。特に食べ物を上手で食べるのほ少ししか理解してなかったらついで、「何してんの(笑)」となるから帰れてよかったです。今日理解したこと以外にもたくさん疑問な考え方があったと思うのでなんでも日本の当たり前で決めつけないようにしたいです。ただペルーの人たちからしても日本の文化は自分たちと同じようにおかしなところもあるかもしれないと理解するようになりました。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

夏休み前(ペルー訪問前)



先生がペルーに行くことになりました！ペルーの小学生に贈り物をしたいから手伝ってませんか？

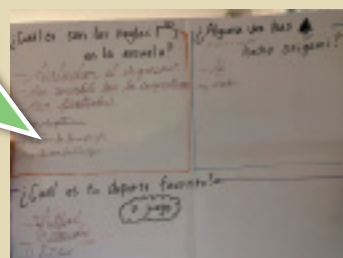
折り鶴アート

- 1組：ペルーの国旗の色で日本の桜を作りたい！
- 2組：ペルーと日本の国旗が手をつないでるようにしたい！

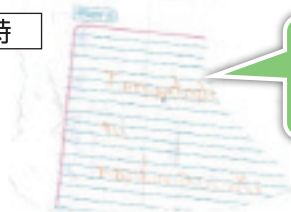
ペルーの子供たちへの質問

- ・好きなスポーツや遊びは何ですか。
- ・ペルーの有名な食べ物は何ですか。
- ・学校にはどんなルールがありますか。
- ・日本に対してどんなイメージを持っていますか。
- ・友達になってくれますか。

画用紙に書いて現地で答えてもらい、日本に持ち帰りました。



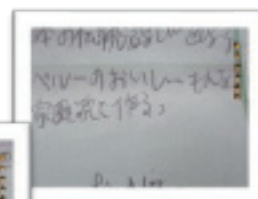
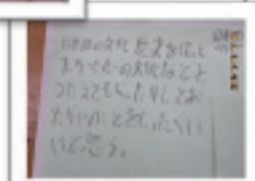
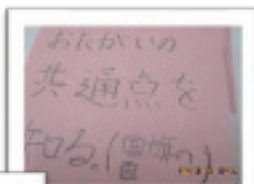
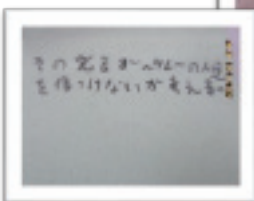
第1時



訪問した日系人学校でペルーの子供から受け取ったローマ字のメッセージ「Tomodachi ni Narimasenka?」をもとに単元をスタート。

友達になるー!!!

仲良くなるために必要なことは？



【第6時(本時) ※上記【授業実践の様子】】

文化が違ったら考え方も違うかもしれない…

- ・初めは驚いてしまうような行動でも、異なる文化があることを知ると納得ができ、相手の背景を知って、尊重することが大切だと気が付く児童が多くいた。
- ・反対に、日本の当たり前が外国人にとってはおかしな行動に見える可能性があることにも気づき、自分たちにとって大切なことも伝えてお互いに尊重しあいたいと考える児童もいた。

【第7時～ホセー・ガルベス校(ペルーの日系人学校)との交流】

ビデオレターを送りあおう!



〈遊び紹介チーム〉
準備が不要なく簡単に遊べる「指スマ」を紹介したい!



〈観光地紹介チーム〉
修学旅行や校外学習で行ったことのある場所を紹介したい!



〈学校紹介チーム〉
ペルーの学校との共通点を紹介したい!
出席番号のところにかばんを入れるのはペルーも日本も同じだったな!

〈料理紹介チーム〉
お互いの国のおいしいものを食べたら仲良くなれるはず!!
身近な日本料理で自分たちが作れるお味噌汁を作って紹介したい!



【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

単元を通して、児童がペルーの学校や小学生とのつながりを感じられるように工夫した。特に子供たちは夏休み前に自分たちが制作した贈り物・折り鶴アートが現地の小学生にとっても喜ばれたことを知ったときには、「交流したい」という意欲がより一層高まったように思う。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

これまで児童たちには外国語の授業を除いて、ほかに国際理解の学習の機会はなく、ペルーについてもほとんどの児童が国名しか聞いたことがなかった。一方で外国への興味・関心は高く、ペルーの小学生への贈り物の制作にはどの児童も意欲的に取り組んでいた。

(授業後)	
<p>ペルーについて日本とは違った独自の文化についてだけでなく、日系移民と彼らが伝えてきた日系文化について詳しく知ることができた。特に自分たちが守っている整理整頓などの決まりがペルーでも守られていることは印象深かったようで、ペルーを身近に感じるきっかけになっていた。</p> <p>さらに児童は異文化について知ることを通して、自国の文化を客観視するようになった。当たり前と思っていたことがそうではないかもしれないと気づいたり、自分たちの文化が外国人の目にはどう映るのか想像したりする姿から、児童の意識の変容が感じられた。</p>	
【8】自己評価	
1. 苦労した点	<ul style="list-style-type: none"> ・時間が限られる中で、日系移民の歴史についてどのように、またどの程度深く伝えるべきか悩んだこと。 ・時差が14時間あるため小学校の時間割では現地とオンラインで交流することができず、交流方法を工夫する必要があったこと。 ・児童がペルーとのつながりを感じられるように、できる限り実物や写真を用意したこと。 ・ビデオレター作成や交流の打ち合わせにおいてスペイン語翻訳をする必要があったこと。
2. 改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生について考える時間が十分に取れなかったため、児童が異文化を知ることにとどまってしまった。理解したうえでどのように行動するべきか考えるところまでじっくりと学習ができるよう単元計画を改善したい。
3. 成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が作った作品をペルーに届けたり、事前に書いた質問に対して現地の小学生に答えてもらったりしたことで、ペルーとつながっていることを児童が実感できたこと。 ・単元の最後にペルーの小学生と交流する活動を設定したことで、それまでの学習における視点が整理されたこと。特に調べ学習における振り返りで日本を客観的に振り返る視点が出たこと。

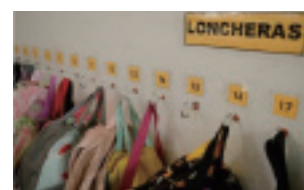
添付資料: 現地で撮影した写真



日系人協会のデイサービス



日系料理



日系人学校のように



5S (=整理・整頓・清掃・清潔・しつけ) の掲示

参考資料:

鈴木智子.世界のともだち16 ペルー.偕成社,2014,p.39

単元名:ペルーとの繋がりから多文化共生を考えよう		
氏名:竹辺 このみ	学校名:大津市立堅田小学校	
担当教科:5年生担任・外国語主任	実践教科:学級活動・道徳科・外国語科	
時間数:5時間	対象学年:5年生	人数:30人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標 (評価の観点を意識して設定)		
日本とペルーの移住史を通じ、文化理解を深め、外国人としてではなく「ひとりの人」として平等に接する素地を養う。		
【2】 単元の評価 規準	(ア) 知識・技能	歴史的にペルーと日本に繋がりがあることを理解している。
	(イ) 思考・判断・表現	ペルーと日本の似ているところや異なるところに気づき、日本との歴史的な繋がりについて適切に表現している。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	外国籍の転入生が来た時に、自分にできることを主体的に考えている。
【3】 単元設定の理由	<p>【単元設定の理由】</p> <p>本校は、全校児童約1000人が通う大規模校であるが、地域柄外国籍児童の割合はかなり少ない。そのため、外国人と触れ合う機会も少ないという現状がある。児童は授業を除くとインターネットの情報や人から聞いた情報などで、外国について知る機会を得ているように感じる。「もしも、今私たちのクラスに外国に繋がる児童が転入しても、文化の違いを受け入れ、相手を尊重できる人になってほしい」という思いでこの単元を設定した。</p> <p>【児童観】</p> <p>本学級の児童は、学級の友達の良いところをたくさん見つけられる児童が多い。学級の中でも様々な考え方や性格の違いがあることを理解しており、人の立場や気持ちを考えて、声をかけたり、行動することができる。また、外国語の学習において、世界の食べ物や世界の名所の写真などが取り上げられる際、非常に関心を示しており、「いつか海外に行きたい」という思いをもつ児童もいる。国語科とSDGsを関連させた学習や社会科の学習で「世界の食卓」でフォトランゲージを行ったり、「貿易ゲーム」を経験したりして、少しずつ外国への関心は高まっている。一方、児童の捉えでは、「自分とは別の国」という認識が強く、共生にまでは至っていない。外国人と接する機会が少ないがゆえに、「○○人」にこだわってしまうことや、「○○の国は貧しい」「○○の国のものはかわいい」など限られた情報で、世界での物事を切り取ってしまうことがある。</p> <p>【教材観】</p> <p>滋賀県では外国籍人口は年々増加傾向にある。国籍別でみると1位がブラジル、2位がベトナム、3位が中国、4位が韓国・朝鮮である。地域によっては外国籍児童が多く在籍する学校もある。県内においても外国人を見かけることが増えているが、関わりがないため「外国人」とひとくくりにしてしまうこともあるだろう。本単元では、多文化共生に繋がる様々な教材を取り入れ、児童が主体的に学ぶ活動を行う。現在だけを見るのではなく、過去(歴史)、現在、未来へと今後も繋がりをもてるように、歴史的背景について学んだ上で、現在ペルーで生きる日系校の児童とのビデオ交流を行う。「人」と繋がることで、「○○人」という捉え方ではなく「ひとりの人」として外国人と接することができるようになることをねらいとする。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容 		

【指導観】

本単元では、児童から事前に集めた「ペルーについて知りたいこと」について、教師が撮影したペルーでの写真をもとにフォトランゲージで答えを見つける活動を行う。その後、日本とペルーの歴史的な繋がりをフォトランゲージで考えていく活動を通して、移住の歴史に触れる。その際にJICA横浜の海外移住資料館で撮影した写真も活用する。移住の歴史があつてこそ、現在の日系外国人人口の増加に繋がると考える。ひょうたん島問題「あいさつがわからない」では異文化やマイノリティーを経験し、海外に移住した日本人や海外から日本に来ている外国人の気持ちを考えられるようにする。また、「ディエゴの物語」を通して、マイノリティーの気持ちに思いを馳せたり、異文化を受け入れるために大切な気持ちについて考える。ペルーの日系人学校との交流も行い、「ペルー」とにとどまらず、「ペルーで生きる人」との繋がりを感じられるようにする。

【4】展開計画(全4時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 学活	日本とペルーの繋がりを 見つけよう。  	・「どっちがペルー?どっちが日本?」 ペルーの写真と日本の写真を比べて、どちらかを予想し、ペルーに日系社会があることを知る。  ・日本人が移住していた歴史・現在もその子孫にあたる日系人がペルーで生活していることについて知る。 ・児童から研修前に集めた「ペルーについて知りたいこと」の答えを班でじっくり写真を観察しながら見つけていく。 ①ペルーで有名なところは? →マチュピチュ・ナスカ ・マチュピチュの初代村長は日本人 ・日本が最先端で研究を進めるナスカの地上絵 ②おいしい料理は? →セビーチェ(魚介)・パパアラワンカイーナ(じゃがいも)・ポジョアラブラッサ(鶏)・ロモサルタード(牛肉の野菜炒め)など ペルーはじゃがいもの原産地である ③ペルーの大統領は? →ディナ・ボルアルテ(女性初) 今年11月に佳子様が訪問された ※過去にはアルベルト・フジモリ(日系人初) ④ペルーで起こっている問題は? →犯罪:スマートフォン 1日4000台盗難 →防災:ミ・ペルー区の現状	ペルーで撮影した 写真など      

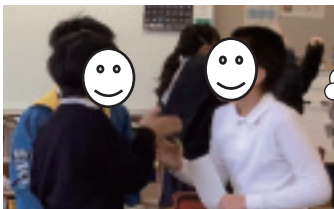
		<p>⑤何をして遊んでいる? →縄跳び・卓球(日系校ならではの) 児童らの質問に対するペルーの子どもの回答</p> <p>⑥ペルーと言えば? という質問に対しては、「すごく素敵な国」「人が優しくて、サービス精神旺盛」「食べ物と景色がきれい」という回答があったことを知る。</p> <p>⑦日本に来たら何をしたい? という質問に対しては、「サッカー選手に会いたい」「学校の行事を見たい」「日本料理を食べたい」という回答があったことを知る。</p>	
<p>2 道徳科</p>	<p>海外へ移住した日本人(マイノリティー)の気持ちを考えよう。</p>  <p>↑自ら地図帳を出して考える児童の様子</p> 	<p>・JICA横浜 移住資料館のPASSPORT(児童向けパンフレット)の中にある「この漢字、何て読むの?」を班でクイズ形式で行う。</p> <p>この活動で、生きていくために日本から様々な国へ出稼ぎ移民として移住していた歴史を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どんなものトランクに詰めていったか予想する。 ・実際にいくつかの写真を見て、持って行ったものを考える。 <p>・どんな気持ちで海を渡り、どんな思いで生活していたのか考える。</p>	<p>JICA横浜 移住資料館PASSPORT (児童向けパンフレット)</p>  <p>JICA横浜 海外移住資料館で撮影した写真</p> 
<p>3 外国語科</p>	<p>ペルーの子どもたちに日本について伝えよう。(動画撮影)</p>  <p>↑ Picture dictionary(単語帳)を見ながら給食の伝え方を考える児童</p> 	<p>・ラ・ウニオン校の子どもたちに向けて日本や私たちの学校について伝えたいことを出し合う。</p> <p>・スペイン語の簡単な挨拶を練習する。</p> <p>・これまで習った外国語(英語)を使いながら、わかりやすく伝えられるように練習する。</p> <p>・児童が伝えたい内容について動画を撮影する。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;"> <div data-bbox="566 1456 885 1635">  <p>「びわこ池」紹介</p> </div> <div data-bbox="901 1512 1204 1713"> <p>日本のお菓子紹介</p>  </div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 20px;"> <div data-bbox="566 1758 917 1960">  <p>好きな人物紹介</p> </div> <div data-bbox="933 1769 1204 2060"> <p>休み時間の過ごし方(大縄・ドッジボール)</p>  </div> </div>	

4 学活	ペルーの子どもたちからペルーについて学ぼう。	・ペルーから日本に届いた動画を見て、日本と似ているところや異なるところについて考える。	ペルーからの動画
<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; border: 1px solid black; border-radius: 10px; padding: 5px; margin-right: 10px;">児童の感想</div> <div style="border: 1px solid black; border-radius: 15px; padding: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・日系人のさとしさんの日本語がペラペラでびっくりしたし、すごいと思った。 ・日本の文化が尊重されていて、うれしい。 ・ぼくよりも習字の「成長」という文字が上手でびっくり! ・日本で「ドッジボール」というものがペルーでは「マタ・ヘンテ」といい、すごく似ていた。 ・キャリアケースで登校していたり、送迎してもらったりしてうらやましい! ・日本語や日本文化を習う教室があって、日本とペルーの絆を感じました。 ・ダンスがノリノリでとても楽しそうでした。 ・小学2年生で「幸せなら手をたたこう」を日本語で歌っていて本当にびっくりしました。 </div> </div>			
5 道徳科 本時	自分と異なる文化を持つ人と共に生きていくために大切な気持ちを考えよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・「ひょうたん島問題」の「あいさつがわからない」のアクティビティを行い、異文化を体験する。 ・同じ文化の人と出会ったときの気持ち・異なる文化に出会ったときの気持ちを考える。 ・現在、日本人の子孫である日系ペルー人・日系ブラジル人が日本に移住してきていることを知る。滋賀県の外国人人口統計を読み取る。 ・ディエゴ(日系ブラジル人)の物語をもとに、ディエゴの気持ちについて考える。 	<p>新版シュミレーション教材「ひょうたん島問題」明石書店</p> <p>まんが「クラスメイトは外国人—多文化共生20の物語—」明石書店</p>
【5】本時の展開			
過程 時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (15分)	<p>・アクティビティ「あいさつがわからない」を行う。</p> <div data-bbox="245 1727 564 1977" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> </div> <p>・滋賀県の外国人人口統計を読み取る。</p>	<p>・「ひょうたん人」「カチコチ人」「パラダイス人」のそれぞれの民族の特徴が書かれた紙を一人一枚配布する。周りの人には見せないよう伝える。</p> <p>・それぞれの民族になりきり、あいさつタイムをとる。</p> <p>・感想を共有し、同じ文化の人と出会ったときの気持ち・異なる文化に出会ったときの気持ちを考える。</p> <p>(ひょうたん人:マジョリティー パラダイス人:マイノリティー)</p> <div data-bbox="528 1809 1433 1883" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">自分と異なる文化を持つ人と共に生きていくためにできることを考えよう。</div> <p>・滋賀県には多くの日系ブラジル人・日系ペルー人が生活していることに気づかせる。</p>	<p>新版シュミレーション教材「ひょうたん島問題」明石書店</p>

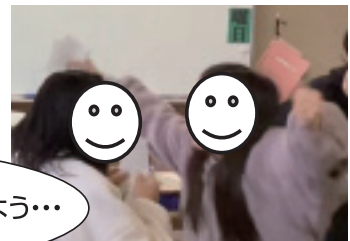
<p>展開 (15分)</p> <p>まとめ (10分)</p>	<p>・ディエゴの物語を読む。</p> <p>・もし外国人が転入してきたら、自分たちに何ができるか発表する。</p>	<p>・日系ブラジル人の転入生ディエゴ君のマンガから、転入当初の状況と、少したってからの状況を確認する。</p> <p>・ディエゴさんの気持ちを考えさせる。(外国人が日本の文化の中で生活する難しさ)</p> <p>・日本人も外国人も共に自分らしく生活するために大切なことは何か付箋に書かせ、交流タイムをとる。</p> <p>・ワークシートにこれまでの学習をふまえて、これからの自分にできることや外国人と共に生きるために大切なことについて考えさせる。</p>	<p>まんが「クラスメイトは外国人—多文化共生20の物語—」明石書店</p>
----------------------------------	--	--	--

【授業実践の様子】

【あいさつがわからない】

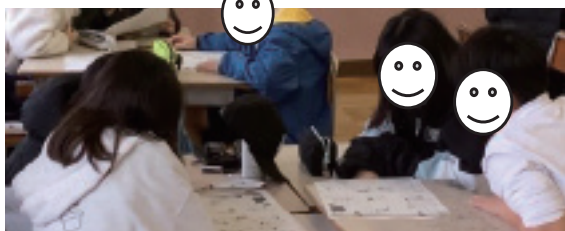


同じ挨拶で盛り上がる
「うれしい」「楽しい」



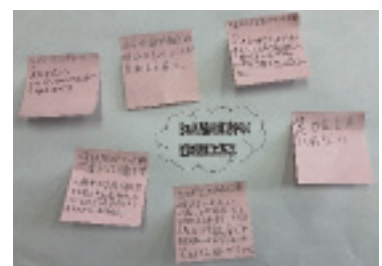
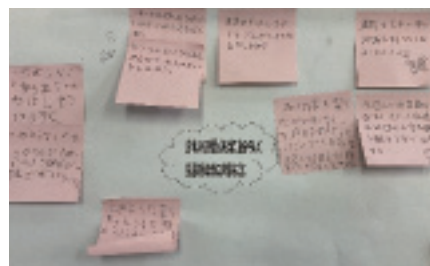
私の民族とは挨拶の仕方が違うよう…

【ディエゴの物語】



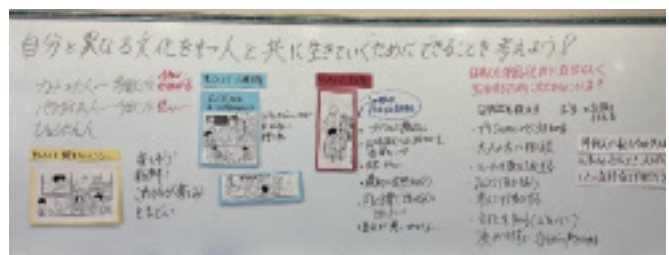
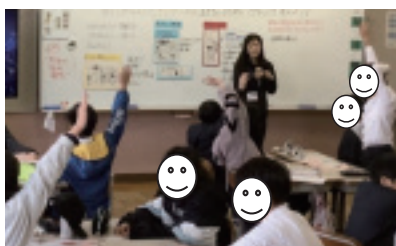
ブラジル人の転校生ディエゴ君が転入して間もない頃→転入して一週間→転入して一か月の3つの時点について、ディエゴ君の周りの児童の様子やディエゴ君の気持ちについて考えました。

【日本人も外国人も共に自分らしく生活するために大切なことは?】

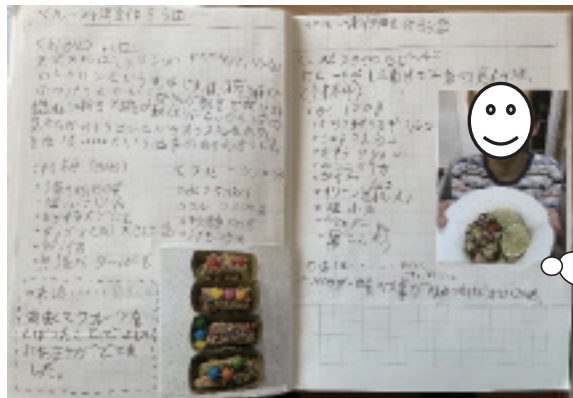


「相手の気持ちを考える」「自分の国や相手の国の魅力や文化を教え合う」「外国人だからって決めつけない」「自分が外国語を覚える」など様々な考えがでてきました。

【意見の発表】



【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】



事前アンケートで「外国の文化や外国人についてあまり興味がない」と回答した児童がどう変容するかを自身の中で課題としていた。実際に単元を通して、少し意識が変わったように振り返りから読み取ることができる。これからも自分と異なる文化に触れることに抵抗を示すのではなく、興味を持ったり、受け入れたりできるようになることを望んでいる。

まずはペルーを知ることから授業を構成したことで、ペルーに親しみをもつ児童が多く見られた。

学習後、自主学習ノートにペルーやスペイン語について調べたり、実際にペルー料理を体験する児童も…!

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

授業者のペルーへの研修は児童に伝えた上で、授業前にペルーという国のイメージを児童に問うと、「家族がいっぱい・明るい・笑顔・楽しそう・地形が細い」など肯定的な言葉が挙げられた。ペルーでの言語を自主学習ノートに調べてきたり、学習の中でペルーが取り上げられると反応している様子もあった。一方、日常会話から児童は自分が知り得た情報で、「〇〇の国は〇〇なイメージ」「〇〇人は〇〇な性格」など一面的に捉えているように感じる。

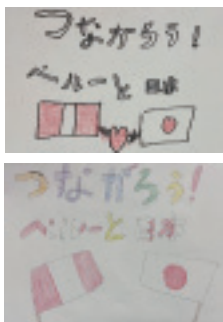
(授業後)

ペルーと日本のつながりを知って、自分とは関係ないものという意識を変えることができたように思う。歴史的な繋がりや、文化を「知る」ことを通して、授業を進めるごとに児童の前向きな気持ちの高まりがみられた。また、単元の最後には自分事として考える中で、「外国人」ではなく「ひとりの人」として接するという視点を与えることができた。

【8】自己評価

1. 苦労した点

- ・ペルーでの学びを、まず何の教科で実践するのかに非常に悩んだ。
- ・授業者が児童に伝えたいことと児童が知りたいと思うことにズレが生じないように、様々な教材や過去の実践例を参考に授業を練った。
- ・いかに児童が自分事として捉えられるか考え、実態に合わせて体験的なゲームを取り入れた。

2. 改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルーだけでなく、他の国の文化を紹介したり、体験したりすることで、より、多文化に触れることができたと考える。 ・ペルーで生きる人の生活を読み取れるような写真を用いて、フォトランゲージができるとよりよい。 ・もし総合的な学習の時間として時数を確保できれば、単元の終末に向けてできることの可能性が広がる。
3. 成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・実態に合わせて、クイズやゲーム的な教材を取り入れたり、マンガで道徳科の学習を行ったことで、児童が楽しみながら学ぶことができていた。 ・滋賀県に住む外国人について紹介したことで、外国人と将来関わる可能性を視野に入れて学習に臨むことができていた。
4. 備考(授業者による自由記述)  ↑ ふりかえりカード 綴じの表紙	○教師海外研修の報告会 勤務校にて、研修での学びを共有させていただいた。報告会を機に、開発教育や多文化共生について自身が行っていることや外国籍の少ない学校であるがゆえに、自身が行っていききたい多文化共生への課題について伝えることができた。これからは一人ではなく、興味を示してくださった先生方と多文化理解・多文化共生に繋がる授業を考えていけるとうれしい。 ○本時の授業実践の公開 勤務校では年度内に一回、一人一授業を公開することになっており、校内の先生に参観していただいた。参観してくださった先生から、『「あいさつがわからない」のゲーム、私のクラスでもしてみたい』や『ディエゴの物語を道徳でやりたいんだけど、まとめはどうしたらいいかな』などの声があった。今ある優れた教材を先生方に知っていただけたことで、多文化共生を伝える授業に取り組む壁が取り除けたと思う。

参考資料:

- ・新版シュミレーション教材「ひょうたん島問題」明石書店
- ・まんが「クラスメイトは外国人―多文化共生20の物語―」明石書店
- ・2022年12月末現在滋賀県の国籍別外国人人口 滋賀県国際協会
- ・JICA横浜 海外移住資料館児童向けパンフレット PASSPORT

単元名:ペルーから学ぶ“アリノメ、トリノメ”		
氏名:田端 浩多	学校名:天理市立朝和小学校	
担当教科:外国語	実践教科:総合的な学習の時間	
時間数:4時間	対象学年:6年生	人数:75人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標		
<ul style="list-style-type: none"> ・ペルーと日本と比べることをとおして、それぞれの国のよさや課題を知り、背景を探ろうとする。 ・自分や友達を、背景を意識して見ることで、人間理解の素地や、自尊感情を育む。 		
【2】 単元の評価 規準	(ア) 知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルーや日本の、今日的な課題について知っている。 ・自分や友達の良さや課題を見つけることができる。
	(イ) 思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルーや日本の良さや課題の背景について、理由をもって考え、表現することができる。 ・自分や友達の背景に目を向け、良さや課題を見つけることができる。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> ・ペルーや日本の良さや課題を主体的に見つけ、それに対して思いをもつことができる。 ・自分や友達の良さや課題を主体的に見つけようとしている。
【3】 単元設定の理由	<p>授業者が本実践で期待すること、それは「他国について知り、自分が生活している国と比較するなかで、それぞれの国のことを好きになったり、眼差しを柔らかくしたりすること」である。そのことは、人と人とが手を取り合うことを助け、世界平和へとつながっていくものであると信じている。</p> <p>もちろん、どんな国にも良さがあれば、課題もあることだろう。それは当然のことである。そこから目を背け、良さばかりを取り上げる方が、盲目的で薄い視点を育てることになってしまう。だからこそ、「どんな国にも良さと課題の両方があり、それも含めて仲間である」という意識を、子どもたちのなかに醸成させたいと考える。</p> <p>ただしそれは、そう簡単にいくものではない。例えば普段、子どもたちから発せられる言葉のなかに、「日本は遅れている・韓国の方がお洒落だ・アメリカの方が進んでいる」といった、自分たちの国に誇りを感じていないような発言を聞くことがある。また、「俺の親は中国が嫌いやから、〇〇(中国メニュー)のメニューは食べたくない・アフリカみたいな不便なところで生活できへん」といった、他国を蔑み、優劣をつけた発言を聞いたこともある。そうした感覚は、物事を一面的にしか見ていないから生まれるものであるのだろうが、マイクロアグレッションとして、日常の根底に流れているのだろう。</p> <p>「どんな国にも良さと課題の両方があり、それも含めて仲間である」という意識を醸成させるために、まずは子どもたちがそれぞれの国に抱いているイメージを受け入れるところから始めたい。なかには、「文化が理解できない・国民性が苦手だ」というように、マイナス感情もあるかもしれないが、そうした感情こそ受け止めていきたい。学習を進めるにつれて、子どもたちは、文化や国民性・起きている事象には、歴史や宗教といった『背景』が関わっていることに気付いていこう。そして、「苦手」が「興味」に変わる瞬間があるのではないかと考える。それに期待したい。ただし、国民性は画一的なものではなく、あくまで人を見る視点の一つなので、子どもたちには「〇〇人はこうである」という誤解を与えないように留意したい。</p>	
<ul style="list-style-type: none"> ✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容 		

本実践で、授業者はペルーという国を扱う。教師海外研修でペルーに出発する前、担当する子どもたちにそのことを伝えた。すると子どもたちは、ペルーの子たちにスペイン語で手紙を書いていた。帰国後、子どもたちは手紙の返事を見て、喜んでいた。ペルーが、少し身近な国になったように感じた。そんなペルーにも、国としての良さや課題がある。普段、子どもたちの会話にはあまり挙がらない国だからこそ、フラットにそれを感じられるのではないかと考えている。

さて、「物事には背景がある」という考えを得た後は、子どもたちがそれを、普段の関わりに生かせるよう、手助けをしていきたい。小学校の六年間をともに過ごしてきた子どもたちは、幼いころに抱いた同級生へのイメージを、良くも悪くも固定させている。なかには、「この子は会話が通じないから苦手だ・この子は教室に入れないから関わりづらい」といったマイナスイメージもある。それ自体にも物事の『背景』はあるのだが、イメージから排除が生じる可能性をしばしば感じ、怖くなることもある。行動の『背景』、現状の『背景』に目を向け、想像力を働かせることができるなら、マイナスイメージも和らぐのかもしれない。

さらに、他者の『背景』に目を向けることができたなら、自分自身にも意識が向くのではないかと思う。自分の良さや課題について知り、自身のアイデンティティを探すなかで、国と同様、「他者について知り、他者と自分とを比較するなかで、それぞれを好きになったり、眼差しを柔らかくしたりし、「みんなに良さや課題の両方があり、それも含めて仲間である」という考えに辿り着いて欲しい。そしていつの日か、世界の中で低いとされる、日本人の自尊感情を高めることにつながって欲しい。そんな願いを、この実践に込めた。

最後に、今後の展望について記述する。ペルーに関する実践が終わった後は、JICAと連携のもと、エジプトの小学校と国際理解教育の実践を行う。ペルーに関わる実践では、小学生同士でオンライン交流は行わないが、出前講座では、小学生同士のオンライン交流をする予定である。ペルーに関わる実践が「人を見る視点の素地をつくる」がテーマだとしたら、出前講座は「その視点を活用して実際に交流する」がテーマである。エジプトの実践では、より「個人」を見ることを意識した実践を展開したい。例えば、相手の顔や名前、価値観が分かるような内容である。このことにより、「○○人」という一つの見方を用いながらも、人は一人一人異なっているというメッセージを伝えていきたい。二つの機会が活用しながら、子どもたちに、人と理解し合えるかもしれないという期待感や、世界中に“友達”ができる可能性を感じさせたい。

【4】展開計画(全4時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	ペルーの良さを 知り、課題につい て考えよう!	<ul style="list-style-type: none"> ペルークイズや文化紹介で、学習への意欲をもたせる。また、日系人との写真を見せ、「日本人のように見えるがペルー人である」という驚きとともに、日系の歴史にも目を向ける。 ペルーで訪問したフェアレグリア33小学校の全校集会の動画を見せ、日本との違いについて考えを深める。 ペルーへのプラスの感情を醸成させた上で、4000という数字を示し、スマートフォンが1日に盗まれる数だということを伝える。 上記の理由について、「なぜ?」という問いとともに、背景を考える。 写真(物乞い・車の停車中に断りもなく洗車され、一方的にお金を請求される様子・バラック)を見せ、ベネズエラからの移民問題や貧困、格差社会といった複合的な理由があることを知る。 また、地図や写真(リマとカヤオ)を見せ、地区によって状況が違うことを知る。一例として、“海辺”は、外部と繋がりがやすく、だからこそ麻薬が蔓延していたり、マフィアが多いとされたりするという話があることを伝える。 	Keynote ワークシート 世界地図 ペルーの民芸品

		<ul style="list-style-type: none"> ・「○○人だから…」というように人を見るのではなく、様々な出来事には、歴史や宗教的な背景があり、それが深く関わっていることを知る。 ・良さや課題は、日本にもあるということに目を向ける。 	
2	日本の良さを知り、課題について考えよう!	<ul style="list-style-type: none"> ・前回の学習内容をふり返り、一つの国を「良さと課題」の両面から見ることや、そこには様々な背景が関わっていることを思い起こす。その上で、ペルーの良さと課題について、整理する。 ・「日本は安全だ」という児童のふり返りを紹介した後、「それでも日本に来て、“帰りたい・住みにくい”と感じる外国人がいるのだ」という例を紹介し、日本という国を「良さと課題」の両面から見る視点を与える。 ・日本を「国民性」の視点から分析することを伝える。そして、TVドラマ「VIVANT」で、ドラマの中に登場する外国人が、「日本人は他者を重んじ尊重する」と表現している画像を見せ、日本人とは一般的にどのような民族だと言われているかを予想させる(シャイ・時間を守る・同調主義などが出たろうと予測)。その上で、良さと課題について考えをもつ。 ・ペルーと同じように、日本も地区によつての違いはあるのかということに目を向けさせ、部落問題やアイヌ民族、琉球王国についても紹介する。 ・次に、日本を「学校教育」の視点から分析することを伝える。自分たちは学校が好きかどうかを考えた後に、その理由を考える。その後、日本の5Sの考えをもとに学校運営をしているペルーの日系校「ホセ・ガルベス校」を紹介し、良さと課題の両面から、日本の学校を捉え直す。 	Keynote ワークシート 世界地図
3	相手の「良さと課題」を、背景をとおして見てみよう!	<ul style="list-style-type: none"> ・自分と性格が合う友達、合わない友だちを思い浮かべさせ、その理由を考えさせる。性格には背景があると同時に、それは多面的であるということ伝える。 ・人と上手いかなかった経験から、「性格診断」を用いたことのある児童のことを例に取り上げ、人のアイデンティティを捉えるルーツについて考え、行動や性質には『背景』があることを知る。 ・人を形づくるアイデンティティの要素を探る。 (例:障害、性差、いじめの経験、趣味、習い事など) ・相手の理解できなかった行動、相手の賞賛できる行動について、相手の気持ちや背景を考える。そのことが、相手を捉え直しているということだということを知らせる。 ・相手を通して自分を見ると、自分も捉え直せることに気づく。 	Keynote ワークシート
4	自分の「良さと課題」を、背景をとおして見よう!	<ul style="list-style-type: none"> ・前時の経験を思い起こさせ、アイデンティティを形づくっている要素について思い出す。 ・トラブルの一例を挙げ、それが起こった時の自分の判断は、価値観によるものであると確認する。その後、自分を形づくっている要素について考える。 ・自分の好きな部分、嫌いな部分を思い浮かべさせ、その理由を考えさせる。 ・自分の行動も『背景』が関わっていることに気づき、経験とともにそれは変わることを知る。そのことで、これから自分の考え方や人生が変わっていきたり、変えていけたりする可能性があることに気づく。 ・相手にも自分にも良さや課題があり、それらは必ずしも受け入れられるものではないが、それを含めて仲間だという意識をもたせる。 ・今自分のことが嫌いだとしてもそれ自体は拒まれるべきではないこと、ただし未来に自分のことを好きになれる可能性があることを伝え、単元を終える。 	Keynote ワークシート

【5】第1時の展開

過程 時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (15分)	①ペルーの位置や文化、歴史などを紹介したスライドを見せたり、子どもたちのペルーへのイメージを聞いたりして、ペルーについて興味をもたせる。	・授業者がペルーで訪れた場所や驚いたことなど、実際の経験を紹介し、わくわく感をもって話を進められるようにする。	・世界地図 ・ペルーの民芸品 ・Keynote
展開 (10分)	②「4000」という数字を見せ、これが何を表しているのかを個人で考える。 ③その答えが「ペルーで1日に盗まれるスマートフォンの数」だということを知る。そして、それに対して思ったことをグループでシェアし、その理由を考える。	・誘導にならないように、どんな意見も受け止められるようにする。 ・4000台という数について、子どもたちがもつ感想は、教師の言葉によって狭められないよう注意する。	
まとめ (10分)	④背景として、「ベネズエラ移民・貧困の差」など、様々な要素が絡んでいることを知る。 ⑤それぞれの国、様々なものには、良さや課題があり、またそれには背景が絡んでいるという視点をもとに、ペルーや日本という国を捉え直す。 ⑥感想や学んだことをシェアし、次時に対する期待感をもたせる。	・事実を多面的に見られるように、子どもたちがイメージをもつための余白を意識した語りをする。 ・教師の伝えた内容が全てではなく、物事は見方により変わっていくことを知らせる。	

【授業実践の様子】

《①の場面》

- ・ペルーのイメージを子どもたちに聞いたとき、「ペルーは草むらが多そう。」「寒そうなイメージがある。」などの発言があった。ペルーのことはあまり知らない印象を受けた。
- ・訪れたスーパーで大量のジャガイモが陳列されていたり、商店で鳥が捌かれていたりする動画を見せたとき、「ジャガイモ多すぎやろ!」「野蛮な感じがする。」という声があがった一方で、「日本でマグロの解体ショーがあるみたいに、外国ではこれが当たり前なのかもしれない。」といった文化のちがいに目を向けている発言もあった。また、「トウモロコシのジュースを飲んでみたい。」「美味しそうな料理を食べてみたい。」といった、食文化に注目した発言もあった。

《②の場面》

・4000という数についてグループで考えたとき、子どもたちからは「1年間に来る台風の数」「民族の数」などの発言があった。マイナスイメージの発言をしたグループはいなかった。

《③の場面》

・「1日に盗まれるスマートフォンの数」だということを聞いて、子どもたちは驚いた表情を浮かべ、どよめいていた。グループで感想をシェアする場面では、「食べ物がおいしくて行きたいと思ったけど、行きたくないと思ってしまった。」「とにかくびっくりした。」と、戸惑っている様子が窺えた。

《④の場面》

・1日に4000台ものスマートフォンが盗まれる背景には様々な要素が絡んでいることを伝えたとき、子どもたちは、「日本では当たり前なのが、外国ではそうではないから、自分たちがいるところはいいところなんだと思った。」「貧困の差がこんなにもあるなんて思わなかった。」という発言があった。

《⑤・⑥の場面》

・授業時間の関係から、⑤・⑥は同時に感想を共有することにした。子どもたちからは、「ペルーは怖い国でもあるし、いい国でもあると思った。」「『えっ』と思うこともあれば、『すごいな』と思うこともあって、いろんな国のことを知るの楽しいと思った。」「ペルーだけではなくて、他の国や日本にも欠けているところがあると思う。」「国によって常識がちがうということを、初めて実感した。」といった意見があった。

【6】本時の振り返り

本時において、最も子どもたちの興味をひいたのは、「ペルーでは、1日に4000台ものスマートフォンが盗まれる」ということを知った場面である。授業終了後も、たびたび話題になっていた。ただし、学級のほとんどの児童が、ペルーについて怖いというイメージをもってしまったようだった（「ペルーは怖いから、ずっと日本でいたい。」と言っていた子どもがいたため、「みんなはペルーのこと怖いと思う？あまり行きたくない？」と聞いたら、ほとんどの子どもたちが手を挙げた。）。

とは言うものの、教師海外研修に参加した教員集団のなかにも、出発前は「無事に帰って来られるかな。」「怖くなってきた。」と話す人はいた。大人でもそうなのだから、子どもたちの反応は当然であると言える。今後、「日本・友達・自分」の背景を扱うにつれて、そのイメージが変化するのか、はたまたしないのかを、注意深く見守っていこうと考えていた。

本単元については、子どもたちは楽しみにしているようで、「次はどんなことを勉強するの。」「ペルーのこと家で調べてきた。」と興味が継続している様子が窺えた。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

子どもたちのふり返りからは、背景を意識することによって、人間関係を調整したり、イメージを見直したり、自身の内面を探ったりしていることが読み取れた。以下、ふり返りの内容を示す。

- ・改めて自分を見直すと、嫌なところや面白いと感じるところが出てきて、「こんなところあったのか…」となりました。ペルーの授業で学んだように、「背景」をキーワードにして、「なぜこうなったのかな」と自分なりに考えることで、「絶対こうだ!」とか「そんなはずない」などの決めつけが減り、「たしかにありえるかも」が6-2でも増えた気がしました。
- ・このペルーの授業で、いろんな人への接し方や印象が変わって、けっこう面白かった。
- ・このペルーの授業がなかったら、絶対に自分のことを考える機会なんてなかったと思う。だからペルーの授業をしてよかったと思うし、他の国にも興味をもてたからよかった。
- ・背景のことを学び、自分のことを考えると、良さはあまり、頭の中に浮かんでこなかった。課題はすぐに出てくるが、良さは、恥ずかしいとかではなく、普通にでてこなかった。背景を考えるのは、少し難しかったけれど、考えたときに改めて、「昔のできごとが原因で、今の自分・性格を生み出したんだなー」と思った。今はあまり人を信用しないようにすることによって、あまりウソに引っかかりにくくなった。
- ・ペルーの授業をとおして、他の国にも色々な背景があるんだと知れたし、自分はこういう人だったんだみたいな、自分を見直したきっかけになったと思う。
- ・この勉強で自分のことを深く知れて、いい機会になりました。また、何年後かに同じことを考えてみると、「面白いだろうな」と思いました。
- ・ペルーはあまり聞かない国だったけど、授業を受けていろんなことを知った。これから人へと接し方を変えたいと思いました。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

子どもたちのふり返しからは、他国へ興味をもてたり、決めつけずに関わっていく態度を備えたりしていることが読み取れた。以下、ふり返りの内容を示す。

- ・最初はペルーに行きたくないと考えていたけど、ベネズエラ問題もあって、実際行ったら面白いんだろうなと思いました。
- ・ペルーの印象は、授業を受けるまではいい方だったけれど、1回目の授業のときに、10%くらいまで下がってしまった。けれど、背景があることを知って、その背景を深掘りするのが楽しかった。今はペルーにいきたいです。
- ・ペルーの授業の初めは、1日にスマホが4000台盗まれたり、勝手にバスなどをふいたのにお金をせびられたりして、怖い国なんだと思ったけど、それにも背景があって納得した。
- ・このペルーについての授業で、他の国にも興味をもった。いざ他の国について知ってみると、日本と環境や色々なことがちがっておどろいた。この授業で、いろいろなことに興味をもてたり、新しいことを知ったりできた。何にも背景というものがあることに気づいた。
- ・ペルーみたいに美食、めずらしいものが売られているのに、あまり知られていない国があるんだなと思った。ベネズエラは貧困が多く、もしぼくがここに生まれついていれば、すごくしんどかったのかもかもしれません。
- ・ペルーという国では、ちょっと前まで銃撃戦があったところがあったなんて、すごく怖いです。でも、ペルーにはおいしい食べ物があるんだなとも思いました。いろんなことを知れました。

【8】自己評価	
1. 苦勞した点	<ul style="list-style-type: none"> ・第1時において、『1つの国には、良さと課題の両方がある』ということ伝えるために、ペルーの良さ(美食の国、歴史的な遺跡があることなど)を紹介した後、課題となる「1日に4000台のスマホが盗まれる」ということを取り上げた。子どもたちは、かなりショックを受けていたようだった。子どもたちのイメージが、そこから離れなくなってしまうのか不安だった。 ・第2時目の授業実践が最も苦勞した。外国に行った経験のない児童がほとんどで、他国との比較ができないなか、日本の良さや課題について考えるのは難しかった。次回より、レディネスの把握は必要不可欠である。
2. 改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの実態から組み立てた授業であるため、状況により切り口は変わってくるだろうと思う。例えば、国際理解教育が十分になされ、背景を探ることに慣れている集団であるならば、より高度な目標が設定できることだろう。 ・対して、人権感覚が十分に醸成されていなかったり、落ち着いて考えることが難しかったりする集団であるならば、授業においてその国の良さと課題を出すことが、差別心を生むことにつながらないか考える必要がある。
3. 成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・友達関係において、「理解できないけど、頑張っている。」「何か理由があるのかもしれない。」といった、背景に目を向けた発言が増えた。子どもたちの視野が広がったのではないかと考える。 ・本単元終了後に、広島県に修学旅行に行った。修学旅行では平和学習を行い、日本がかつて経験した戦争について触れるのだが、その際に「背景はあるけれど、命が奪われるのはいけないことだ。」というふり返りがあった。背景を理解したうえで、許されない行為もあるという、一つ踏み込んだ視点に進めた子どもがいたことは大きな成果である。

添付資料: (作成したKeynoteより)





参考資料:

- ・犯罪発生情報(年計)警視庁

<https://www.keishicho.metro.tokyo.lg.jp>

(参照日2023年9月12日)

- ・スマホ盗難大国ペルー1日平均4753台

<https://www.keikoharada.com/blog/2023/07/robo-de-celulares.html?amp#more-52745>

(参照日2023年9月12日)

- ・Crime in Peru: More than 140,000 cell phones were reported stolen in March

<https://www.infobae.com/en/2022/04/17/crime-in-peru-more-than-140000-cell-phones-were-reported-stolen-in-maech/>

(参照日2023年9月12日)

単元名: Beyond Borders		
氏名: 内海 拓人	学校名: 京都市立大淀中学校	
担当教科: 英語	実践教科: 英語	
時間数: 7時間	対象学年: 3年生	人数: 25人

【実施概要】

<p>【1】単元のテーマ・目標(評価の観点を意識して設定)</p> <p>自分の願いと他の人たちの願いを比較し、場所や状況の違いでどのような変化があるのかを知る。</p> <p>また、自分たちとは異なる状況で困りを抱える人たちのために何が出来るかを考える。</p>		
<p>【2】 単元の評価 規準</p>	(ア) 知識・技能	仮定法(wish / if)と主語を説明する関係代名詞などに理解をもとに、国をこえて助け合うことの大切さについて、理解したり伝えたりする技能を身につけている。
	(イ) 思考・判断・表現	国をこえて助け合うことの大切さを理解したり伝えたりするために、国際社会の状況について書かれた文章の概要を捉えている。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	国をこえて助け合うことの大切さを理解したり伝えたりするために、国際社会の状況について書かれた文章の概要を捉えたり、意見や感想を伝えたりしようとしている。
<p>【3】 単元設定の理由</p> <p>✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容</p>	<p>【生徒観】</p> <p>生徒は修学旅行とその事前事後学習を通し、SDGsの背景や概要について学習し、「地域の幼稚園児に伝えられるように」というコンセプトを持って、身の回りから実践できる行動や、SDGsの促進を伝える学習をしてきた。また、英語の学習では、単元を通してSDGs達成のための活動だけではなく、国際協力や相互協力といった取り組みの大切さについて学習を重ねてきた。</p> <p>一方で、実生活はと言えば、他地域との交流が少なく、同世代に関わらず他者との関わりが少ない生徒が多い。これまでに行ってきた学習でも、「自分の魅力」や「地域の魅力」について伝える活動に困りを抱える様子が見られた。</p> <p>【教材観】</p> <p>本単元は、中学3年間最後のユニットとして、国際協力、相互協力、相互援助というテーマを取り上げている。具体的な内容としては、日本のランドセルをアフガニスタンに送るという実際の取り組みが紹介されている。世界では学校に通うことができず、読み書きもできない子ども達が多く存在している。このような子ども達を、国境を越えて支援する意義について考えることができる。また日本は、多方面にわたり他国との相互依存に頼っていることも踏まえ、他国と健全な関係を保つためには、自分たちに何が出来るのかを発信していくことができる単元となっている。</p>	

【指導観】

教科書本文や文法を活用しながら、自分たちの生活から生まれる願いや希望と、発展途上国など、自分たちの生活とはかけ離れた状況で生活する人たちの願いや希望を比較することで、改めて自分たちの生活の魅力に気付いてほしい。また、異なる環境での生活を知ること、今の自分たちだからこそ出来ることや取り組めることについて考え、行動しようとする意志を育てたい。

単元では支援の例を大きく取り上げているが、授業者自身がペルーで一番強く感じたのは一方的な支援という枠を超えた相互の信頼関係である。国や地域に対する支援をするにしても、そこには歴史的な背景や理由がある。ペルーの場合はかつての日本の移民政策が大きく関わっている。ペルーに移り住み、生活をしてきた人たちの日本やペルーに対する思いは、実際に現地で聞かなければ、学ばなければ決して理解できないものであった。教師である授業者自身がしっくりきていなかった国際協力という言葉を生徒が正しく理解し、実現のための行動に向けて育成するためには、他者理解の心が必要不可欠だと改めて感じた。ペルーの歴史を語らなくとも、当事者の心情について想像し、考えながら学習することが出来るように進めていきたい。

【設定時に想定された生徒の変容】

通常の単元教材を扱っているだけでは、遠い地域の関係のない人たちという認識だけで終わってしまっていたかもしれないが、ペルーを含む、他国の生活を交えて話すことで、より鮮明なイメージを持って自分たちの生活との比較ができる。異なる世界と比較することで、自分たちの生活にある魅力も改善点もより深く理解し、よりよい生活を作るために必要なことが何かを考えることができる。また、支援という意味の国際協力だけではなく、他者の気持ちを理解しようとする事、その背景に目を向けようとする事に積極的になってほしいと思う。また、大きい規模の話をも自分自身の話に引き付けて考えることで、日々見逃しがちな身近な生活においても、その気持ちと意思を持った関りができるようになる。

【4】展開計画(全7時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	<ul style="list-style-type: none"> 単元の概要と目標を知り、ゴールへの見通しを持つ。 wishを使った表現の用法を理解する。 自身と異なる状況で生活する人たちの様子を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> 身近な話題から自分たちの願いや夢について伝える表現を復習する。 自分たちの現状では叶えることが難しそうな願いについて伝える表現を知る。 国や地域によって異なる状況や気候・物価などを確認する。 海外でのボランティア活動に取り組む学生の映像を見て、ユニット全体の概要を捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> パワーポイント New Horizon3の動画
2	<ul style="list-style-type: none"> wishを使う仮定法の用法を復習、練習する。 教科書本文内容を捉える。 ifを使った仮定法の用法を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ターゲットセンテンスを用いた質問をしたり、答えたりして、用法と使用場面を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> パワーポイント New Horizon3の動画

3	<ul style="list-style-type: none"> ifを使う仮定法の用法を復習、練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「もしも～だったら、〇〇は…する／できた。」という文を使い、自分たちの想像の世界を考え英訳する。 	<ul style="list-style-type: none"> パワーポイント New Horizon3の動画
4	<ul style="list-style-type: none"> ifを使う仮定法の用法を復習、練習する。 教科書本文内容を捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> 音読練習を中心に、ペアで対話の内容を捉える。 練習プリントを用いて、活用に慣れる。 	<ul style="list-style-type: none"> New Horizon3の動画
5	<ul style="list-style-type: none"> 教科書本文内容を捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> 新出語彙や語句を調べながら、グループで文意を読み取り、まとめる。 	
6	<ul style="list-style-type: none"> 教科書本文内容を捉える。 	<ul style="list-style-type: none"> 新出語彙や語句を調べながら、グループで文意を読み取り、まとめる。 	
7	<ul style="list-style-type: none"> 相手の立場に立って、どうするか考えて伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> 「〇〇の国で暮らしていたら…」「家族や友達が困っていたら…」など、の状況で自分がしたいこと、自分が周りの人たちのために出来ることについて考える。 	

【5】本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (8分)	1. Warm-Up ・Greeting ・Guess what game ペアで順番に、お題となった物を相手に伝えるように英語で説明する。	<ul style="list-style-type: none"> ペアの会話で使用された表現を板書することで、交代後の活動をレベルアップさせるように意識する。 	パワーポイント
(10分)	2. Small Talk ・What do you want to have for dinner today? ・What do you want for Christmas? ・What do you want to do during winter vacation?	<ul style="list-style-type: none"> 生徒に身近な話題から展開し、叶う叶わないに関わらず自由に発言させる。 すぐに生徒個人を指名せず、ペアで応答する時間をとる。 正確性を求めすぎず、リキャストで訂正する程度に留める。 	パワーポイント
展開 (12分)	3. Whose Wish Quiz ①I wish I could eat sushi at a lower price. (Japan / America) ②I wish I had any pets. (Japan / Brazil) ③I wish I could take a bath for longer time. (Japan / Australia)	<ul style="list-style-type: none"> 物価、ペット飼育率、水道代、交通手段や渋滞状況、生活の違いやそれぞれの理由について意見を求めながらクイズを出題する。 必ずそれぞれの答えに対する理由を合わせて尋ね、根拠となる知識を引き出すように意識する。 	パワーポイント

<p>(6分)</p>	<p>④I wish I could drive a car safely. (Japan / Peru) ⑤I wish I could use a public toilet freely. (Japan / Italy)</p>		
<p>(10分)</p>	<p>4. Volunteer in Afghanistan 大学生がアフガニスタンで建築や開発に関わるボランティアを通し、将来の進路や希望を掴んでいく動画を視聴する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> •動画内では男子大学生が「自分の趣味や楽しみの一つとして、ボランティアに参加することも良い」と語っている。 •Unitタイトルの“Beyond Borders”の通り、国を越えて協力することの大切さだけではなく、外に目を向けるからこそより強く見えてくる周囲の様子や現状があることを強調し、単元末の内容に繋げる。 •班隊形になって取り組ませることで、個々の疑問点を解消させ合うようにする。 •班で答え合わせをさせきる。 	<p>New Horizon 3 Unit6の動画教材</p> <p>東書ワークシート</p>
<p>まとめ (4分)</p>	<p>5. Practice 練習プリントで、wishを使う英文の用法を確認する。</p> <p>6. Closing 多く見られた間違いを取り上げて、文法上の注意事項として伝える。</p>		
<p>【6】本時の振り返り</p>			
<p>単元の導入として日本と他国とを比較するための情報として、ペルーを含む外国の状況を活用した。他の単元同様、生徒にとって身近な話題とそうでないものを組み合わせることで、文法や教科書本文内容の学習にスムーズに入ることができた。生徒は外国に関する話を情報として聞くよりも、教員の語るエピソードとして聞く方が強い関心を持ってくれる為、知識ではなく経験として語ることがより出来るようになりたいと思った。</p>			
<p>【7】単元を通した児童生徒の反応/変化</p>			
<p>・「外国の話聞くことは面白いし、話をする先生が楽しそう。」・「海外の生活や様子について話を聞くと、行って見てみたいと思います。ボランティアの動画を見て、自分も大学生になったらやってみたいと思った。」・「今回の内容は自分とは遠いものだけど、自分でも簡単にできることがあることが分かった。」・「仮定法の文はイメージがしやすかったから英語にするのが簡単だった。wishとif. 過去形とwould, couldを使う。」・「クイズが面白かったけど簡単やった。他のも見たい。」・「日本では不登校の人以外は学校に行くのが当たり前と思っているけど、家の仕事で行けない人が沢山いることに驚いた。」</p>			

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

単元の1時間目に、見通しを持った目標と単元末活動の内容が分かりやすいかそうでないかで学習意欲が大きく変わってくる。この学年の生徒たちは、反復練習に多くの時間を割かなければ学習項目の定着が難しい。そのため、目標や活動内容についても単元を通して何度も伝え、説明し、練習している。今回の様に、単元末にパフォーマンス課題を行なわない場合は、それが難しい為、実生活と海外との比較のような遊び感覚で学習内容や異文化に目を向けることが出来る活動を導入で活用した。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

本単元に入る前から、様々な場面でペルーを含めた様々な異国の文化や様子を伝えながら授業を組み立ててきた。例えば、「日本ほど安全な国は他に無い」と海外の人たちが口にする理由は何か。食生活や文化、何が大切で何は重要視されないのかなど、家庭や地域ですら多様な違いがあるのだから、国が変われば違って当たり前だということを伝えてきた。その為、今回のユニット指導において活用した国の比較においても、「前に見た国はこうだった。」などと、これまで英語や社会の授業で学習してきた内容や知識を活用しての発言が多くなってきていた。

(授業後)

導入に本文内容とは別の情報を加えたり、自身の意見や気持ちを伝えたりする時間を与えることで、授業や外国自体に興味をもって会話や質問をする姿が多く見られた。クイズを更に要求する生徒もいれば、知識を生かして何か別のクイズを作ることが出来ないかと、そのための時間を要求する声もあった。しかし、中学校英語最後の単元ということもあり、内容以上に文法項目に強い関心がある生徒が多い様子が見られた。本時の授業後に行なうのは文法事項の確認と、学びたくても学ぶことができない子どもたちを救うためのキャンペーンについての読み取りである。単なる文法練習と読み取りで終わるのではなく、現地で生活する人たちの気持ちを想像しながら読み進めることで、自分たちの生活にも目を向けて、自分たちに出来ることやしたいことについて言葉にしてもらいたい。授業者自身が知らなかった情報や、思いもしなかった気持ちを大人であり教師である授業者から発信することの意味は大きいように思う。知ることが全てではないが、知らなければそのまま流されていることが沢山あるということを今後の授業で伝えたいと思う。

【8】自己評価

1. 苦勞した点

特別にペルーに関して何かを学習するわけではなく、ペルーを含めた諸外国についての情報を活用した授業なので、授業の組立については、普段同様であるから困りは無かった。しかし、どの部分が教材として適切かを考えることにはどの単元でも時間がかかった。別単元においては、他国の状況例として、時間をかけてペルーについて伝え、考えてもらう時間を取った。生徒の興味関心を引き付けることはできるが、話したい全ての内容を授業に繋げることは難しく、取捨選択に苦勞した。

<p>2. 改善点</p>	<p>学年事情も関係しているが、単元の学習を始めてから単元末の活動をするまでに時間が空いてしまうことが一番の改善点だ。せっかく引き付けられた生徒の興味関心も、日が経つにつれて薄れてきてしまう。今回の授業に限った話ではなく、どの単元においても、興味関心の持続ということが悩みの種となっている。今回の授業では、時数を気にしなければ、生徒の希望に沿って、日本と異文化を比較するクイズを作るための時間を取ることが出来れば良かった。</p>
<p>3. 成果が出た点</p>	<p>単元末活動に向けての効果的な動機付けができた。最終に予定している課題設定とは別の内容で取り組んだ対話・口頭練習では進出表現を確認しながら自分の気持ちを懸命に伝えようとする姿が見られた。また、単元の学習の中でALTに入ってもらえる時間が取れたため、授業者が提示したものはまた別の視点からの経験談を聞かせることもできた。体験・経験からくる情報や知識が一番生徒の興味関心を引くため、言語学習に移行するための良いきっかけとすることが出来た。</p>
<p>4. 備考 (授業者による自由記述)</p>	<p>夏の出発前に生徒アンケートを取っていたこともあり、多くの生徒が今回の研修について興味を持ってきていた。授業内外において様々な質問を投げかけてくれることがとても嬉しかったし、その意欲を学びに還元したいと強く感じた。今回の授業計画ではUnit6という単元を取り上げたが、どの単元でもどの教科においても、伝えるのではなく、語り、考えさせることが出来るようにしなければならない。今回の経験を経て、改めて、子どもたちの琴線に触れる知識と経験を持った教員でありたいと思った。</p>

添付資料:授業で用いたパワーポイントスライド



参考資料:

- ・アメリカとの値段比較
[家族3人で1万円超 アメリカの『くら寿司』が日本とは比べものにならなかった - grape [グレイプ] (grapee.jp)]
- ・ブラジルとのペット飼育率比較
[[グローバルのペット飼育率調査] (gfk.com)]
- ・オーストラリアとの水道代比較
[オーストラリアの水道水事情や水不足について現地在住の日本人女性に聞いた (waterserver-takuhai.jp)]
- ・ペルーとの交通渋滞の比較
[ペルー国 統合交通システムのための交通データ利活用分析技術普及・実証・ビジネス化事業業務完了報告書]

単元名: 単元名: 地球の裏側と繋がっちゃおうプロジェクト ~多文化共生とアイデンティティ~		
氏名: 里見 拓也	学校名: 大阪市立佃中学校	
担当教科: 英語、総合	実践教科: 英語、総合	
時間数: 8時間	対象学年: 中学1年	人数: 131名

【実施概要】

<p>【1】単元のテーマ・目標 (評価の観点を意識して設定)</p> <ul style="list-style-type: none"> • 様々なルーツの文化について学び、多文化共生へ向かう人格形成を行う。 • クラスや社会の多様な生活や文化に触れ、理解しようとする意識を醸成する • 英語で情報を発信したり、受け取ったりすることで英語学習への意欲を高める • ペルーの子どもたちとの交流(動画交流)を通じて、他者の価値観との出会いを演出することで英語を活用することへの主体性を引き出す。 		
<p>【2】単元の評価規準</p>	(ア) 知識・技能	<ul style="list-style-type: none"> • 英語を使って自分や学校などを紹介する語彙/文法を知る • 多文化共生やアイデンティティへの知識を得る
	(イ) 思考・判断・表現	<ul style="list-style-type: none"> • 英語を使って自分自身や学校などを紹介することができる • 多文化共生社会の実現について考えを深められる
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	<ul style="list-style-type: none"> • 課題に対して主体的に取り組んでいる
<p>【3】単元設定の理由</p> <p>✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容</p>	<p>本校のある大阪市西淀川区には、人口の約5%ほどの外国人が暮らしており、大阪市全体と同程度の割合である。本校にも海外ルーツの生徒が複数在籍している。また、本校の近くには大阪マスコムがあり、ムスリム文化をバックグラウンドとする方々が暮らしており本校にもムスリム文化を持つ生徒が数名在籍している。</p> <p>加えて、日本の未来を概観すると超少子高齢化社会となり、労働力不足にともなう移民の受け入れ、技能実習生の存在といった外国人との共生が必要な未来が予想される。</p> <p>そこで本校1年生を対象として、多文化共生社会の実現、自己と向き合うことでのアイデンティティ形成を目指した授業案を作成した。</p> <p>中学1年生は、エリクソンの発達段階によると青年期への移行期である。青年期は、自己確立の段階であるため自分が何者なのかと向き合う時期となる。しかし、テストで結果がでない、部活動での成果がでないなどの経験から他者といわずに比較し自尊心を損ない劣等感を抱く生徒が少なくない。</p> <p>このような時期に、英語という言葉を通じて自己と向き合う機会を得ることで自己肯定感や学習意欲の向上を目指した授業の価値は高いと考える。</p> <p>英語という言葉は主語を明確にして話す言語である。日本語では話す際には抜け落ちてしまいがちな自分や他者を明確に言い表す言語であるからこそ、自分や他者と向き合いやすい。また、母語である日本語では曖昧にできる表現であっても、直接的な表現で正直に表現しやすい特性がある。また、英語を学ぶ意欲は英語を使う原体験がなければなかなか引き出すことは難しい。</p>	

これらの背景を受け、本単元では多文化共生とアイデンティティの形成を主目的として、南米ペルーにある日系校であるLa Union Schoolとの動画交流プロジェクトを行う。

ペルーには日本をルーツとする日系ペルー人が暮らしている。日系人の歴史を学び、日本人としてのアイデンティティを大切にしている彼らの姿から学びたい。

また、日系ペルー人との交流を通じて、母語ではない言語を用いることの楽しさや難しさ、地球の裏側であってつながることでの国際交流の価値を体感させたい。

【4】展開計画(全8時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	[リマ市ってどこ? どんどこ?①] ・ペルーについて調べ、関心を高める。	<ul style="list-style-type: none"> 国際交流に関するアンケートを実施する リマ市のLa Union schoolとの動画交流を伝達し、意欲を引き出す リマ市のあるペルーについて調べ、まとめる 項目:国土面積/3種類の地域/人口/それぞれの民族割合/首都/あいさつ/食文化/宗教/学校制度/観光地/民族衣装/お祭り/スポーツ 	Keynote Chromebook Googleドキュメント(ワークシート)
2	[リマ市ってどこ? どんどこ?②] ・ペルーについて調べ、関心を高める ・日系ペルー人の歴史について知る	<ul style="list-style-type: none"> ワークシートの答え合わせを含めて、ペルーについてクイズや文化紹介を行う La Union Schoolが日系人の学校として設立されていること 日系人の歴史について伝える 次回に向けた多文化共生社会がなぜ必要なのか伝達。 	Keynote Chromebook ワークシート
3 本時	[多文化共生・アイデンティティとは①] ・身近な海外ルーツの魅力を感じる ・海外ルーツの生徒の自己肯定感を高める	<ul style="list-style-type: none"> 様々なルーツのある生徒や大人の自己紹介を読み、海外ルーツへのポジティブな興味を引き出し、海外ルーツだけでなく同じ教室の中にも様々な文化があることを知る。 実際に海外ルーツの3人の生徒の協力をもらい、インタビューを実施した。インタビュー内容を元に英文での自己紹介を作成した。 	Keynote Chromebook ワークシート 多文化共生パズルカード
4	[多文化共生・アイデンティティとは②] ・日系ペルー人の抱える葛藤を共有し、2つのルーツを持つことでの難しさを知る	<ul style="list-style-type: none"> 日系ペルー人である大城成美さんが撮影編集されたUbicua(ユビキタス)を視聴し、日本とペルーという2つのルーツに関わる葛藤を共有し、もやもやとした問いを持つ。 La Union Schoolから送られて来た学校紹介ムービーを視聴する。 	Keynote Chromebook 映像作品Ubicua
5~7	[学校紹介ムービーを作ってLa Union Schoolに送ろう] ・英語で発信することの楽しさや難しさを実感する	<ul style="list-style-type: none"> グループで学校行事や施設についての映像を作成する。 レポーター、カメラ、小道具、台本など役割を明確にする。 	Keynote Chromebook ワークシート
8	[自分と向き合いプロジェクトを振り返る] ・プロジェクトの振り返りを行い、自己を見つめる時間をもつ	<ul style="list-style-type: none"> プロジェクト全体のリフレクションを行い、互いに学んだことを共有する 自分自身について振り返り、アイデンティティを見つめる時間をもつ 国際交流についてのアンケートを実施する 	Keynote ワークシート

【5】本時の展開			
過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	<p>[チェックイン] Social Emotional Learningとして深呼吸をし、自分と向き合う時間を作る。</p> <p>[前回の振り返り] ・ペルーの概観と日系人の歴史について振り返りを行う。</p>	<p>自分と向き合える環境を作る。強制するのではなく、あくまで本人のやりやすい方法を支える。</p>	<p>・Keynote</p> <p>・Keynote</p>
<p>[Today's Goal] 多文化共生社会って「めっちゃ素敵やん!」と知る。</p>			
展開 (30分)	<p>・グループに分かれる</p> <p>[ワーク①] ・海外ルーツパズル 4人の海外ルーツを持つ生徒の生活を知る。4人のそれぞれ6枚に分かれた自己紹介パズルカードを読み、どれがどの人の自己紹介かを予想し集める。</p> <p>[ワーク②] ・ジグソー法で4つの場所に分かれて、それぞれの自己紹介を読む。</p> <p>[ワーク③] ・自分のグループに戻り、読んできた内容を共有し、正しくパズルを並べ替える。</p>	<p>・グループで協働できるような声かけや支援を行う。</p> <p>・グループで担当者を決め、4箇所に分かれる際に役割を明確にする指示を行う。</p> <p>・自分が正しい情報を得ないとグループで正しく並べ替えられないことを伝える。</p>	<p>・パズルカード</p> <p>・自己紹介シート</p> <p>・ワークシート</p>
まとめ (10分)	<p>[チェックアウト] ・グループで感想の共有をする</p> <p>・オランダの学校の事例を紹介し、多文化共生を行う上での葛藤と希望を共有する</p> <p>・リフレクションシートに本時の振り返りを記入する。</p>	<p>・「4人の生活を知って、どのように感じましたか?」「多文化共生を実現するために何が必要ですか?」という2つの問いでリフレクションする</p> <p>・正解はないことを前提として困難さや疑問を抱えながら生きていくことを伝える</p>	<p>・リフレクションシート</p>

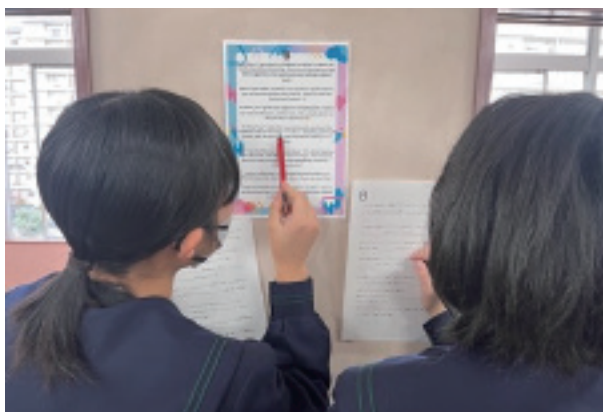
【授業実践の様子】



教室の様子



ワーク①パズルを並べる



ワーク②自分の担当箇所を読む



ワーク③グループで正しく並べる

【6】本時の振り返り

本時を終えての生徒の感想は「楽しかったー!!」であった。いくつかの点で振り返りたい。

- ・海外にルーツのある生徒へのインタビューを通じて、授業者自身も多くの気づきを得ることができた。個々の文化についての理解はもちろん、興味を持って知ることへの理解が深まった。
- ・パズルのように並び替えるという活動は明確に答えがある中で正解を探すという活動であるため生徒たちは謎解きの感覚で前向きに取り組める仕掛けとなった。
- ・英語の難易度については当該学年の教員と協議しながらであったが中学1年生にとってはレベルの高いものとなった。しかし、未履修の文法や語彙であっても興味関心が高まれば易々と乗り越えることがわかった。難しくても知りたければ辞書やインターネットを最大限活用しながら情報を集める姿が見られた。興味深かったのは翻訳アプリを使う生徒に対して「それじゃあ、力つかへんし、おもんないから俺は使わん」と言った生徒がいたことである。
- ・子どもたちは自分の知っている子のルーツに関わる内容であるからこそ知りたいと願い、主体的に取り組んでいる姿が見られた。
- ・インタビューさせていただいた生徒の保護者には前向きに関わってくださる方がおり、実際にクリスマスに飾るための装飾品を作ってください、自分の国の文化について語ってください。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

*提出時に単元を終えられていないため現状の報告となる。

授業以前にはなかった多文化共生や、アイデンティティといったテーマについて考える機会となっている。全く考えたことのなかったことが自分の周りに存在していることを意識することで自分のアイデンティティに関わる文化について意識することができるようになった。

また、海外ルーツの生徒については、特に多文化共生の授業で取り上げたことで、「家族と話す機会になったこと」や「自分のアイデンティティについて伝えることが楽しみにつながった」という感想があった。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

・以前から主体に学ぶ生徒たちであったが今回のように明確な目的を持って単元を進めることでより前向きに学習に取り組む姿がみられた。

・多文化共生というテーマについて考えたことのなかった生徒が今回の学びを通じて、海外ルーツについてや自分たちの身の回りにある多文化共生を知ることができた。

・実際に英語を使って伝えるという機会を通じて、自分自身の英語がいかに乏しく、学習が必要か実感する機会となった。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

多文化共生という言葉自体を知らない生徒も多数いる状態であった。「国際交流をしたいか」というアンケートでも、肯定的な回答は40%程度であった。西淀川という地域には多数の海外ルーツの方々暮らししているが学校での学びという点では深められていない状態であった。そのため、意識の変容という意味ではそもそも意識していないというのが正直なところであった。

(授業後)

*提出時に単元を終えられていないため現状の報告となる。

多文化共生とアイデンティティをテーマとして取り組んだが、ほとんどの生徒にとってはそもそも考えたことのないテーマであったことから意識するという点で変容が見られた。特に、海外ルーツの生徒や日系人のアイデンティティや文化に触れることができ、知らなかったことを知る過程で自分自身も振り返る機会となっていた。国際交流についてもはじめての経験であるため、どのように作用するか楽しみではあるが企画段階であっても前向きに英語に取り組む姿勢からも異文化との交流時に母語と異なる言語が使えることの有用さは伝わっているのではないだろうか。

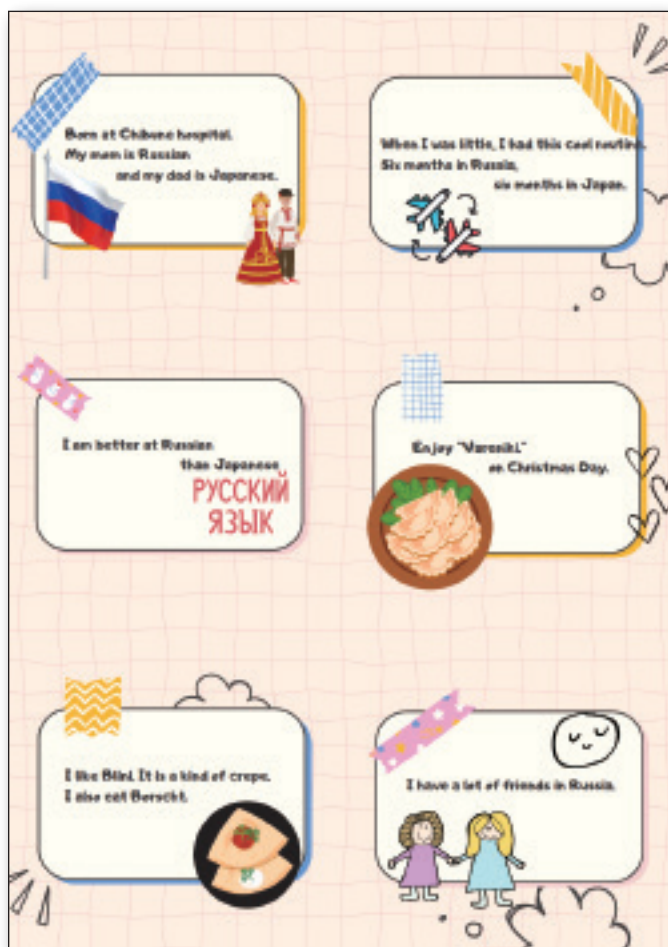
【8】自己評価	
1. 苦勞した点	<ul style="list-style-type: none"> ・準備段階での現地校とのやりとりが思うように進まず、授業の開始時期が遅れてしまった。 ・学びの真正性にこだわり、現地校との関わりや海外ルーツの生徒へのインタビューの教材化を行った点は苦勞したがやってよかった点でもある。
2. 改善点	<ul style="list-style-type: none"> ・現地校とのやりとりについては限界があるにせよ、現地で顔を合わせる段階である程度の見通しを作っていく方がよかった。 ・コンテンツが盛り沢山となる回に関しては内容を精査し、振り返りの時間をとれるような授業展開とすべきだった。
3. 成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生への理解は促進された。知らなかったことを知ることによって国際理解が進んだことは確かである。 ・日本以外にルーツを持つ生徒が主となる課題設定を行う授業があったため、彼らの存在にスポットを当てることができた。 ・国際交流に興味のなかった生徒にとっても交流の機会を作ることができ、それまでは意識していなかったことに目を向ける機会となった。
4. 備考 (授業者による自由記述)	特になし。

参考資料:

- ・山本 崇雄 教えない授業の始め方,アルク
- ・大阪市. 大阪市の外国人住民数等統計のページ,大阪市,
<https://www.city.osaka.lg.jp/shimin/page/0000431477.html>

添付資料:

多文化共生カード



添付資料:
ワークシート

B

こんにちは！私は日本の_____出身です！私は_____で、_____で文が_____なんです。だから、私は魔法のミックスを作って食べますか！

小さい頃、私は_____がありました。7年の_____で過ごして、もう_____で過ごします。まるで2つの家があるみたいでした！👉

家では_____と_____の魔法を話します。魔法は_____で話しますが、実は_____の方が上手なんです！👉

お正月や特別な行事では、「_____」という習慣があります。これは中に飾が入った_____のようなもので、ちよっとした_____に使います。とても楽しいんです！

家では結構_____で、食べるものの約7割が_____です。_____ (グループの一種)が好きで、もちろん_____も、それはロシアの餃子、_____も大好きです。最高です！

2歳のときにクリスマスパーティーで_____、_____の伝統的な服を着ました。とっても楽しかったです！

夏休みにはロシアに戻りました。ロシアにもたくさんのお友達がいるので、ロシアに帰ってくるのがいいことをしたいと思っています！👉

A

みなさん、こんにちは！私の家は_____出身です！私は_____人で、魔法のミックスは_____とあるんだ。家族は_____世代までに_____ペルーに居住した。

家では_____で話さないと、魔法「_____」とか「_____」といった_____も習って使った。それが私たちの特別な魔法ミックス！

ペルーではクリスマスには26日に大きなお祝いがあって、_____と_____ (甘いパン) を焼くので、25日の深夜には_____を交換して家族全員で挨拶するんだよ。とっても楽しいんだ！日本ではちょっと違って、お正月が大きなお祝いだよ。

_____ではお正月には、運気を高めるために_____の餅を焼く。たくさん焼くことができるように12時に_____を焼いて餅の作りかえが多いたりと行った面白いミックスがあるんだよ。

うちの魔法では、_____と_____、そして_____を食べることがあるんだ。大晦日には_____と_____ (豚の角煮) を、それにペルーの七喜糖も一緒に焼くんだ。まるで文化のミックスが魔法に広がる感じ！

自分のミックスを習りに来っていて、オクスももっとみんなと共有できるのが楽しみ。

C

みなさん、こんにちは！私は日本の_____出身です。実は私のバックグラウンドは_____とっても面白くて、魔法が_____で、家族が_____なんです！👉

小さい頃、2歳から_____、実際に_____に住んでいました！だから、_____と_____の魔法を習うことができたんですが、今はあまりよく話せません。家では_____と_____を話します。おもしろいことお、毎朝_____でジョークを言ってみると、例えば「_____? Also rugenda?」と聞くと、「ヒンダミ」(はい)と笑顔で返されるんです。

伝統について話すとき、フィリピンではクリスマスが_____が一番長く続けられています！👉 私たちは_____を大切にしています。また、お正月も楽しいです。魔法と一緒にゲームをしたり、_____を焼いたりして、クリスマスには2、3つのケーキを買って、バスタやまがまを料理を食べます。_____や_____も楽しんでます！私たちは花火と_____で年を締めくくります。それは日本のおせちを食べる習慣とは違って、魔法で楽しい火曜日のんです。

家では_____を食べています。_____と_____が大好きなんです！フィリピンでは何でもご飯に混ぜるのが一般的です。お米ではマナーが面白いと思われていますが、_____ではそれが普通なんです！

クリスマスで帰ると、もっと私の日本とフィリピンの魔法についてシェアできることを楽しみにしています。ではまたね！👉

添付資料:

自己紹介カード

B

Hey there! I was born in Chibune Hospital in Japan. My family is pretty interesting. My mom is Russian, and my dad is Japanese. So, I guess you can call me a mix of both!

When I was little, I had this cool routine. Spent half the year in Russia and the other half in Japan. It was like having two homes! 🏠

At home, we speak both Japanese and Russian. I talk to my mom in Russian, and fun fact, I'm actually better at Russian than Japanese! 🇷🇺

For New Year's and other special events, we have this tradition called "Vareniki." It's like a dumpling with stuff inside, and we use it for a bit of fortune-telling. It's a blast!

We're pretty Russian at home. About 75% of the food we eat is Russian. I like Blini, a kind of crepe, and of course, Borscht. And I love the Russian dumplings, Pelmeni they're awesome!

I put on a Sarafan, a traditional Russian outfit, at a Christmas party when I was three. It was so much fun!

I came back to Russia during summer vacation. I have a lot of friends there. I hope to do something cool related to Russia in the future. 🌍

A

Hi everyone! My parents are from Peru! They're Nikkei, and our family has roots in Okinawa. My great-grandparents moved to Peru in the early 1910s.

At home, we talk in Spanish, and sometimes we add a bit of Japanese, like saying "Good morning" or "Thank you." It's our special language mix!

During Christmas in Peru, we have a big feast on the 24th with turkey and Panet n, a sweet bread. At midnight on the 25th, we exchange gifts and greet each family member. It's super fun! In Japan, it's a bit different because New Year is the big celebration.

In Peru, we have some funny traditions for New Year, like wearing yellow for good luck or walking with a suitcase at 12 o'clock for lots of travels!

At our dinner table, we eat Peruvian, Japanese, and Okinawan dishes. On New Year's Eve, we have Okinawa soba and Rafute (braised pork) along with the Peruvian roast turkey. It's like a mix of cultures on our table!

I'm proud of my roots, and I can't wait to share more with you in class. See you soon!

C

Hi everyone! I'm from Osaka, Japan. I have a super interesting background because my mom is from the Philippines, and my dad is Japanese. 🇵🇭🇯🇵

When I was little, I actually lived in the Philippines for three years from when I was two! That's why I could speak both English and Tagalog but I cannot speak English well now. At home, we speak Japanese and Tagalog. It's funny when I try joking in Tagalog with my mom. I'd ask her, "Am I pretty? Ako maganda?" and she'd say, "Hindi!" (No) with a smile.

Speaking of traditions, in the Philippines, Christmas is the longest celebration in the world! 🎄 We cherish our culture a lot. New Year's is different too. We play games and have parties with relatives. For Christmas, we buy 2 or 3 cakes, eat pasta, and lots of different foods. We even have Halo-halo and Jollibee! We end the year with fireworks and karaoke. It's a loud and fun New Year's Eve, not a quiet osechi-eating one like in Japan.

At home, we eat Filipino food. Adobo and Goto are my favorites! In the Philippines, it's common to mix everything with rice. In Japan, they say it's bad manners, but it's just how we do it in the Philippines!

I'm excited to share more about my Japanese-Filipino life with all of you in our class. See you soon! 🌍🇵🇭🇯🇵

単元名:満たされる「もの」「とき」について考える。		
氏名:金場 澄人	学校名:和歌山市立東和中学校	
担当教科:音楽	実践教科:総合的な学習の時間(国際理解)	
時間数:1時間	対象学年:1年生	人数:32人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標(評価の観点を意識して設定):			
自分たちが「満たされるもの・満たされるとき」とは何かを考える。			
【2】 単元の評価 規準	(ア) 知識・技能	ペルー共和国の概要、日本とのつながりや現状について理解する。学習したことや自分の生活を振り返り、比較する。	
	(イ) 思考・判断・表現	学習資料をもとに、ペルー共和国の実態と自分の生活環境について考え、意見を述べるができる。	
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	授業で学習したことをもとに、海外の国や人にどのように関わることができるか考える。	
【3】 単元設定の理由	<p>現代の日本の社会は非常に便利で、特にスマートフォンの普及率は、一人に一台に達しようというところである。インターネットやスマートフォン、コンビニエンスストアなどの普及によって授業者が感じることは、待たなくてもよいことである。あらゆる分野で迅速な対応が可能であり、ストレスを感じることはない。知りたいことはすぐに調べることができるし、欲しいものは注文すれば翌日には受け取ることができる。私たちはそのような環境を軸にして生活している。</p> <p>生徒たちは社会科の地理分野において海外の生活等について学習しているが、それは伝統的な生活様式や特色のある気候の内容が中心で、今回の授業で扱うものとは異なる部分が多い。そして、生徒が教科学習の中で開発途上国について学習する部分は多くなく、特に南米の開発途上国について知り得る機会は少ないと考える。授業ではペルー国内(リマ市内)で撮影した様々な街の風景の写真を使用する。その写真の中には美しく煌びやかな雰囲気のものや、その逆のものもあり、社会の授業で学習することとは一味違う内容のものを狙っている。また授業を行うにあたって留意すべきことは、負の面を強調しないことであると考えている。生徒たちが再び海外の国について学習することで、自分たちが生活している日本とはどのような国なのかを振り返り、海外の国々へ目を向けたり興味を持ったりするきっかけにしたい。</p>		
【4】展開計画(全1時間)			
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	・自分が満たされる「もの」や「とき」について写真を見ながら考え、海外の国に関心をもつ。	・自分たちの普段の生活を振り返りながらペルー共和国で撮影された写真を分類し、国の概要や実態について知るとともに、将来どのような形で海外の国々と関わっていくことができるかを考える。	・写真(ペルー共和国国内で撮影したもの) ・模造紙 ・ワークシート

【5】本時の展開			
時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	・グループで考え、発表。	・本時の授業は、直感と自分自身の生活そのものを振り返りながら考える必要があることを伝える。	
展開	・今日の授業の目的を伝える。		
	自分たちが「満たされるもの・満たされる時」とは何だろうか？		
	(快適な生活を実現するものや、心が安らぐものとは何かを、提示された写真資料を見ながら考える) ・住み心地の良い家 ・テレビ ・どこに行っても清潔 ・あらゆる分野において(特に生活面)迅速な対応をしてもらえる ・スマートフォン ・様々な情報がすぐ手に入る ・自転車(スポーツバイク)		など
(20分)	≪グループワーク≫ ・設定されたルールに基づき、写真をならべていく。	・設定されたルールに基づき写真を整理することでどのような国であるかイメージを膨らませる。	・ペルーの写真、模造紙、ワークシート。
(25分)		★設定されたルール (別紙ワークシート資料参照)	
	・どのような国か?国名は?などグループで短時間話し合い、発表する。(国のイメージを文字にしても良い)	写真を見て想像できることを言葉や文字にする。 (国名やその国のイメージなど) 例:「〇〇国」または「楽しそうな国」など	
(30分)	・既習事項の写真を見て国名を思い出す。 ・実際の国名を伝える。 ・ペルー共和国の概要について知る。	・社会科地理分野で学習していることを伝える。 ・自分たちがイメージしていた国とペルー共和国との違いを意識するよう伝える。	・写真(地理分野教科書の写真)
(40分)	≪個人で考える≫ ・本時の目的の、「自分が満たされるもの・満たされること」についてもう一度考える。 (1~2人発表)	・授業内容で良いと思ったこと(ペルー共和国の良いと感じた部分)について、意識して書くことができるよう助言する。	・ワークシート
まとめ (50分)	・授業のまとめ	・自分は将来、海外との関わりを持ってみたいと思うか考えさせる。	

【授業実践の様子】

ペルー共和国リマ市内で撮影した写真を、満たされる感覚があるもの、そうでないものに分類した。生徒たちは見慣れぬ風景の写真に興味を持って取り組むことができていた。



写真を分類している様子



グループによってならべ方に工夫があった

【6】本時の振り返り

普段とは違う内容の授業であったためか、生徒たちは興味をもって取り組むことができていた様子であった。授業に参加することが困難な生徒も、本時の授業ではグループ内で積極的に発言したり、写真を分類していく作業に楽しく取り組んだりしている様子であった。

【7】単元を通じた児童生徒の反応/変化

(生徒のワークシートより)

- ・自分が満たされると感じる時は、家が丈夫に作られていること、食べ物などが衛生的に問題がないこと、自分がしたいことをできているときなのかなと感じた。
- ・自分にとって欠かせないものは、自分の好きなことに集中すること。もし自分がこの国に行くなら、食べ物、街の様子などたくさんのかんじ取りたい。
- ・家の壁に絵を描いているのが気になった。日本ではあまりないものなので、見てみたいと思った。
- ・人が楽しそうにしていたり、喜んでいたりする写真や瞬間を見ることが良い。
- ・自分にとって欠かせないものは、ご飯がおいしいこと、スマホが使えること。
- ・都市化が進んでいる部分とそうでない部分とがあって、色々な景色や街の様子があり、一つの国でたくさん楽しめそうだと感じた。
- ・自分にとって欠かせないものは、人と人との関わり。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

社会科の地理分野で世界各地の暮らしや自然、産業、人口、宗教などについて学習しているが、ひとつの国に焦点を当てて学習はしていない。本校で途上国について学習する機会は社会科のみであり、アフリカの途上国について地理分野で学習しており、南米の途上国について知るのは今回が初めてである。

<p>(授業後)</p> <p>個人思考の部分において、以下のような感想や考えを書いていた。</p> <p>「写真を分類し、どのようなことを読み取ることができるか生徒同士で意見交換をしたことで、少しペルーに興味が出てきた」「人とのつながりを作り、安心できる環境づくりが必要」「満たされるためには自分だけでなく、人と人の協力が必要」</p>	
<p>【8】自己評価</p>	
<p>1. 苦勞した点</p>	<p>実施することができる授業が1回限りということもあり、今回はあくまでも生徒たちが海外に興味をもつきっかけづくりの内容にしたいと考えた。生徒たちにとっては、写真を見ても話を聞いても、なかなか実感が湧きにくい内容のものであることが予想されるため、ペルーに関する資料のどこに焦点を当てるか、こちらが意図することと、生徒の理解との間に食い違いが生じないように伝えることが難しいと感じた。</p>
<p>2. 改善点</p>	<p>ワークシートの個人思考の部分は、書き出しの選択肢をもう少し絞ってもよいと感じた。選択肢が少ないほうが、生徒の変容を見取りやすいのではないかと思う。また授業の回数をもっと確保し、ペルーがどのような国であり、抱えている問題や良い部分などについて思考を深める時間が必要であると考えた。</p>
<p>3. 成果が出た点</p>	<p>ペルーの社会が抱える様々な問題点についても生徒たちに伝えたが、ペルーに対しての否定的な意見はほとんど見受けられなかった。負の部分を強調しないように心がけ、そのようなことは文字にせず口頭で伝えるのみとした。また、海外も含め、ペルーに少し興味を湧いた、海外を見てみたいという感想がいくつかあったことは、今回の授業の目的と合致する部分であると感じている。</p>
<p>4. 備考 (授業者による自由記述)</p>	<p>特になし</p>

添付資料:

ペルー、リマ市内で撮影された写真(授業者自身と研修参加者が撮影したもの)
ワークシート(授業者作成)

参考資料:

2020年度JICA地球ひろば主催 国際理解教育／開発教育指導者研修 授業実践事例集
社会科地理分野(東京書籍)

添付資料:ワークシート(授業者作成)

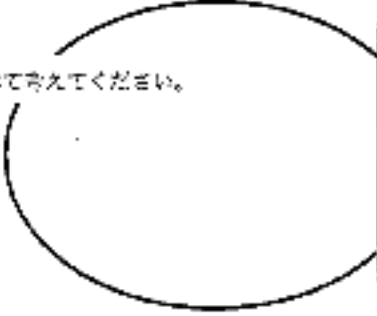
Where is here??(ココはココ?) 1年 組 番 名前 _____

授業の目的： 自分たちが満たされるもの どんなもの？
自分たちが満たされるとき どんなとき？

(グループワーク)

1. 皆さんから見て、この国はどのように見えますか？

横並びに写真を並べて考えてください。



写真をならべるときのルール

- ・心の目で感じできる・・・片の中へ
- ・物の目で感じる・・・片の外へ
(消しゴムが削いたものは中心へ)
- ・顔で感じる・・・自分だと感じるもの・・・片の外へ
(写真が通なならないように)
- ・写真の枚数が多ければなるべく早く作業を！
- ・例の写真がわかりにくいものに質問してもよい！
- ・分類は直感的に・・・考えすぎない！

2. グループで話し合った結果、〇〇国だと思っ ！！

この国は、 _____ 国 だ！

理由を各グループごとに発表してください。

皆さんが整理した写真は、 _____ 国のものです。

イメージしてはあくものにはこだわらずか！

_____ 国の概要

かみりや動画を見る。この概要を覚えること！

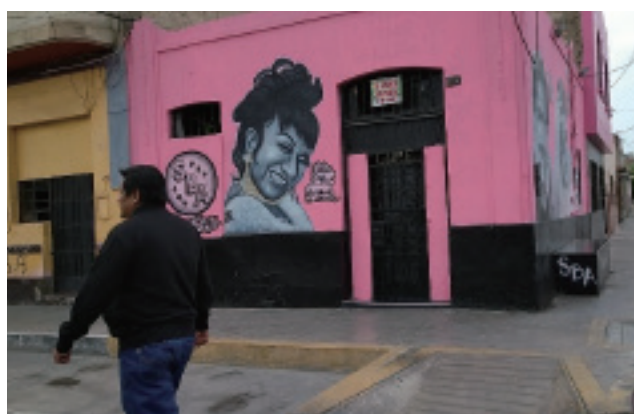
(個人で考える)

3. ならべた写真を見て、「自分が満たされるもの・満たされること」は何かについてもう一度考えよう。

自分にとって大切なものは _____ かもしれない。もし自分がこの国に行くなら _____ 心が落ち着くこととして _____ 自分が海外の誰か人と知りたくなる。

写真がどの様なところに興味をもったか _____ 見たいと思った内容は _____

添付資料:ペルー、リマ市内で撮影された写真(授業者自身と研修参加者が撮影したもの)



単元名:多文化共生と防災 高校生ができることを考えよう		
氏名:益田 由布子	学校名:兵庫県立舞子高等学校	
担当教科:地理歴史科・公民科	実践教科:公民科(公共)	
時間数:2時間	対象学年:1年生	人数:80人

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標(評価の観点を意識して設定):			
防災の取り組み例を参考に、多文化理解の必要性を理解する			
異文化を持つ人たちと防災について取り組む方法を仲間と協力して考える			
【2】 単元の評価 規準	(ア) 知識・技能	多文化共生や防災について、南米の例を通して理解する	
	(イ) 思考・判断・表現	班員と協力しながら、ケーススタディを考える	
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	グループワークに積極的に取り組んでいる 新聞記事や動画を視聴し、意見を述べる	
【3】 単元設定の 理由	<p>普通科1クラス40人と環境防災科1クラス40人で同時に授業を実施する。授業者がペルーへ訪問した際に本校卒業生と現地で面会する機会があり、彼女は卒業生として、防災の専門家として、海外居住者として、多角的視点から在校生に経験や知見を提供していただけると感じた。本学で防災を専門的に学ぶ環境防災科だけでなく普通科の生徒にも彼女の知見を共有することで、科を特定することなく全ての人にとって自分ごととして捉える機会としたい。</p> <p>普通科生徒は、真面目に授業を受ける傾向が強い。多くの意見は出さないが、一人一人が考えて意見を持つ様子が見える。進学を考える生徒が多い。年3回の学校全体での防災訓練が防災を考える機会となる。</p> <p>環境防災科生徒は、活力があり思ったことをそのまま意見として出すことが多い。一部生徒が授業に集中しない時があり、幼い面が見られる。1クラスしかいないため、3年間を通じてクラス替えはない。そのため、いつも同じ仲間と授業を共にすることが多い。科単独の授業が多く、他のクラスの生徒と授業を受けることは稀である。卒業後は進学・就職と分かれる。学校全体だけでなく、校内や校外での防災活動に参加し、自ら動ける人になることを目指す。</p> <p>今回、2科を混在させた班活動をすることで、それぞれの特性を活かした活動ができることを期待したい。</p>		
【4】展開計画(全2時間)			
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	多文化共生と防災について、自分と関連する人が深く関わっていることを知る	ペルーで活動する卒業生の経験や知見に触れる 新聞記事を読み、本校卒業生の活動や考えを知る	神戸新聞記事 2023年9月24日「ペルーに伝える防災(上)」

		卒業生の講演(学校Wi-Fiに不備がないようにするため、事前に動画を作成)を見聞き、気づいたことや感想を事前に持つようにする ペルーの避難訓練の様子に触れ、国により文化や考え方が異なることを理解する	動画(卒業生と授業提案者の対談) PPT(卒業生作) PPT(授業者作)
2 本時	多文化共生と防災を組み合わせて、自分たちにできることを考える	2クラスを混在させて班活動をする 普通科と環境防災科でそれぞれの特性を活かしながら、考えを共有する 班で出た意見を、オンラインで繋いだ卒業生からコメントをもらう	ZOOM パドレット(意見共有アプリ) 紙・ペン(Wi-Fi不備の場合)

【5】本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (10分)	・前回授業振り返り 講師(卒業生)紹介 挨拶(講師および生徒同士)・動画振り返り	・4人1班とし、2名ずつ異なるクラス(科)が混ざるようにする ・別科の人と班を作るため、顔合わせの機会を設ける ・パドレットの使い方に慣れる	ZOOM プロジェクト パドレット
展開 (35分)	・パドレット:問1「講師の話の印象を色で表現せよ」 ・防災と多文化共生の要点 前回の授業の要点を確認 ・パドレット:問2「神戸には南米出身者が多く住む。来日して日が浅い彼ら、日本に関心がある彼ら、日本人との交流が少ない彼ら。ある日大きな地震が起きた。高校生4人(班)で彼らのためにできることは何か」を班で話し、パドレットに提出 提出時に出席番号を入れる	・生徒の発言を引き出せるとよい ・グループ活動が行われているか確認する ・Wi-Fiが繋がらずタブレットが使用できない時は紙とペンを使用し、担当者がパドレットにあげるかZOOMチャットに入力する ・パドレットの投稿者を確認するために提出時に出席番号を入れる	パドレット(または紙とペン)
まとめ (5分)	・講師から意見への助言やコメント ・まとめとお礼	・全ての意見にコメントする必要なし ・授業後に振り返りの提出を促す	

【授業実践の様子】



実践者と講師が前回は振り返る



問2を示し、班で意見を出す



班の意見を2クラスで共有

【6】本時の振り返り

生徒たちは積極的に取り組んだ様子だった。環境防災科は1クラスしかなく、普段は他クラスと合同の授業はない。普通科と共に考えることで、普段学んだことを活かす機会となった。また、普通科の生徒も防災に関する知識は特別持たないからこそ、先入観なく取り組むことができた。2クラス同時展開のため、他の教員にも協力いただいた。

生徒同士も班内でよく会話し意見をまとめて提出できた様子が見られた。生徒がパドレットで提出した内容を生徒が前に出て説明することで、講師の卒業生との交流の機会が生まれた。ただ一方的な講義ではなく双方向でやりとりすることが、オンラインならでの授業となった。

【7】単元を通じた児童生徒の反応/変化

授業終了後の振り返りフォームに書かれた文言の一部は以下の通りである。(【8】4.⑤より)

- ・今回のお話を聞いて私にしかできないことがあるのかということを考えてみようと思いました。
- ・自分の大先輩が今海外を拠点に活動していてとてもかっこいいと感じた。自分の将来の道が広がりました。
- ・僕は今まで日本から外に出たことがなく海外の災害などが詳しくは知らなかったのですが今回の授業を終えて海外でも災害が起こっていることを改めて知ることが出来ました。また自分が今回の授業を通して印象に残っていることは、日本語がしゃべれない外国の方に対して地震が起こった際にどう行動するのかという問いが一番印象に残っています。一人ひとりが違う意見を持っていたのですがその中でも避難所では外国人スペースを作るといった意見にとっても共感することができとても印象に残っています。
- ・私は将来海外で防災を広める活動をしたいと思っていますのでごくいい体験になりました。
- ・もしものシチュエーションで考えることで実際に災害が起きた時に役にたつような考えを生み出すことができました。
- ・僕には夢があり環境防災科に入ってきたけど多文化共生と防災という日本じゃなくいろいろな人やいろいろな文化なども自分の夢に関係すると思ったのでこれからは日本だけじゃなくもっと視野を広く多文化共生と防災を考えます。
- ・日本の中でしか災害について考えたことがなかったです。世界の震災について知れて見方が変わりました。

多文化共生については、以下のような意見が出た。(【8】4.①②より)

- ・新しい文化を知るための社会:新しい考え方や工夫を知ることができる(普通科)
- ・人と人を繋ぐ社会:お互いのことを理解することで心が通じ合えるから(環境防災科)
- ・国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとする:日本人と外国人の交流できる場を設けて、コミュニケーションの機会をつくることや、国際交流協会に外国人通訳者・翻訳者を登録し、必要なときに外国人に紹介することが大切だと考えたからです。(環境防災科)
- ・互いの文化に興味を持てる社会(差別などマイナスな印象ではない):国籍や文化が違うからと言って、お互いに差別しあったり、困っている国を放っておくだけでは、世界全体としても、日本だけで見てもより良い国にはならないと思うから、お互いについて理解しあったり、認め合うことが必要だと思った。(普通科)
- ・実現すべき社会:これが実現することによって新たな考え方や発見ができるからである(環境防災科)

- ・皆が自分らしくいられる社会:多くの文化と共に生きるとのことなので、その人らしさを受け入れることと同じだと思ったから。(環境防災科)
- ・違う国の人も同じ場所で同じことをたのしくできる社会:いやいやするのではなく楽しく(環境防災科)

防災については、以下のような意見が出た。(【8】4.③④より)

- ・準備ができるもの:防災は防災学習をすると絶対に防げるものです。防災学習をすることで次の災害での被害を最小限にすることができます。私たち人間は命を落とすといきません。災害はいつ起こるかわかりません。防災学習をしても絶対に助かるとは限らない。しかし、防災学習をして備えないと被害が大きくなってしまふ。だから私にとって防災とは災害の「備え」だと思っている。(環境防災科)
- ・自分の命と大切な人の命を守り、未来へつなげるためのツール:命がないと、未来なんてないから。(環境防災科)
- ・生きるための備えや準備:備えや準備はしているから成功や失敗を防ぐことができるのでこのような理由でこの言葉を選びました。(普通科)
- ・災害から自分と自分にとって大切なものを守ること:自分はもちろん、自分にとって大切なものを守ったら、一緒に生きることができる確率が上がるから。(普通科)
- ・毎日気を付けることのひとつ:常に備えておかななくてはならない(普通科)
- ・誰かを助けるための手段:防災に関する知識がなければ、救えた命が救えなくなるだけでなく、自分の命が救えず、他人を救う機会も失ってしまうため。(環境防災科)
- ・十人十色:一人ひとりの住む場所、立地などでどういった災害や危険を防ぐかわかるものだから(環境防災科)
- ・経験:過去の震災から学び現在は耐震の対策ができ、経験を積んで技術を得ていると考えたから(環境防災科)

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

振り返りフォームに自分の思いや卒業生への感謝を述べる生徒が見られ、数年南米に滞在した卒業生と直接やりとりすることで1週間程度の研修でペルーを訪ねた授業実践者から話を聞くよりも、海外への関心を持つ機会となった。

普段と異なる科の生徒と話し合うことで、それぞれの科と交流する機会となった。それに伴い、今まで学んだことや経験したことを共有し、新たな視点を持つことができた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

外国そのものに関心があるが国外に出たことがないため、外国の文化や生活についての知識が十分でない。外国=英語の意識がある。南米については、ただ漠然と遠い国としての認識がある。

海外での災害の話を知る生徒もいれば知らない生徒もあり、多様である。

(授業後)

卒業生とオンラインでつなぎ、ペルーにある卒業生宅の窓の外を映すことで、日本時間午前9時・ペルー時間前日午後7時の時差を体験した。卒業生が現地で活躍の様子を知ること、自分たちが今まで持っていた考え方を更新できた。自分たちが出した意見に卒業生から助言をもらったことで、認めてもらったことや自信につながる様子が見られた。

現地で生活した卒業生が写真を使用して問題解決に取り組んだ様子や現地の人々の暮らしや考え方を述べたこともあり、広く柔軟な視点を持って海外の現状を知る機会となった。一部の生徒は海外への関心を高める機会となった。卒業生の活躍を見て、自身の門戸を開く機会と捉えた生徒もいた。

卒業生から、南米の人々は踊りを好み、日本語を学ぶときはひらがなから始めるとの話があった。南米の人々とコミュニケーションを取る方法を、彼らに合わせてとる必要性を認識できたであろう。

【8】自己評価

1. 苦労した点	<p>授業時間が十分取れず、2回でまとめようとした。授業者自身が司会をしながらオンラインサポートにもいくらか関わったため、司会に専念できず、時に間を作ってしまった。</p> <p>高1の公共の授業は授業者ともう一人の教員で担当するため、授業者が担当する2クラスのみで「多文化共生と防災」について多くの時間を割くことができず、時間をかけて生徒の知的関心を十分に深められないのではないかと感じた。また、公共の授業内容とこのテーマが完全に一致してないため、教科書の流れからいつこの授業をすべきかを考慮した。</p> <p>ペルーから卒業生がオンラインで参加するため、かつ2クラス同時展開のため、卒業生の時差を含めた予定調整や時間割変更により時間を要した。</p>
2. 改善点	<p>Wi-Fiの環境を恐れて、最後の振り返りを授業中に実施できず、期日までに授業参加者全員の振り返りアンケートを回収できなかった。すぐにタブレットを起動しログインが円滑にできれば良いが、タブレットを忘れたりIDやPWがわからないなどいつまでもICT教育の壁が続いている。さまざまな授業で当たり前のようにタブレットを使う機会があれば、生徒はもっと早く使いこなせるだろう。</p>
3. 成果が出た点	<p>通常外部講師が授業へ参加するときは、講師が最も伝えたい内容を授業当日に直接生徒へ伝えていただく。しかし、Wi-Fi不備を鑑み、予めその内容を動画に収録して事前の授業で鑑賞、かつ再視聴希望者や欠席者のために動画URLをGoogleクラスルームで配信し、動画の内容を全員で確認する機会を設けた。</p> <p>また、動画視聴から数日時間を置くことで、本時の授業前に動画内容を再確認し、1回目の授業内容を学びとして捉えている生徒が見てとれた。事前動画視聴を通じて1回のみオンラインで繋ぐより卒業生との距離感も縮まったように感じられた。</p> <p>双方向で交流することで、海外への関心や生徒の将来に向けた意識を高めることができた。</p>

4. 備考 (授業者による 自由記述)	<p>授業終了後1週間以内に振り返りフォームを提出(当日の時間内に作成・提出が理想だが、多数の生徒タブレットから同時にGoogleフォームにアクセスすることでWi-Fi不調によりZOOMが切断されることを恐れ、今回は授業時間外に作成時間を当てた)</p> <p>フォームの質問項目</p> <p>①あなたにとっての多文化共生とは《 》(な)社会である 《 》に入れる語句を入力しましょう</p> <p>② ①で入れた語句の理由や補足を自由に書きましょう</p> <p>③あなたにとって防災とは《 》である 《 》に入れる語句を入力しましょう</p> <p>④ ③で入れた語句の理由や補足を自由に書きましょう</p> <p>⑤講師の石田さんへ一言</p>
---------------------------	--

添付資料:

授業で使用したスライド

第1回

多文化共生



国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと

多文化共生を目指す時に災害が起きたら？

地震が起きたら？

・外に出る



地震が起きたら？

- ・机の下に隠れる
- ・落下物に注意
- ・ガスの元栓を閉める
- ・ドアや窓を開けて逃げ道を確保



地震が起きたら？



振り返りシート

【多文化共生ってなんだろう？ 振り返りシート】

◆「あなたにとっての、多文化共生の社会とは？」

* 下線部に言葉を入れてください。その下に、その理由や補足を自由に書いてください。

_____ (な) 社会

理由や補足など:

参考資料:

JICA九州「あなたにとっての、多文化共生の社会とは？」

https://www.jica.go.jp/Resource/kyushu/office/pr/ku57pq000005kf2t-att/multiculture_05.pdf

単元名:ペルーの日系社会を通して「私たち」を考えよう		
氏名:河本 陽詩	学校名:兵庫県立須磨東高等学校	
担当教科:英語	実践教科:英語コミュニケーションⅡ	
時間数:2時間	対象学年:第2学年	人数:41人

【実施概要】

<p>【1】単元のテーマ・目標(評価の観点を意識して設定):</p> <ul style="list-style-type: none"> “people who create a meaningful bridge between Japan and the world”の一例として、ペルーと日本をつなぐ日系人について知り、理解を深める。 日系人や日本に住む外国人を取り巻く状況に意識的になり、国際社会の一員であるという自覚を育む。 		
<p>【2】 単元の評価 規準</p>	(ア) 知識・技能	ペルーの日系社会や日系人について、与えられた資料や自分で調べた情報を元によく理解し、今までに学んだ知識や自分自身の経験と結びつけて考えることができる。
	(イ) 思考・判断・表現	日系社会の歴史や日系人の暮らしに関する資料や写真、ケーススタディを通して考えたことを、ワークシートにまとめたり、グループ内で述べたりできる。
	(ウ) 主体的に学習に取り組む態度	ペルーの日系社会や日本国内の多文化に興味を持ち、意欲的に学ぼうとしている。グループワークにおいてはコミュニケーションを図りながら、多様な意見に耳を傾け、他者とともに学ぼうとする姿が見られる。
<p>【3】 単元設定の理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ✓ 児童/生徒観 ✓ 教材観 ✓ 指導観 ✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容 	<p>英語コミュニケーションⅡでは、アイルランド出身の詩人ピーター・マクミランについて学んでおり、百人一首を英語に翻訳する際の苦労や工夫が述べられている。日本文化を世界中の人に広く知ってもらおうとする彼は、まさに日本と世界の架け橋である。</p> <p>授業者はペルーでの経験を通して、日系人という存在もまた、日本とペルー(世界)をつなぐ架け橋だと考えた。“There are some people who create a meaningful bridge between Japan and the world.”という教科書の本文を手掛かりに、番外編として本単元を設定した。ペルーの日系社会についてまずは知り、そこから現代の日本社会における多文化共生について考えていく。</p> <p>神戸市に位置する本校の生徒にとって、街中で外国人を見かけることは頻繁にあっても、直接関わる機会は少なく、あくまで「他人」という距離感のようである。ただ、海外への興味を持つ生徒は多く、将来、留学や外国語学部への進学を考えている生徒もいる。ケーススタディを活用して日本に住む外国人の立場から問題点を考えてもらい、多文化社会の担い手として、周囲の人への思いやりを持ち、想像力を働かせることができるようになることを期待する。</p> <p>また、日系人や外国人を取り巻く環境に関連して、出入国管理及び難民認定法(以下、入管法)も取り上げることにした。本校にはリーガルマインド類型が設置されており、常日頃から、物事を多面的に捉える力や、法を活かして社会の調和を保ちながら暮らす力を育むことを目指している。昨今の日本社会における国際化の背景のひとつには、入管法の改正が大きな影響を与えていることに気づいてもらいたい。</p>	

【4】展開計画(全2時間)			
時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	<p>[テーマ] ペルーの日系社会を知ろう</p> <p>[ねらい] ①地球の裏側にある国に、多くの日系人がいることを知り、その背景に興味を持つ ②ペルー移民の歴史を学んでいくにあたり、想像力を働かせる</p>	<p>○ピーター・マクミランの他に日本と世界の架け橋として活躍する人にはどのような人が挙げられるかを考える</p> <p>○ペルーのイメージを全体で共有 マチュピチュ、アンデス山脈、アルパカなどを確認</p> <p>○日系人デイサービスセンターでのレクリエーションの動画を見る →気づいたことをワークシートに記入、班内で共有</p> <p>○日系人について知る・理解する 人数や国の分布、なぜペルーに日系人がいるのか、資料を読む</p> <p>○移民の気持ちを想像する 1 気持ち 2 その理由 3 持っていくもの 4 渡航までの間、何をするか 以上の4点をワークシートに書く。班内で共有</p> <p>○ペルーの日系社会について →フジモリ大統領や日系人協会の活動を知る ○NIKKI料理(フュージョン料理)について →iPadを用いて各自で調べる</p>	<p>・ペルーに関連する写真 ・お土産の品</p> <p>・ペルー日系人協会(APJ)デイサービスセンターで撮影した動画</p> <p>・外務省「日本と中南米をつなぐ日系人」</p> <p>・海外興業株式会社の移民宣伝ポスター</p> 
2 本時	<p>[テーマ] 日系人や在留外国人が抱える課題について考えよう</p> <p>[ねらい] ①現代の日本で暮らす日系人や在留外国人が抱える課題に意識を向ける ②日本にいながら、自分たちも国際社会の一員であるという自覚を持つ</p>	<p>○日系移民の歴史と神戸の関わりを知る 神戸港移民船乗船記念碑を見てどこにあるものか考える →BE KOBEモニュメントの写真で場所を確認</p> <p>○移民の苦労と日系社会の発展について知る →資料1~4を読んでWSに考えを記入</p> <p>○フォトランゲージ →日系人家庭で撮影された写真を見て気づいたことや感じたことをできるだけ多くWSに記入</p> <p>○入管法について →日本滞在ペルー人およびブラジル人の人数の変遷を知る</p> <p>○ケーススタディ(日本で働く日系ブラジル人) →班で資料を読み、各自でワークシートに記入 班内で意見を共有する</p>	<p>・写真</p>  <p>・ワークシート1&2 ・写真</p>  <p>・JICA九州「多文化共生ってなんだろう?」WS(ケーススタディ4)</p>

【5】本時の展開			
過程時間	学習活動	指導上の留意点(支援)	資料(教材)
導入 (5分)	○前時の復習 ○日系移民の歴史と神戸の関わりを知る	・ペルーへの移民開始年や日系人の数を確認させる ・神戸港移民船乗船記念碑(希望の船出)とBE KOBEモニュメントの写真を示す →国際都市・神戸は日系人とも関連があることに気づかせる	・写真
展開 ① (25分)	○移民の苦勞と日系社会の発展について知る ・ワークシート1の資料1~4を読む ・ワークシート2に考えを記入 ○フォトランゲージ(ペルーの日系人家庭での写真から) ・気づいたことや感じたことをできるだけ多くWS1に記入 ○日系人と入管法の関係を知る	・個人で資料をしっかりと読むように促す ・資料が難しそうであれば、適宜説明を加える ・紙媒体で写真を配布する ・細かな点でもいいので、どんどん書き出していくように促す ・全体共有後、追加で日系人に関する情報を提示する ・1990年の入管法の改定以降の日本滞在ペルー人およびブラジル人の数の増加に注目させる	・ワークシート1&2 ・写真
展開 ② (15分)	○ケーススタディ 日本で働く日系ブラジル人 ・班内で声に出して資料を読む ・ワークシートに各自で考えを記入 ・班内で意見を共有する際、自分になかった考えは青色で加筆	・日系人に限らず多くの外国人労働者が似た問題を抱えうることを伝える ・ロイロノートで提出してもらい、いくつかの意見を全体で共有	・『ペルーを知るための66章』 ・出入国在留管理庁資料 ・JICA九州「多文化共生ってなんだろう?」ワークシート(ケーススタディ4)
まとめ (5分)	○本時の感想を記入しワークシートを提出	・ロイロノートで提出	

【授業実践の様子】

導入 神戸港移民船乗船記念碑の写真を見ている様子



展開① フォトランゲージ 班に1枚渡された写真をみんなできよく観察し、盛り上がっていた



展開② ケーススタディ ワークシートの事例を読んでいる様子



【6】本時の振り返り

神戸港移民船乗船記念碑の写真を「どっかで見たことある!」という声意外にも多く上がった。メリケンパークにあると明らかにすると「確かにあるわ」「見たことある気がする」「全然わからん」などと話していた。導入として、南米移民の歴史を身近なものとして捉えることができたようだ。

ワークシート2で【資料3】にある「日本人の持つ連帯の精神と組織力」とはどのようなものかと思うかを聞いた際には「体育会で自分の組のために戦ったり応援したりして一致団結する」「集団行動や整列」といった例が出てきたほか、「男子バレーボール日本代表の強さは日本人の団結力にあると言われている」といった例を出した生徒もあり、ペルーに渡った日本人たちが辿ってきた歴史と自分たちの間に通じ合うものを感じられた様子だった。

フォトランゲージでは、班内でとても活発にコミュニケーションをとって、授業者が気づいていなかったような隅々にまで目を光らせて観察していた。現地の生活の様子を知り、想像力を働かせ、自分たちとの共通点と相違点の両方を見つけており、異文化に触れる上でとても有効な手法だと感じた。

【7】単元を通じた児童生徒の反応/変化

たった2時間の授業だが、日系社会について理解を深め、地球の裏側の国でありながらペルーを身近に感じることができたようだった。それぞれの立場から気持ちや状況を想像し、クラスメートと活発に話をしながら、提示された問いにしっかりと向き合っていた。以下、授業全体の振り返りの生徒記述を大きく3つの項目に分けて引用していく。

1.日系社会や日本の文化に関するもの

- 日系人が日本の文化や言語をたとえカタコトでも難しい日本語が使えなくても大切にしてくれることが嬉しいなと思いました。
- 昔の日本人が他国へ移住し、慣れない環境の中で一生懸命働き、そこで築き上げてきたものが現代にしっかりと残り、受け継がれているのを知り、自分も日本の大切な文化をしっかりと繋げていこうと思いました。
- 整理整頓とか日本でよく聞く言葉があったり苗字が日本語だったり、知らない国だけどなんとなく日本っぽい感じがして行けるなら行ってみたいと思った。他にも日本の文化を大切にしてくれている国があるんだったら知りたいし行ってみたい。
- キリスト教だけど先祖は仏教スタイルで奉るというのは宗教が混在しまくっている日本人から見ると割と軽い反応になりがちだけど、欧米のキリスト教一本の国から見るととんでもないことをしていると思われるはずなので、それだけ器用にできるのも日系人ならではのかなと思いました。

2.移民の努力と困難に関するもの

- 悪環境でも差別に負けず日本人としての誇りを持ち、労働環境を確立したのは本当に尊敬しかないです。日本人の連帯の精神と組織力がペルーでも浸透しているので、自分も日本人としてこの心を持ちこれから生きていきたいです。
- 昔、ペルーなどの南米に移った人は何もわからないなりに努力して生活したのだなと改めて感じました。さらに今の日系人はその先祖に感謝しながら生活していてすごい心がけだと思います。
- 一番印象に残っていることは、ペルーに行っても日本の考えや価値観を大切にされていて、それを代々受け継いでいるからこそ今も残っているということです。私がもし、外国に急に行かされて、同じ立場におかれたら不安と困惑で日本の考えよりもその国の文化にのまれてしまうと思ったから、当初ペルーに行った人たちが苦難の中でも自分たちや今まで暮らした日本を大切にしている考えがすごく素敵だなと感じました。

3.差別の問題意識と共生の大切さに関するもの

- 外国人に接する時こそ、日本人が持っている思いやりや連帯の精神を示すべきだと思います。
- 個々の特徴を尊重して日系人に関わらず人を卑下するような偏見・差別がなくなって海外の人が住みやすい国をつくるべきだと思います。
- 夢を叶えるために異国の地で異文化を受け入れて、奮闘する姿に心打たれた。日本も外国人を手厚くサポートする仕組みをつくったり、気軽にコミュニケーションをとってあたたかく受け入れる態勢をとればよいと思った。
- これからも日本に興味を持ってくれたりする日系人などはまだまだたくさんいると思います。そんな人たちを自分や国が温かく迎えられるようになればいいなと思います。

•日系人という言葉は聞いたことがあっても、実際の生活感やその人たちの考え方などはなかなか知る機会がないので、もっと国際交流していろいろな話を聞いて知りたいと思いました。授業の最後に取り組んだヒカルドさんの問題については、とても難しいことだけどコロナ禍や現在、日本で多くの人が直面している問題だと思うので、もっと社会全体で考えられるべきだと感じました。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

教科書で日本文化を海外に発信する外国人について学習していたため、日本文化が海外でも親しまれていることへの驚きや喜び、日本の良さを改めて認識したと言及する生徒が多かった。海外で日本語がどのように学ばれているかについて興味を持った生徒もいた。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容】

(授業前)

国際理解講演会やJICA海外協力隊のOBの方のお話を伺う経験を通して、途上国や異文化に関する知識は多少身につけていた。しかし、どこか遠くの国の特別な話というような印象もあった。海外に高い関心を持つ生徒がいる一方で、英語に抵抗があって、外国への興味もなく、日本以外のことを知らないまま日本が1番と考えている生徒もあり、少しもったいないと感じることもあった。

(授業後)

外国に行かなくとも日本国内にもこういった事例があり、多文化共生のための行動が求められていることに意識が向いた。「神戸の街が外国とのつながりの大きな役割を担っていたということは嬉しいことだと思った。」というコメントもあった。ケーススタディでは、困っている日系人のために友達としてできることとして「日本語や漢字の勉強を手伝う」「家に呼んでご飯を一緒に食べる」「話を聞く」「特売日を教えてあげる」「相手が傷つかないように発言に気をつける」といった生活ベースで寄り添おうとする意見が見られた。

【8】自己評価

1. 苦勞した点	<ul style="list-style-type: none"> •伝えたいことがあまりに多く、内容を絞るのが大変だった。歴史を知った上で現状について考えてもらいたいという思いがあったので、前半でかなり時間を費やす形となった。 •入管法を取り上げようとしたが、2時間の授業の一部に組み込める単純なものではなく、どこまで伝えるかが悩ましかった。現代の日本が多くの課題を抱えていることであり、丁寧に扱う必要があると感じた。
2. 改善点	<ul style="list-style-type: none"> •今回は授業者が見聞きしてきたことが中心になったので、日系人のお話を直接聞く機会を設けたい。もっと探究的な取り組みも取り入れてみたい。 •持ち時間の関係で英語の授業内での実施となったが、内容が国際理解に偏ってしまった。日系について述べられた英語の資料を読ませたり、英語で意見を述べさせたりしたい。 •内容が盛りだくさんで、翌日に持ち越した部分もあった。分割し、各活動にもっと時間をかけて生徒の考えを深掘りすればよかった。 •「整理」「整頓」「清潔」などの日本語が日系人学校で使われている写真を示したが、広く外国語に触れるきっかけを与えるべく、次はスペイン語を合わせて紹介したい。

3. 成果が出た点	<ul style="list-style-type: none"> ・「ペルーに行ってみたい」「こんな国もあるんや」「他の国についても知ってみたい」という声が上がリ、海外への興味を引くことができた。 ・日系社会を知ること、自分たちの中に根付く日本の良さに気づいてもらうことができた。 ・多文化共生のために自分たちには何ができるか、どんな社会であってほしいか、ということを考える場を生み出した。
4. 備考 (授業者による 自由記述)	<p>日系人というテーマのおかげか、普段は外国に興味を持ってない生徒も親近感を抱くことができたようだった。未知なるものや自分と異なるものへの抵抗を持つ生徒は多い。しかし、少しでも繋がりを見出すことができれば、グッと身近に思えることを今回実感した。生徒たちが知らない世界に一步踏み出し、人との違いを個性やよさとして感じられるきっかけ作りをしていきたいと思う。</p> <p>今回の教師海外研修は授業者にとって初めて国際理解教育に深く関わる機会となった。他の参加者の方から学んだことが非常に多くあり、とても感謝している。ペルーで経験したことを元に、これからも情報をアップデートしつつ、積極的に国際理解教育に取り組んでいきたい。</p>

添付資料:

- ・JICA九州(2022)「多文化共生ってなんだろう?」
(<https://www.jica.go.jp/domestic/kyushu/office/pr/index.html>)
うち、本時で使用したのは「ワークシート ケーススタディ4」
- ・愛知県(2023)「みんなでつくろう多文化共生社会」
(<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/tabunka/tabunkarikaikyoza.html>)
- ・外務省(2018)「日本と中南米をつなぐ日系人」
- ・出入国在留管理庁「令和4年末現在における在留外国人数について」
(https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00033.html)
- ・細谷広美(編著)(2012)『ペルーを知るための66章【第2版】』明石書店

参考資料:

- ・石川達三(2014)『蒼氓』秋田魁新報社
- ・外務省「ペルー共和国」
(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/peru/index.html>)
- ・木下理仁(2019)『国籍の?(ハテナ)がわかる本 日本人ってだれのこと?外国人ってだれのこと?』
太郎次郎社エディタス
- ・松田真希子(編著)(2022)『「日系」をめぐることばと文化 移動する人の創造性と多様性』くろしお出版

※各ウェブサイトの最終閲覧日はいずれも2023年12月10日

日系学校での
授業実践：
災害時のとっさの対応を
考えました



日系学校での
授業実践：
日本の空手を紹介！



日系学校での
授業実践：
日本のびっくり文化紹介
を行いました！



ペルー最古の
日系学校である
ホセ・ガルベス校、
校長の講話



日本・ペルー
地震防災センターで
日本の防災協力について
知りました





首都リマから車で1時間ほど移動すると、都心部とはまた違う風景が広がっています



日系学校の5S:
右側通行が徹底されています



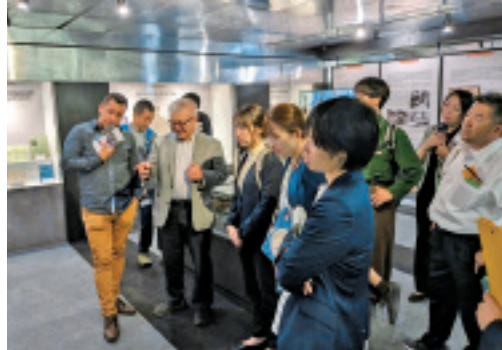
ペルー教員に対して、日本の防災教育の事例紹介を行いました



最終日に訪問したフェイ・アレグリア33校では学校全体から熱烈歓迎を受けました



A large grid of graph paper for taking notes, consisting of 20 columns and 30 rows of small squares.



JICA 関西

独立行政法人国際協力機構 関西センター

〒651-0073 神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2
TEL:(078)261-0341(代表) FAX:(078)261-0357
e-mail:jicaksic-kaihatsu@jica.go.jp
<https://www.jica.go.jp/kansai/>

2024年2月発行